
闇牡鹿、跳ねる！

秋津 霜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇牡鹿、跳ねる！

【Nコード】

N2548Z

【作者名】

秋津 霜子

【あらすじ】

舞台は江戸時代のある街、裏葉柳。

物人の在り様を 聞き通す 力を持ち、養生院で雑役として働く見えずの少年・鹿郎は、同院所属の女医・さわが連絡を断った事を受け、彼女が最後に往診した御店・銀洲へと赴いた。

途中で銀洲に勤める知り合いの少女・おはるが合流し、銀洲に到着するが、見えているおはるが銀洲だと断言する御店は、今までとは正反対の雰囲気なたたえている。

不審に思った鹿郎は、独断の末、店内に無断侵入するが……

ふられば喫茶にて、同作品の【空改行有り・サブタイトル無し】仕様のものが掲載されています

『クリエイター応援サイト for Writer』にこの作品の原型である『闇牡鹿、挑ねる！ 錯のあざない』が掲載されております。今はまだ掲載しておりませんが、後々こちらの『闇牡鹿、挑ねる！』も、改訂版として掲載するかもしれません

闇牡鹿、跳ねる！前編（前書き）

GA文庫大賞・投稿Q&Aより

Q：同人誌で発表した作品を応募しても良いですか？ ホームページで公開している作品を応募しても良いですか？

商業誌、あるいは商用ページに掲載された作品でなければ、基本的に問題ないのだゾ！
ぜひぜひ応募してくださいね。

……という事でしたので、応募作『闇牡鹿、跳ねる！』、こちらでも発表してみようと思います。（^^;）

仕様は【行頭一字空け・空改行無し・句読点』。』で改行】。

【空改行有り・サブタイトル無し】仕様のは、『ふられば喫茶 The lucky13!http://www1.bbiqu.jp/furarebo13/』にて掲載しておりますので、見易い方でご覧頂ければと思います。

応募作品故、万が一の非常事態の際には、投稿を削除させて頂く可能性があります事、僭越ではありますが、何卒御了承くださいませ。

『クリエイター応援サイト for Writer』にこの作品の原型である『闇牡鹿、跳ねる！ 錯のあざない』が掲載されております。今はまだ掲載しておりませんが、後々こちらの『闇牡鹿、跳ねる！』も、改訂版として掲載するかもしれません。

闇牡鹿、跳ねる！前編

江戸大川の五番支流を南に下ると、やがてその名が苔川に変わる。そしてその周囲には、裏葉柳と呼ばれる街が広がっている。

南町方面への流通の核たる街に相応しく、その風俗は二番堺と称されるほど賑やかで、潤いの絶える事は無かった。

が、同時に。

素性の知れない輩が集い、巻き起こす面倒事も、それなりにある。裏葉柳とは、そういう油断のならない街でもあった。

遅い朝、薄雲越しの陽射しの中。

苔川に架かる水柿橋は、人と物とでごった返していた。

橋の上ばかりではない。

川面の方でも、荷舟の群が順を競い、往来を成している。

人のざわめき、踏み締められる橋板の響き、舟縁を叩く櫓竿の響き？？かの鳴響が聞こえてきたのは、そんな中での事だった。

「びゅっ……！」

まるで、湿気た山河に響く、鹿鳴。

それは忙しく行き交う物人の間を吹き抜け、欄干の側で立ち話す、二人の男の耳にも届く。

その片割れたる小柄な老侍は、思わず周囲を見回した。

「鹿鳴？」

見た目にそぐわぬ高めの声音に、対した旅装の男は、深く被った編み笠の縁を持ち上げる。

「鹿鳴、ですか……確かに、そうとも聞こえますな」

何事か、思い出したのだろうか。

涼し気に応えた男は、日に焼けた、浅黒い頬をほころばせた。

途端に、それを見留めた人々の眼差しが、すれ違い様、こちらをちらほら見返してくる。

舌打ちを漏らし、老侍は、面を伏せた。

旅装の男は、特に人を意識して、笑みを浮かべた訳ではない。

なのに何故か、この界隈の俗人共は、男の一挙手一投足???いや、顔色一つに飛びついてきて、べったり絡み付こうとする。

あまり目立ちたくない老侍にとって、男のそんな性質は、厄介以外のなにものでもなかった。

とぼつちりで、こちらの顔を覚えられたりしたら、冗談では済まされない。

伏せた面の下の、そんな思いを知ってか知らずか、男は訥々と言い継いだ。

「橋の向こうの桑染に、養生院という医院がありました。そこに雇われている、不思議な小僧が発しているものです」

「小僧？」

「この地に馴染みのない秋津様は、ご存知あるまいが……」

何処かで、喧嘩でも始まったのか。

遠くに聞こえる怒声と嬌声を聞き流しつつ、男は僅かに首を傾げた。

「この裏葉柳では、結構知れた小僧です。医師の侍従や使いつ走りをしているらしく、私も御店で、幾度か言葉を交わした事がありました」

「ほほう」

「……そういえば、少し前。ついに御店の誰ぞが、養生院に足を運んだとか。ひよっとしたらそれ絡みで、出向いてきたのかもしれない」

「……うぬは未だ、銀洲とつながっているのかえ？」

秋津と呼ばれた老侍は、男を仰ぎ見た。

その身の丈では、誰と話をしていても、自然とそうなってしまいがちだが、六尺余もある身ノ丈が相手だと、正しく仰ぎ見る形にな

ってしまう。

男は、苦笑を浮かべた。

「いやいや、単なる風聞にございます。あの御店、今はもう……」
と、言いかけて、そのままふつりと声を切る。

今、男の懐には、三つの大事が収まっていた。

一つは、今までの仕事全てを清算して得た、莫大な富。

そしてもう一つ、目前の秋津達を 使って 得た、これまた膨大な富。

そして最後に、これはちょっとした博打だったが、目前の秋津達を 売って 得た、御上直筆の交通手形。

この極秘に得た三つ目の大事に免じて、最後に知った事くらいは、話してやってもいいかもしれぬ??

「あの御店に……何かあつたのかえ?」

秋津の声に、男の呼吸が、僅かに詰まった。

慌てて焦点を呼び戻すと、鉄針の如き秋津の眼差しが、自分を凝つと見据えている。

男の総身が、一髪の間にも栗立った。

「いやいや」

沸き上がる怖気を、強いてなだめつけた男は、再び苦笑を浮かべてみせる。

人が絵空事だ、馬鹿を言うなどと笑って断じる微かな可能性を、事実と捉えて厳密に計算できる??その働きが、身ノ内でこう囁いた。

この老侍共が、御上に売られた事を悟る頃には、きっと全てが終わっていていよう。

とはいえ、誰か一人でも御上の網をかいくぐり、生き残ってしまった際は、相当面倒な事になる。

所詮は世間知らずの田舎侍、しかし単純に侮るには、その牙はあまりに鋭い??

「どけ! どけどけいっ!」

橋の向こう側から、警邏の下っ端達が、喚きながら走りきた。

途切れる事のないざわめきと、小さな悲鳴を掻き分けながら、瞬く間に駆け去っていく。

男はそれを見送りながら、笑みを絶やさず言い挙げた。

「先も言いましたが、単なる風聞を聞いたままで。まあ仮にあの小僧が、御店に用があつてきたとしても、此度の件には、些かの影響もありませんまい」

「だとよいが……」

「これはこれは、筑摩武者の総代とは思えぬ御言葉……」

男が突然、子供の様に笑いだした。

からからと笑う男を睨みつつも、秋津は再び、舌打ちを漏らす。

立国の基礎を成す人心の墮落によって、江戸の勢いを削ぎ落とすと同時に、筑摩ノ国の歳費を裏から補強する??この目的で始められた、秘薬 鰐 の密売。

主君の密命を直々に受け、大江戸南方面への販売網を探る中、自ら名乗り出てきたこの男を仲介して始められた計画は、ついこの間まで、順調に機能していた。

しかし、先日。

あれだけ慎重に進めていた計画が、どういう訳か、御上の知る処となった。

こちらの気付きが一足早かったのが救いだが、お陰で男は長年勤め、自らに合うよう作り替えてきた大店を捨てる羽目に陥り、自分達も、今回の取引を最後として、祖国に引き揚げねばならない。

そんな意図はないと判つてはいるが、総代として筑摩側の全てを仕切ってきた秋津には、その高笑いも、自分を嘲笑う声に聞こえた。「まあ、いつも慎重な秋津様らしいといえば、そう思えぬ事もない」流石に気が引けたのか、男はくく、と笑い納め、小さく咳払う。

「この街の輩は、信用できぬでな」

ゆっくりと目を閉じて、秋津はぼそりと呟いた。

「どいつもこいつも、己の事しか考えておらぬからの。己の都合の良いように、話の一部を隠してみたり、尾ひれを付けたり、筋をこ

つそり組み替えてみたり……」

「何の、それは裏葉柳に限った事ではありませんまい。筑摩ノ国とて、人が増えて豊かになれば、いずれこうなつて参りましょう」

「そしてうぬのような我欲の権化を、人望厚き旦那様、と崇め奉るようになるのかえ？ 長生きは、するものではないのお」

皮肉が嗅ぎ取れなかつた訳ではあるまい。

しかし男は、一際優しく微笑むと、秋津を見下ろし、ゆっくりと頭を下げた。

「では秋津様、私はこれにて……秋津様方の御尽力は、終生忘れませぬ。再び筑摩で相見えるまで、是非ともお健やかに」

「今宵の取引に、抜かりはなかるうな。万が一にも、殿の御威光に傷が付こうものなら、地の果てまで追いつめて、そつ首たたき落としてくれようぞ？」

「ご安心くださいまし。私が唯一信頼する者が、急ぎの正規医薬品として、手配を引き継いでおります」

「うむ。ひとまず今は、それが何よりの大事」

秋津は一つ、咳払つた。

「色々申したが、邦介。うぬがおらねば、事は今少し、難しくなつていたのであるう。我が殿に代わつて礼を言う……大儀、御苦労」

「恐れ入りましてございます。では」

再び、鹿鳴が響く。

それが当然の事なのか、物人の流れは、たゆたう気配すら見せない。

踵を返した旅装の男？ 邦介は、その流れにするりと没し、二つも瞬きをした時には、何処にも見えなくなつていた。

人々のざわめきは、途切れる事を知らない。

雨気混じりの温風に吹かれ、秋津はやつと、肩の力を抜いた。

ずいぶんと長い間、立ち尽くしていたような気がする。

認め難い事だが、あの邦介のせいに違いなかつた。

御上というものは、愚かだが、決して馬鹿ではない。

だから、事が御上に知れたと判った時からつい先程まで、秋津は邦介を始末しようと、常にその機を伺っていた。

しかし、できなかつた。

今この時勢に、一人百斬を必修とする筑摩武者の総代たる自分より、邦介の方が、武技に長けていた訳ではない。

それだけは、断言できる。

が、その技を繰り出す機会を、丁寧に削ぎ落としていく事で、あの男はまんまと逃げ仰せてしまったのだ。

実に腹立たしい事ではあるが、認めぬ訳にはいかなかった。

あの男なら、途中の関所も巧くすり抜け、筑摩に辿り着けるだろう。

筑摩の領域に入ってしまったえば、我が筑摩藩主の御威光が、御上から邦介を守る。

後は今日の取引を無事に成し遂げ、筑摩に引き揚げてから、ゆっくりと始末の機会を伺えばよい？秋津は、欄干を離れた。

騒ぎ駆ける子供達を避け、ゆらゆらと行く見世屋台に道を譲る。

割を行き交う若衆は皆、首に色とりどりの薄布を巻き付け、娘達は押し並べて、白く点々と光る髪を、これ見よがしに結い上げている。

今は慣れたが、主君の密命を帯び、この地に初めて赴いた時は、肝がつぶれるかと思つた。

この地の若衆は、皆して風邪を引き、娘はしらみが光って見えるまで、髪を洗わぬものなのか、と。

幸い恥をかく前に、邦介から、身を飾る小技の一つと説明してもらい、納得する事はできた。

しかし何が嬉しくて、髪に白砂を混ぜてまで、光らせなければならぬのか。

それは今もって判らない。

やれやれ、やれやれ？この時ばかりは見た目そのまま、小舅の心持ちで歩く秋津の背後から、荷車の音が聞こえてきた。

「はい、ごめんよごめんよっ！」

景気良さ気な怒鳴り声と、走り去った荷車の轍を、人の群が埋め戻す。

と、三度、あの鹿鳴が響いた。

「びゅっ……！」

随分と、近い。

『橋の向こうの桑染に、養生院という医院がありまして。そこに雇われている、不思議な小僧が発しているものですか？』

ふと思い出された邦介の言葉に、秋津は周囲を仰ぎ見た。

混ぜ返された人々の声を突き上げるように、舟具の打ち合う鈍い音が、足下に響く。

と、突然。

履いていた草履を鳴らし、秋津は鋭く振り返った。

「その小僧、待て」

甲高いが、控え目だった秋津の制止は、雑踏に紛れ、大きくは響かない。

しかし、只一人。

少年が、踏み出しかけていた足を止めた。

小首を傾げると、秋津の方に向き直る。

「お声に覚えがないのですが……旦那、どちら様で？」

見目にそぐわぬ、落ち着いた受け応え。

まだ十代の初めだろうか、小柄な五体を、鳶茶の筒袖、木綿の股引きに包み、素足にわら草履を履いている。

鬚の無い総髪頭を、鳶茶の薄布でしっかりと覆っている以外に、取り立てて代わった処はない。

しかし、秋津の眼差しは唯一点、その少年のつら面だけに注がれていた。

そう、それを最初に見た時は、よくできた冗談だと思った。

流石は裏葉柳、芸人の類まで、隙の無い真似をする??などと。

しかし、少年の閉じられた双眸は、今ここに至っても、ぴくりと

も動かない。

果たして、いつから目を閉じていた？

目を閉じたまま、ここまで歩いて来たのか？

頼る人も、杖も持たず、徒手のまままで？

そしてこの人ごみの中、何故自分が呼ばれたと、正しく判じる事ができた？

一体、どのようにして??そんな秋津の思惟の尻尾を掴むように、少年は再び、口を開いた。

「旦那？」

応える様に、秋津の手が動いた。

袂を探り、取り出した小銭を指に挟むと、軽くたわめて弾き飛ばす。

その気で弾けば、燭台の炎を叩き消し、戸板を穿つ事もできたが、銭は突っ立ったままの少年の胸を、パタリと叩いて落ちただけだった。

「ん？」

呟いた少年は、ここで初めて、胸??銭の中った辺りを、目を閉じたまま探り始める。

秋津の喉が、感嘆を呑み下した。

その目が生きているのなら、流石にもう、開かれているだろう。

そしてこの奇妙な間合いを見回して、何する気かと問い掛ける。

見た目に反して好戦的な性格なら、殴り掛かってきてもいいのだ。最早、間違いない。

こやつは本当に、目が使えないのだ。と、突然。

少年の面に、苦笑がふつと浮かび上がった。

「旦那……オレに何か、御用でも？」

釣られて苦笑を浮かべた秋津は、問いに応えようとして??しかしそのまま、ぎくりと震えた。

少年はただ、苦笑を浮かべて立っている。

誰もが、そう見るだろう。

なのに秋津の左の手指は、いつの間にか、腰の小太刀に添っていた。

そんな意志など全く無いのに、今にも刃を切り放とうと、体がするする動いていく。

そうなつて初めて、秋津はこの少年から、あの感触を嗅ぎあてた。覚悟の抜刀を果たした武者の、相手の肝を突ん抜く眼差し。

そして鬪理を忘れた果てにたゆたう、無想の暴虐。

しかし何故そんなものが、こんな見えずの少年から？

橋がぐらりと揺れた気がして、秋津は慌てて、両の足を踏ん張った。

そして渾身の力をもって、念じる。

見えずの子供相手に負けるなど、髪一筋も思わない。

しかし今は、戦つてよい時ではない！

「用がないなら、行きますよ？」

声音が、秋津の肢体を突ん抜けた。

そしてこの時初めて、二人の周りで、物人の流れが澱んでいる事に気づく。

一騒動への好奇と期待が、細波のように押し寄せて、秋津は些か狼狽えた。

町人如きの囲みなど、破つて逃げるに僅かな苦労も無い。

しかし後の大事を思えば、ここで目立つような真似は、極力控えておきたかった。

小太刀に添つた左手を、右手で強く制する。

そして辛うじて、声を絞った。

「不躰ながら、尋ねる。おぬし、その目は……」

「見えませんよ。もうちょっと子供の時分に、大怪我しましてね」
きつと何時も、聞かれる事なのだろう。

古傷だらけの太い指が、薄布越しの額を突ついた。

その仕草に促されて、秋津は言い継いだ。

「あ、足をくじいて、動けなくての。今、誤って飛ばしてしまった
銭を、拾ってもらおうと思ったのじゃが……」

「ああ、そいつは難儀な事で。御無礼を致しました」

我ながら、苦しい??と思っただが、少年はそれで、納得できたら
しい。

その唇から、見事な鹿鳴が迸った。

「おお……」

秋津と、周囲を取り巻く群衆から、どよめきが漏れる。

少年はそのまま欄干の根元に歩むと、そこに転がっていた銭を取
り上げた。

「はい、どうぞ」

秋津の立ち位置や、銭の位置をどうやって知ったかは、判らない。
しかし少年は、拾った銭を秋津目掛けて真っ直ぐ差し出して微笑
む。

小銭を受け取った秋津は、溜息混じりに言い挙げた。

「助かった……かたじけない」

呼ばれたような温い風が、物人の合間を吹き抜けた。

ざわめきが甦り、熱く沸いた好奇と期待が、人垣と共に解け崩れ
ていく。

少年は、何度目かの苦笑を浮かべ、首を傾げた。

「旦那、筑摩の方ですね？ 足の具合は如何ですか？ 知り合いに、
医師がいますが……」

「いや、少々休めば……そ、それより何故、拙者を筑摩者と？」

「ほんの少しですが、御言葉に筑摩の訛が少々……いや、オレの働
く場所にですね、筑摩の出がいて……だから、判ったんですけど」

「普段は……いや、仕事は何を？」

「桑染にある養生院の、しがない使いっ走りです。この界限に散らば
る医師仲間の、つなぎを取って回ったり、お供をしたりしてますが」
遙かな未来にあつてこそ、連絡のやり取りは簡単な事だが、今は
それにも人手がいる。

無論、生業とするには端事だが、それでも只の見えずの者が、徒手でやれる事ではない。

少年が、呟いた。

「あの……」

「あ、いや、すまぬが後一つ」

「はあ」

「おぬし、名は？」

「名……ですか。名は、鹿郎といますが」

「……判った。かたじけない……」

大きな舟でも通ったものか、足下の流れと泡立ちが、渦を巻いて音を散らす。

秋津の答えに刹那、眉を寄せた少年??鹿郎は、それでも小さく、頭を下げた。

そして違える事無く、裏葉柳の方向に向かい、物人の流れに紛れていく。

一人残った秋津の耳に、また、あの鹿鳴がたゆたった。

水柿橋の終わりには、火避け場と呼ばれる更地が広がっている。大火の飛び火を防いだり、災害時の避難場所にもなる広場だが、今のような平時には、大小の見世屋台が、所狭しと並ぶのだ。

「冷たい水は、如何かね……」

「押し込みだ、うつぶし明神下で、押し込みがあつたよお……」

「美味しい練り飴、いらんかえ……」

賑々しい商い声に迎えられ、橋一筋に集った人氣が、四方にほぐれて散っていく。

そのざわめきの真ん中で、立ち止まった鹿郎は、今来たばかりの橋の方を振り返った。

さっきの爺は、一体何だったんだろう？

こつちを見えずと侮った物盗りにしては、後を尾けてくる気配もないし、単なるからかいにしては、何だか妙に真剣だった。

銭を落としたと言っていていけど、それにしても随分と??と、小首を傾げた時だった。

「だーんなーっ！」

喜色一杯の甲高い声音が、鹿郎の耳朶をつんざいた。

嫌な予感と覚悟より早く、背後から首元に、小さいけれども重たい何か、どんとぶつかり、しがみつく。

頭は何とか庇ったが、もんどりうって転がり倒れた鹿郎を、周囲を歩き交う人々のどよめきが受け止めた。

「あいたたた……お、お前、おはるか！ おはるだな！」

「離さないっ。もう絶対に、離しませんからねええええ！」

「ぬああああ、離せ離せはーなーせーっ！」

薄っ黄色い砂神楽の中から響く、暢気な嬌声と必死の絶叫。

心配そうに取り巻いていた人々は、首を傾げ、互いに顔を見合わせ始めた。

「はあーなあーれえーろおおおっ！」

「いいーやあーでえーすうううっ！」

ようやく、砂神楽が鎮まり始めた。

その中から、鳥肌塗れの鹿郎と、その首根っこにしがみついた子猿??ではない、少女の姿が現れる。

固唾をのんでいた取り巻きが、一斉に吹き出し、呆れ、笑い始めた。

「何じゃそりゃっ！」

「痴話喧嘩……??」

「物好き……」

好き放題のつぶやきを残し、集った倍の早さで、人垣が解ける。にやりと笑った少女・おはるは、ここぞとばかりに鹿郎の首にしがみつき、ねっとり頬ずりした。

「んもう、鹿の旦那ってば、ほんにお久しぶりなことっ！ 用事が

なけりや、何時まで経つても音沙汰無しなんだから……うん、憎いひ、とっ」

「ぬあーっ！」

跳ね立った鹿郎は、おはるの体を力の限りに引き剥がした。

「おはるっ！ いきなり飛びつくのは危ないから止めるって、何度も何度も何度も言ってるだろっ！ 普通に名前を呼べば……」

「立ち止まってくれたとでも？ 嫌だわ、旦那の大嘘吐きっ」

「その話し方も、百年早い！」

「しょうがないわねえ、それじゃあ……」

と、おはるは一つ、咳払った。

くりくりとした愛らしさが、潮のように退いていく。

入れ代わりに浮かび上がった女猫の目色で、おはるは鹿郎をねめ上げた。

「鹿郎こそ、ここに何をしにきたのさ。あたしに構って欲しかったの？」

「何でそうなる。仕事だ仕事っ！」

「だったら、あたしと同じだね。あたしは掛け売りの集金帰りっ」

「お前こそ、嘘吐くなっ！ なんでお前みたいな子供が、集金なんか任されるんだよ。手代さんや番頭さんが……」

「あ、ソレ無理。昨日の夜、急に大型商談が飛び込んできてさ。皆、その準備に大忙しなのよ」

「だからって、お前みたいな子供に……」

「でしょでしょ？ そう思うでしょ？」

飛びつかんばかりに詰め寄られ、鹿郎は思わず仰け反ってしまう。くるりと華麗に踵を返し、肩をすくめたおはるは、溜息混じりに言い募った。

「全く、こんだけ働けるっていうのに、扱いはその辺の大人と大して変わらないんだから、嫌んなっちゃう。あたしも早く大人になって、その辺のが米粒に見えるような、おっきな御店を仕切ってみたいわー」

止めとばかりに、高笑い、からからと響く。

さっきの意味不明な爺といい、今日は仏滅だったつけ？？溜息と共に、鹿郎はがっくりとひざまずいた。

このおはるの変わり様、要は 猫っ被りの掌返し という奴だが、よほど親しい仲間以外に、こういう態度を取る事は無い。

運悪く、目撃してしまった大抵の大人は、こちら辺で己の目を擦り、耳を疑う。

しかし、今は裏葉柳でも屈指の本店・銀洲を仕切る夫婦から、『欠点は、子供である事のみ』と言わしめた少女の、これが偽り無い本性なのだ。

鹿郎は、空を仰いだ。

ようやく落ち着いた耳鼻に、雑踏の響香が甦ってくる。

頭を軽く振り払うと、したり顔で喋り続けるおはるを押し退け、立ち上がって膝を払った。

砂に汚れた袖も払う。

すかさず、おはるが手を出してきたが、今度はひょいと避けきった。

「なんで避けるのよう。砂を払ってあげようと思ったのに」

「いらねえよ。自分でできる」

「……やっぱり鹿郎ってさあ、ちゃんど見えてるでしょ。見えないうフリしてるだけなんじゃない？ 違う？」

「あっちに行けっ！」

「そうはいかない。倒れた見えずを放つといたとあっちゃあ、このあたしの名が廢るのよ」

「誰のせいで倒れたと……」

「ほらほらっ、見えてないから判らないでしょ。こことかこことか、砂塗れですよっ」

小さな掌が、腰や膝をばたばたと叩く。

それを無視して、鹿郎は歩き始めた。

当たり前のように、おはるの足音がついてくる。

走って逃げてもいいのだが、それも妙に悔しい気がして、鹿郎は少しだけ、足を速めた。

「ちよいと、あたしより大人のくせして、簡単にすねないでよつ。あたしに逢いにきたんじゃないなら、一体何しにきたってーのさつ」
「さつきも言つたる、仕事だつて。お前なんか、構つてる暇はねえよ」

「つまないわねえ……で、何を何処に持つてくの？ それとも、単なるお使い？」

「人探しだよ」

「人探し？」

踵を返した鹿郎は、おはるの方に向き直つた。

「五日程前、銀洲からうちに、今吉つて手代さんがきたんだ」

「今吉つつあんが、養生院に？」

「ああ。どうしたのか聞いたんだが、医師以外には他言できないつて、言い張つてね」

空から降り掛かる小鳥同士のさざめきと、野菜売りの群れが、往來に立つ二人の側を歩き過ぎる。

鹿郎は、小首を傾げた。

「たまたま手の空いていた、さわが応じたんだけど……そのまま往診に出ていって、それつきりなんだよ」

「さわ先生が？」

おはるの声から、愉色が消えた。

数年前、筑摩ノ国の医師一家から、養女として養生院にきた女医師、さわ。

流行の紅より新薬の匙加減を、常に気にしているような処がある。そんな性格と嗜好のせいだろうか、正直、医師としてはどうかと思われる処が多い割に、腕はまあまあ使える感じで、おはるはもとより、裏葉柳の人達からも大層慕われ、尊敬されていた。

流石のおはるといえど、少々真面目に返るのも、無理は無い。が、しかし。

そのおはるの真剣な声音は、鹿郎の耳朶に引つ掛かった。
正体こそ不明だが、嫌なうず気が鎌首をもたげ、ちりちりと背筋を炙る。

こういう時に油断すると、ろくな事にならない?? 経験則上、それを知っていた鹿郎は、増してゆっくり口を開いた。

「お前も知ってるだろ、養生院に勤める者は誰であれ、予定以上に医院を空ける時は、必ずつなぎを寄越さなきゃならないって取り決めがある。けどさわの奴、今朝になっても音沙汰一つ無くってね。だから様子を見に、銀洲に行く途中だったんだ」

「あの真面目なさわ先生が、決まり事を無視して失踪? まさか!」
「真面目っていうより、小心なだけって気がするが……まあでも実際、いなくなっちまったんだからな」

「五日前、五日前……そう言えば今吉つつあん、確かに姿が見えなかったな」

「何だ? お前、さわを見てないのか?」

「うん。でも裏口から隠し部屋に通されたら、流石にあたしも判んないし……あ、ひよっとしたら!」

「ん?」

「二人で駆け落ちしたとか! 先生美人だし、今吉つつあんが強引に迫ったりしちゃったりして、断り切れずに……」

音を立てて、鹿郎の踵が返る。

無言で歩き出した鹿郎の袖に、おはるは慌てて縋り付いた。

それを無視して引きずり、鹿郎は進む。

すれ違った幾人かが、苦笑と共に見返りをうつが、それでもおはるは、逃がさじとばかりに喋り続けた。

「ちよっとちよっと、待ってよ、鹿郎っ!」冗談、冗談だってば!
「やだもう、これしきの事で、怒らないでよう!」

「怒ってないっ。怒ってないから、オレの邪魔をするなっ!」

「いやあん、嘔吐きっ。怒ってるじゃない……ねえってばあ、その用件って、どーしても今、調べなきゃ駄目なお?」

「当たり前だろっ！　そうでなきゃ、わざわざ裏葉柳くんだりまで……」
と、袖にぶら下がっていたおはるの体が、ひよいとばかりに、鹿郎の行く手を遮った。

つんのめりかけた鹿郎が、寸での処で踏み留まる。

覆い被さらんばかりに、鹿郎はおはるに詰め寄った。

「おはる……そういう真似も止めろって、いつも言ってるだろ。蹴っ飛ばすぞ！」

「まあまあ、そう邪見にせず、ちょっと考えてみなつて。もし今、鹿郎一人で御店に出向いたつて、きつとだーれも、話なんか聞いちやくれないよ？」

「何でだよつ。こつちは養生院の、正式な使いで行くんだぞつ」

「ふつ、人の話は、きちんと聞いた方がいいわねつ」

「何だとう！」

「さつき言つたじゃない。大型の飛び込み商談が入つたつて」

僅かに、鹿郎は声を呑む。

ここぞとばかりに、おはるは滔々と喋り始めた。

「あたしの見たとこ、あの商談、きつとこつちの言い値で急場手当を弾むわよ？　それに比べりゃ、例え養生院からの正式な使いだとしても、話を聞くのは明日の夜遅く……いや、もうちょっと、掛かるかな？」

そうだった？　派手な舌打ちで応えた鹿郎は、苛々と齒噛みした。主に船荷を扱う大店・銀洲の主であるおきんは、無駄や損を何より嫌い抜いている。

それらの中には、一見無駄に見えるが、長い目で見れば、決してそうとは言い切れないものまで含まれており、御布施や寄進の類まで、全て物乞いと同じにくくってしまう。

そんな主の元で働き続ける訳だから、御店の奉公人達も、即時利益にならぬものには、相当厳しい態度を取つた。

店頭に置かれた荷数を忘れぬ様、呟き歩いて戻つた手代が、給金

をさつ引かれたとか、契約通りの日付に着いた荷物に難癖をつけ、更なる運賃割引を請求したとか。

そんな武勇伝？を数多く持つ奴輩が、巨大な利潤を釣り上げようと躍起になる中、今は一銭の得にもならない人探しの話をせねばならない。

只でさえ、見えずの、しかも子供という事で扱いが悪いのに、一体どんな仕打ちが待ってる事やら？鹿郎は、頭を抱え込んだ。

「ねえねえっ、鹿郎？」

探るようなおはるの聲が、耳に滑り込んできた。

つくつくと引つ張られる袖口を振り払い、鹿郎は、苛立ち紛れに言い放った。

「……何だよっ、もうっ！」

「さつきも聞いたけど。その調べってさ、明日まで待てないの？」

「このまま手ぶらで、養生院に戻ってか？ 院長先生に、何て言えばいいんだよっ」

「それもそっか。じゃあ……」

と、おはるの指が、鹿郎の袖を掴み締める。

鹿郎は身を固くしたが、おはるは淡々と言い継いだ。

「悪い事言わないからさあ。あたしに協力させてくれない？ あたし、あんたを御店まで連れてって、直ぐに今吉っつあんと話ができる様に、口利きしてあげる」

「はあ？」

「色々とからかったけどさ。よく考えたら、あんたをこのまま養生院に帰しちまつたら、さわ先生自身も、後で院長先生から怒られるんでしょ？」

「そりゃあ、そうなるだろうな。何か理由でも無い限り……」

「院長先生も、随分としっかりした方だからねえ。うちの奥様程じゃないけど」

「むう」

今の一言を院長が聞いたら、何て言うだろう？

ちらりとそんな事を考えながらも、鹿郎は呻いた。

確かに、今までの話からしたら、この子猿を連れていった方が、話は格段に早く進む。

しかし、しかし?? 掴まれた袖を振り払った鹿郎は、おはるの肩を掴み直した。

おお? と目を瞬かせるおはるに眩く。

「お前……何か企んでないか?」

「企む? 何を?」

「何を……?」

「あたし、あんた自身がどーなるうが、ちつとも何とも思わないけど、さわ先生に不都合があるのは嫌なのよ。ただでさえ繊細な方なんだから、面倒事とは極力、距離を置いて欲しいし」

「繊細ねえ……」

「何よ、嫌な言い方して。とにかくあんたのためじゃなくて、さわ先生のために、口利きしてあげるのよ。どう? これで納得できた?」

おはるはふふん、と鼻で笑う。

明らかに、こちらの迷いを見透かされた形だが、しかしそれは今は、どうでもよい事だった。

話のつじつまは合っているし、この状態では願ったり叶ったり、といってもいい。

なのに何故オレは、こんなに承諾をためらっているんだろうか? 苦悩する鹿郎を慰める様、温い風が吹き過ぎる。

それに混じる強い雨気は、おはるの肌にも、降雨の予感を覚えさせた。

「あ……こりゃあ、夜は雨かな?」

何気なく、おはるは眩く。

しかし鹿郎は、その風端に別のモノを聞きつけて、少なからずうつたえた。

風端に混じっていたもの。

それは、群をなして鳴く、鳥の声。

今はまだ、遠くに響いた程度だったが、刻は確実に、日没に向かつて進んでいる。

鹿郎は、面を上げた。

「……おいつ、おはる」

「はいよ」

「判ったよ。お前、オレを銀洲まで連れて行け。口利きも、してくれるんだな？」

「……どーいう風の吹き回し？」

「刻が惜しい。お前の言う通り、早くさわを探し出さないと、色々面倒な事になる。せめて日が暮れるまでには、その今吉つつあんから、話を聞いておきたい」

「判ったわよ。でも……」

おはるは、空を振り仰いだ。

相変わらずの空模様だが、空には雀が元気に飛び回っているし、街中の人通りも、少しも変わった様子がない。

この一髪の間も絶える事無い、昼の街の賑わいの中、この見えずはごうやって、刻の移ろいを知ったんだろう？

「おいつ！」

「あ、はいはい」

強く呼ばれ、我に返る。

おはるは、いつの間にか差し出されていた、鹿郎の袖を取った。まあ、いい。

後はこのまま真っ直ぐ、御店まで連れて行ければ、上出来だろう。思わず歪みかける口角を、空いた手でつねったおはるは、わざと大きな溜息を吐いた。

「んもつつ、鹿郎つてば、素直じゃないんだから……もつとさつさとお願いすれば、刻を無駄にする事もなかったのよっ」

「言っとくけどな。今のオレは、院長から直々に、さわを探せって言いつかつてるんだ。つまり今、オレに何かあった場合は……」

「養生院に楯つくと同じって、言いたいんでしょ？ 最初っから判ってるわよ、そんな事。だからわざわざ、あたしの方から申し出てあげたんじゃない。大体鹿郎は……」

澱みなく流れ始めた文句と共に、袖口が引つ張られる。

小さなおはるの歩調に合わせ、鹿郎はぎくしゃくと歩き出した。

嫌なうず気は、消えるどころか色濃さを増し、胸の中で渦を巻く。やっぱり、止めときゃ良かったかな？ 鹿郎は、肩を落とした。

不条理がもたらす重たい疲労が、くくったはずの腹の上からのしかかる。

「ちよつと鹿郎っ、聞いてんの？」

「はいはい、もたもたしたオレが悪うございましたっ。全く、申し訳ないこつて」

投げやりな詫び言が、張り無くだらりと零れ出た。

山振通りを西に下り、月白小堀に架かる橋を踏み越える。

袖を引くおはるの歩みが、些か早まった。

「もう直ぐ、御店だからね」

「ああ」

流石にここまで来ると、投げ出すような商い声は影を潜め、折り目正しい商人同士の挨拶が、そこかしこから聞こえてくる。

実際、道端に居並ぶ屋台の類は姿を消し、いわゆる暖簾を掲げた御店の類が、鹿郎とおはるを迎えていた。

打ち水の匂いに紛れ、木々を叩く槌の音と、真新しい檜の香が聞こえてくる。

鹿郎は、小首を傾げた。

「おい、おはる。どつかに、新しい建物が建ってないか？」

「ん？ ああ、よく判ったね。ほら、橋のたもとかから四番目の……」

「確か花紺青だったっけ？ 山茶花の古木があった」

「そうそう。でもねえ、その御店、こないだ潰れちゃってさ。乾鮭屋が跡を土地ごと買い上げたんだけど、古木の方はついこないだ、ばっさりやられちゃった」

「やれやれ?? 淡々と響く木槌の音を聞きながら、鹿郎は溜息を吐いた。

橋の袂や古い家屋もそうだが、街中に立つ古木の類は、鹿郎のよくな者にとって、道行く際の貴重な印となる。

建物や御店の位置も、印にならない事は無いが、浮沈の激しい裏葉柳では、覚えた途端に暖簾が変わってしまったりして、中々信用できないのだ。

「やりにくくなった?」

探る様に、おはるが呟く。

鹿郎は、苦笑した。

「そう言えば、銀洲にもあったんだろ? 古い桜の木」

「あー、話は聞いた事あるねえ。随分と立派な古木だったみたい。

あたしは見た事無いけど」

「ふーん」

往来の彼方、空の何処かで、鳶が鳴いている。

気のない返事を返しつつ、鹿郎は頭上を振り仰いだ。

全ては又聞きの話に過ぎないが、そもそも昔の銀洲だって、これといった儲けは無いが、潰れてしまう程でもない、そんな程度の御店だったらしい。

当時の店主と奥方は、随分と欲の少ない人達で、庭の桜の古木を標に、組合の片隅で、ゆったり暖簾を守っていたと言われている。

しかしある時、江戸に流行った病の煽りで、まだ幼かった一人娘のおきんを残し、一族郎党、皆が死に絶えてしまった。

そんな御店の成長を見限った、当時の番頭や手代達は、櫛の歯が抜けゆく様に、おきんと銀洲の元から去っていった。

縁のあった利権者達は、残った財を漁ろうと、御店の行方を虎視眈々と監視する。

それを見た裏葉柳の人々は、『いつ銀洲が潰れるか』を、日々の挨拶代わりに話す様になった。

しかし暫くして、事態は世間の期待を、大きく裏切った。親の喪が明けて直ぐ、おきんは邦介という青年を、新たな番頭として御店に入れ、己の後見とする事を、大々的に披露した。

邦介という青年が、どうやっておきんと知り合ったのか。

そして銀洲に入る以前の経歴は、どんなものだったのか。

それらは今も、不明のままになっている。

しかし、六尺余もある身ノ丈を持つ偉丈夫で、大らかで気持ち優しく、役者の如き艶やかさまでも併せ持った邦介という存在に、神経質なおきんの心が随分と慰められた事は、誰の目にも明らかだった。

それからおきんは、商いの先頭に進んで立ち、見事に邦介を使いこなし、また邦介もそれに応え、見る間に業績を回復させていく。やがておきんが成人を迎えると、邦介は入り婿という形で御店に残った。

後見として番頭職に入った頃より、その仲睦まじさは有名だったが、この婿入りを機に、二人はさらに互いを思い合いながら、御店をもう一段、盛り立てる事に成功する。

この成り行きは、当時、とかく味気のない顛末に慣れきっていた裏葉柳の人々に、喝采をもって迎えられた。

すると、その噂を聞きつけたものだろう。

以前に御店を見限り、去った者達が、復帰を願い出てくるようになった。

彼らは邦介に、おきんへの取りなしを懇願したらしい。

が、邦介からその話を聞いたおきんは、全ての願いを撥ねつけた拳句、一つの決断を下した。

『情という非合理に染め抜かれた古い因習を、跡形無く排する事で、銀洲の暖簾を、未来永劫守り抜く』

そんな方針を新しく掲げ、己を見限った商人達はおろか、組合を

構成していた長老達の意見までも、非合理的だと、一斉に排し始めたのだ。

流石にそれは、と意見した者達は、不遇の時を共に過ごした者でさえ、あっさりと放逐されてしまう。

噂では、そんなおきんの心を解そうと、邦介は随分、苦勞をしたらしい。

が、入り婿という立場の邦介には、なす術に限界があつた。

やがて、扱いの増えた荷物を収めるため、つつましかかな小庭に生きた桜の古木と、草樹を全て取り除き、その跡地一杯に、土蔵？後に 銀洲土蔵 と呼ばれる事になる、巨大な土蔵を設えた頃。

銀洲と、その主・おきんは、組合座長の地位を占めるまでに、成り上がっていたのである。

「鹿郎っ！」

突然、腕を後ろに引つ張られた。

不意打ちに仰け反った耳鼻に、賑々しい街の響きが流れ込んでくる。

腕を引かれていた上に、考え事をしていたから、無意識の歩測すら怠っていた??よろけた体幹を立て直した鹿郎は、一面を左右に振り向けた。

重たい何かがドスン、ドスン、と地を叩いている。

その地拍子に、荷数を数える人足達の掛け声が、朗々と響いていた。

周囲にさざめく荷馬のいななきや、それをなだめるだみ声と、朗らかな挨拶。

時折弾ける笑い声に、妙な安堵を覚えながら、鹿郎は、袖引くおはるに面を向けた。

「何処だ、ここは？」

「銀洲よ。着いたんだってば」

「は？」

「どうする？ 御店の中で、今吉つつあんを待つ？ それとも裏手で……」

てきぱきと話すおはるの声を聞き流しつつ、鹿郎は、首を大きく巡らせた。

なるほど、確かに一方には、御店らしき大きな建物がある。

周囲の物人の流れも、あっちこっちに入り乱れ、今までのそれより、もう一段気忙しい。

大暖簾の類だろう、大布が風をはらみ、その響きを遮って、車軸の軋みが我が物顔に過ぎていく。

しかし、それらの合間を縫って伝わってくる饒舌や、朗らかな笑い声。

「ここが、銀洲？」

たゆたう湿気の中、何処か陽気を匂わせる風情に、鹿郎は大きく首を傾げた。

「ちよいと鹿郎っ。人の話を聞いているかい？」

聞こえてないと思われたのか、おはるの声音が高まった。

我知らず退りながら、鹿郎は言い挙げた。

「おい、おはる。ここは本当に……銀洲なのか？」

「は？」

「水柿橋でお前がしていた話と、全然違うじゃないか。あの時はもつとこつ、欲丸出しで殺伐としてて、人と物の区別がついてないみたいないな……」

「……何言ってるの？」

その通り?? おはるの一蹴に、鹿郎は続く言葉を呑み込んだ。

銀洲を訪れるのは、勿論初めてではない。

何時もの不愉快な応対と、水柿橋でのおはるの話がごちゃ混ぜになって、印象が歪んだだけなのかもしれない。

でもこれは、幾らなんでも変わり過ぎだ！

呑み込んだ罵倒を笑うように、何処かで響く猫の鳴き声。

近くの堀に荷舟が着いたか、人足達の荷運び歌と、水に濡れた重縄の匂いが、風端に聞こえてくる。

袖口を掴むおはるの手を振り払い、鹿郎は、建物の方を指差した。

「よ、要はだな。もしここが本当に銀洲だとしたら、何て言うか…

…そうだな、御店の中身が丸ごと入れ替わっちゃったような……」

「やっぱり、見えないって不便だねえ」

おはるが、ぷつんと言いつつ。

普段であれば、百も言い返さねば収まらない処だが、正直今は、それ処ではなかった。

一体、ここはどこなんだ？

棒を呑んだ様に立つ鹿郎を見て、おはるは大きく息を吐いた。

「しょーがないなあ。そんなに御店に入りたくなきゃ、そこで待ってよ」

「えっ？」

「あたし、ちよいと戻って、今吉つつあんを連れてくるからさ」

「ちよつと待て。そうじゃないってば、オレが言いたいのは……」

「つたく、乳飲み子じゃないんだからね。いいこと、そこでじーつと待ってなさいよっ！」

「人の話を聞けつてえの！」

跳ねるようなおはるの足音が、けたたましい車軸音と、入れ替わりに交差する。

鹿郎は思わず手を伸ばしたが、止まってくれたのは、車軸の軋みの方だった。

「何か用かい？」

車を引く人足のものだろう、投げつけるようなだみ声に、思わず手を引っ込める。

車軸はギシリと音を立てたが、後はじつと黙ったままだ。

こうなったなら、仕方が無い。

舌打ちを呑んだ鹿郎の面に、人懐こい笑みが差した。

「ちよいと、すみませんが……」

「おうよ」

「こちらの大店は、あの銀洲さん……ですかね？」

「何でえ坊主、お前、あのでつけえ暖簾が見えねえのかい？」

「残念ながら、子供時分に大怪我しちまいましたね」

苦笑して、額の布を突ついてみせる。

縫い針のような視線が、全身をぐるりと撫でつけた。

「その割にゃあ、判ってるじゃねえか。お前の言う通り、ここは銀洲だよ」

「本当に？」

「嘘吐いて、どうすんでえ」

「嘘とは思ってないんだけど……その、でも、何だかいつもの銀洲とは全然違う感じがして……知らない御店じゃなかったし」

車軸が一つ、大きく軋んだ。

「ん……」

人足が、今度は御店の方を見やっっているのが、手に取るように判る。

さて、どうか？？無邪気な笑みの下で、鹿郎は、騒ぐ心をなだめつけた。

一擲。

「そつ言やあ、変だなあ」

人足は、不思議そうに呟いた。

「大暖簾の真ん前で、手代さんが客と話し込んでやがる。つと、あ

ーあ、大声で笑って……きっと新入りだろうなあ。気の毒に」

思わず嘖き出し、鹿郎は言った。

「本当に……その新入りさん、きつと今晚にでも、鹹になっちゃうね」

「だなあ。何せここは、けちの権現様だしよ。仕事中に歩いていると、給金さつ引かれるって話だぜ？ 知ってるかい？」

「ああ。凄まじい話だよな」

「ま、そうでもしなきゃ、このご時世を生き残るってえのも、難しいのかもしれないけどな」

溜息混じりの言葉に頷いた鹿郎は、一つ小さく頭を下げた。

「御陰様で、よく判りました。御親切に、ありがとうございます」

「おう。お前も気がつけていけよ、坊主」

騒々しい車軸の軋みが、鹿郎の傍らを、のんびり通り過ぎていく。温い風が、軋みの余韻を跡形も無く吹き払った。

と、突然。

「ちっ」

派手な舌打ちを漏らした鹿郎は、御店の方へと向き直った。

さっきまでの優しい笑みが、拭われた様に消えている。

絶える事無く揺れていたうず気は、今や明瞭な不審と焦燥に成り変わり、鹿郎の沈思を急き立てた。

一体、何があつたんだ？

高鳴る胸を撫でつけて、鹿郎は、大きく息を吸った。

この御店が銀洲であるという事は、最早間違いない。

しかし、この様相自体は好ましくとも、この御店にとって、平常とは思えなかった。

利潤のみを信奉してきた御店の根幹を、変質せしめる一大事。

そんな何かが起こり、さらにそれを、ひた隠しにせざるを得ない。

そしてそんな状態の御店の何処かに、さわがいる。

と、ここまで考えて、鹿郎は、はたと気づいた。

『その調べつてさ、明日まで待てないの？』

確かおはるは、最初、オレを退けようとしていた。

きっと御店の様子を聞き通される事を、恐れたに違いない。

なのに途中から、案内するとまで言い出して、ここまで強引に引っ張ってきて???

鹿郎の、面が上がった。

「あのクソ餓鬼！」

きつと今頃、おはるは御店の下っ端達に、オレを捕える様に言っ

ている。

そんな事をして、何の得になるかは知らないが、思った程の、猶予は無い。

脳裏に残るおはるの声音に、悪態を吐いた鹿郎の唇から、あの鹿鳴が迸った。

ピンと弾けた鳴響が、無軌道に入り乱れる物人の、一髪の間を奔り抜ける。

僅かに面を巡らせて、鹿郎の踵が跳ねた。

屈強な人足達が、たちまちに積み上げてゆく重荷の小山。

何を思い出したのか、不意に踵を返す人の背後。

よそ見をしながら飛び出してくる、荷車の横。

温い風と共に、それらの合間を抜け切った鹿郎は、とうとう誰にも咎められずに、御店の脇の小道に入った。

陽射しの温みはたちまちに掻き消え、周囲に満ちていた雑踏が、背後にすうと置き去られる。

かまわず奥へと押し進むと、ヒヤリと重い漆喰の香が、被さる様に迫ってきた。

「……ふん」

鼻を鳴らした鹿郎は、武骨な手指をそつと伸ばすと、香りの元を撫でさすった。

そして固い指先で、コツコツと叩く。

それが終わると、懐から手拭いを取り出し、その一端を投げ掛けた。

ふわりと広がった手拭いは、思ったよりも高い処で、ほんの僅か引っ掛かり、するりと手元に戻ってくる。

ここで、鹿郎はうなずいた。

この面前一杯に広がり抜いたでかぶつが、漆喰で造られた堅固な土塀である事に、間違いは無い。

しかし、その高さと厚みを頼りにしたのだろう、手入れの手間と経費のかかる、物騒な泥棒避けの類は、仕込まれていない様だった。

造りはおおよそ、身ノ丈三つ程度の高さ、掌一つ分くらいの厚み。

にやりと笑った鹿郎は、草履を脱ぐと、土を払って懐に収めた。腕の良い左官が、心を込めて仕上げたのだから、塗り跡すら無い滑らかな壁面に、右の足指を押し付ける。

そして一擲。

左の踵が地面を穿り、その蹴り込む力を真上に逃がした鹿郎の全身が、ヒョッと真上に跳ね上がった。

鹿の跳躍というよりは、樹木を駆け上る大猿。

安穩とした小鳥達の鳴き声と、淡い陽射しの再びの出迎えを受け、塀の上端、正しく掌一つの幅にうづくまった鹿郎は、塀の内に耳鼻を凝らした。

鹿郎の位置より、遥かに高くそびえ立つのは、この界限でも有名な、あの 銀洲土蔵 の一面だろう。

御店の位置を検討づけて、数歩、上端を伝い歩く。

数歩も行かぬ内に、御店に併設された建物??母屋だろう、それが気配を現した。

「ふむ」

巨大な 壁 に吹きかけるよう、鹿郎は息を吐いた。

この土蔵が建った時は、母屋を潰して蔵を建てたとか、恵比寿様に母屋を捧げて繁盛を得たとか、色々言われていたらしい。

確かに、この庭の広さにこの大きさだと、最低でも庭を余さず使わないと、建てる事はできなかっただろう。

全ての商家を見てきた訳ではないが、ここまで生きる場をないがしろにして、利潤を追った造りの商家は珍しい。

これは、覚悟の証なのだろうか？

遠巻きには冗舌の種となるうが、身近で知るには嫌らしさだけの感嘆を経て、嫌なうず気が再び、鹿郎を炙り始めた。

ここは裏葉柳でも三指に入る大店で、表の方では、今も商いの?おはるの声音を借りるなら、こっちの言い値で急場手当を設定

できる、大型飛び込み商談 の真つ最中のはず。

なのに足下の先には、何の音も、匂いも無い。

倉庫と御店の表を行き交う、大量の人手と荷物は？

母屋にあるはずの、掃除洗濯の人手の息吹は？

もし足下にあるものが、墓場だったというなら、納得できたに違いない。

そこには活きた息吹と情熱が欠落した、虚ろな静けさが満ち満ちている。

鹿郎の頬に、嘲笑が差した。

この世間は、見える事を前提にして作られている。

だから見えない不便は確かにあるし、それは酷く辛い事の方が多い。

しかし見えている事で、こんな変事が判らなくなっているとしたりなら、見えた処で何があるか。

足下の小道に、幾つかの人の息吹が迫ってきた。

鹿郎はためらう事無く、堀の内に跳び降りる。

壁に張り付き耳を凝らすと、どうやら数人の男達が、壁の向こうでうろつろしいていた。

今はまだ、見つかりたくない??その場を離れようとした鹿郎の耳に、微かな鉄擦れの音が届く。

そして同時にたゆたう、微かな薬香。

即座に鹿鳴を発した鹿郎は、無音のまま駆け始めた。

遠い空の高みに、鳥のさえずりが遊んでいる。

御店の表の方からか、何処か虚ろな談笑が、細く流れて聞こえてくる。

僅かながら、草木のあった昔と違い、そこは酷く息苦しい場となっていた。

元々広さは無かった所に、巨大な土蔵を設えたのだ。
当然、地に陽射しなど望むべくも無く、薄暗く湿気た風が、何時も鬱々とたゆたっている。

重い鉄擦れは、そんな最中に響き渡った。
少し遅れて、重たい大扉に付設された潜り戸が、音を引きずり動き出す。

やがて開け放たれた戸口から、一人の女が姿を見せた。
卯ノ花無地の筒袖と、道場袴の出で立ちに、太めの美眉と強い眼差し。

肩でそろえた、見事な艶持つ深削ぎ髪を揺らし、面を左右に巡らせる。

何時も聞く馴染みの音が、何度か聞こえた気がしたのだ。
だから一言断った上で、こうして面を出してみたが、何処にも変わった様子は無い。

雰囲気も様相も、ここに来た時のままだ。
女は首を傾げると、再び扉に手を掛けた。
と、突然。

背後から伸びた腕に、強く口を塞がれた。
そのまま体を絡め取られ、土蔵の内へと引きずり込まれる。

「んぐー！」
やっともがき始めた女を、一際強く抱き締めた小さな影は、一気に隅の暗がりまで後退した。

周囲の気配に耳鼻を凝らす、気付かれた感じも、人の気配も無い。

息を吐いた小さな影？鹿郎は、女の耳元で囁いた。

「よーし、やっと思つたぞ。オレだ、さわ。鹿郎だよ！」
さわと呼ばれた女は、少し大人しくなった。
腕を緩めてやると、跳ねるように逃げ離れる。

「ああ、びっくりした！ 何なのよ、一体！」
「そりゃあ、こっちの台詞だな」

両手を打ち払い、鹿郎は立ち上がった。

「何時まで待っても、お前からのつなぎはこないし、探しにきてみりゃ、おはるは半端な嘘吐くし、拳句、出先の御店は妙な異変の真つ最中……何なんだよ、これは。説明しろっ！」

「せ、説明って言われても……」

さわは、慌てて目を擦った。

突然暗がり引きずり込まれたものだから、目の中で、光がぎらぎら瞬いている。

その戸惑いが、鹿郎の配慮を得る事は無い。

舌打ちした鹿郎は、踵を返して、扉の側に馳せ戻った。

再び気配を探った上で、ゆっくりと閉じてゆく。

微かな軋みと共に、扉がずん、と閉じられた。

「よし、コレでいいだろ」

手を打ち払いながら、さわの方へと面を向けた鹿郎は、腕を組みつつ宣言した。

「勿論、きつちり筋道立てて話せ、なんて無茶は言わねえよ。お前が理解しているだけでいい。とつとと話せ！」

「……………」

「さわ？」

「いや、その……ちょっと話せない」

「だから、扉は閉めてやっただろ？」

「いや、そうじゃなくてだねえ……うん、話せないんだよ、今は特に」

思いも寄らない応えに、鹿郎は鼻白んだ。

もじもじと言いよどむさわの前に、仁王立ちに立ちはだかる。

「お前な、ふざけるなよ。総務のお汐ばあさんが死んで、只でさえ手が足りてないんだ。お前が診るはずの患者だって、院長先生が代わりに診てるんだぞ！」

「それは判ってる。けど……」

「けど、何だよ」

「だから話せない！ よく聞け、私は話せないと云っている！」

さわの大声に、頭の隅で何かが瞬いた。

元々、嘘が下手？？というか、嘘が吐けない女だ。

話せない、だと？

鹿郎の背筋が、ツツと伸びた。

「……何を隠してる」

「だから何度も……私でなく、別の人に聞いたがいい」

「別の？」

「お前の後ろにいる人とか」

総毛立った鹿郎の首筋に、重たい衝撃が奔る。

鹿郎の意識は、そこでプツンと途切れてしまった。

強きが正しく弱きを助け、弱きもまた、正しく強きを補う事ができるなら、この世は極楽と言えるだろう。

しかし当世にそんな余裕がある訳も無く、何々だからと遠慮をしてくれる事もない。

従って、鹿郎の目覚めは、最悪なものとなった。

「うっ……」

うねうねとよじれる意識が、徐々にまとまり、総身に張りつめてゆく。

初めに意識できたのは、頭の後ろに触れていた、冷たい板の感触だった。

どうやら自分は、板間に倒れているようだった。

少しだけ、首が痛む。

手をやるうとしたら、何かが頑と、それを拒んだ。

反対の手も、足も、体すらも動かせない。

何かで簀巻きにでも、されているのだろうか。

耳鼻を凝らして、周囲を探る。

が、今まで捉えていた響香は、一欠片も聞こえない。

ここは一体、何処なんだろう。

静けさの中、暫くもぞもぞしていた鹿郎は、やがて大きな溜息を吐いた。

本来ならば、もっと焦るべきだろう。

が、心は案外、落ち着いている。

自分の索敵を完全にかわし、不意を突いて気を失わせ、ここまでの戒めを施した。

そんな事ができる奴自体、該当者は限られるが、この上、さわやおはるをたぶらかし、操れる者など、この裏葉柳に幾人もいない。

その事が判っていたから、落ち着いていられた。

黒幕が奴ならば、次に何かあるまでに、必ず姿を見せる。

その時まで待てば??と、ここまで考えた時。

鹿郎の背筋が、ツツと伸びた。

オレはどのくらい、気を失っていたんだろう?

一擲。

鹿郎の全力が爆発した。

戒めが、耳障りな鉄擦れを響かせる。

やはり、何処かで頭でも打っていたのだろうか。

のんびり待つてなど、いられる訳がない。

せめて今日の日が暮れる前に、何とかこの出来事を、養生院に知らせなければ!

肩の辺の戒めから、ミキリ、と異様な音が漏れた。

が、しかし。

「ぐはっ!」

喰い縛った奥歯がばらりと解け、同時に四肢から、力が抜けた。

重しか何かがつながれているのか、鉄塊が板打つ音が喧しい。

これだけかまして、軋み一つか。

どうやら鉄の鎖か何かで、簀巻きにされているらしい。

流石に、手強い?? 咳き込みながら、頭に上った血の熱さに、く

らくらしていた時だった。

「あつ、鹿郎、気がついてる！」

うんざりする喜声が、頭の方から浴びせられた。

「お前は……おはるだな？」

絞る様な鹿郎の問いに、喜声の主が、ふふつと笑う。

しかしそれ以上は応えずに、何処か別の方に向かって、大きな声が響き渡った。

「おい、樋池様ーっ。鹿郎、気がつきましたよーっ」

「……やれやれ、もう気がつきましたか。御苦労様、おはるちゃん待つ事も無く、もう一つの新たな気配が、おはるの隣に現れた。

枝垂柳のような喋りに、ちよつと変わった鬢付けの香。

鹿郎を縛る鉄鎖が、再びミキリと、音を立てた。

「樋池え……やっぱりお前かっ」

「ご名答」

樋池と呼ばれた男は、さらりと応えた。

侍に対する物言いとしては、即時無礼討ちとされても、おかしくはない。

しかし、にやりと笑った樋池はそのまま、鹿郎の側に歩み寄った。

「首の具合はどうだ？ 一応、手加減はしたんだが」

「気になるなら、確かめてみりゃいいじゃねえかっ、この犬同心め！」

「冗談じゃない。伸ばした腕を、喰い千切られちまう」

渾身の力を込め、じりじりと呻きながら、鹿郎は身を抜った。

鎖に繋がれた舟の碇が、音を立てて床板を搔く。

樋池が、感嘆の口笛を吹いた。

「ほほう、頑張る頑張る」

「だから言ったでしょ、樋池様」

明かり取りの小窓を開けながら、おはるは得意気に言い挙げた。

一条の緩い光が、がらんとどの板間と三者を照らし出す。

「その辺の一山幾らならともかく、相手は鹿郎ですよ？ 本気でや

るなら、このまま棺桶に突っ込んで、釘でも打っちゃうくらいでない」と

「またそんな、極端な事を」

急な光を手で遮りつつ、樋池は苦笑した。

鉄紺の単に、お固い黒の同心羽織を羽織った姿は、特に変わったところもない。

しかしその五体の厚さと、右瞼の刀傷。

その下の、僅かに退色した瞳が、妙に人心を威圧する。

樋池の側に寄ったおはるは、にやりと笑って囁いた。

「ははーん……樋池様、鹿郎の後ろ盾に、逆らいたくないんだあ」

「まあ、そんなとこです。既に養生院には、さわ先生の件で、ご迷惑を掛けてますから……」

言葉尻を泳がせながら、樋池は指で、己の顎を撫で付けた。

「……よし、鹿郎」

「何だよっ！」

尻を持ち上げるだけで、息があがる。

のんびりと話しかけられた鹿郎は、尺取り虫よろしく、尻を上げたまま怒鳴り返した。

「だから、そう怒るな。お前を大人と見込んで、取引したい」

「取引い？」

「ここは、銀洲の庭にある土蔵の一階。お前が、さわ先生を捕らえた処だ。判るか？」

「……それがどうしたっ」

「お前はさわ先生を探して、ここまで来たんだろう？ 実はな、さわ先生は今、こここの三階にある座敷牢跡に、逗留してもらってるんだ」

「逗留ね。監禁の間違いじゃねえの？」

「そう言えるかもしれん。が、人聞きが悪いので、逗留って事で「けっ！」」

鹿郎を簀巻きに絡める鉄鎖が、一際激しく板間を打った。

おはるが、呆れたように息を吐く。

樋池は慎重に距離を取りつつ、鹿郎の側にしゃがみ込んだ。

「いいか鹿郎。今から明日の巳ノ刻、四ツ半頃まで、お前もさわ先生と一緒に、ここの三階でじっとして欲しい。刻限がきたら、二人とも解放されるよう、段取りをつける」

「悪いが断る。今夜までに、養生院に戻らないと……」

「今の仕事を馘になっちまう、って事だろ？ 判ってるさ」

「嘔吐けっ、この野郎！」

爆発の如き勢いで、鹿郎は上半身を持ち上げた。

重しががらりと、板間を派手に傷付ける。

しかし即座に均衡を崩し、鹿郎は、再び倒れて這いつくばった。

「判ったような口をきくなっ！ いいか、オレの代わりは幾らでもある。代わりどころか、もっと働けて、色んな事をこなせる奴が、その辺をごまんとうるついでるんだ。明日の昼にはそんな奴が、オレの代わりに裏葉柳を歩き回ってるに決まってる！ 今、何とかしないと駄目なんだよっ！」

樋池の眼差しが、針の様に細まった。

眉間にうつすら、嫌悪が差す。

「……何時まで経っても卑屈だな、鹿郎」

鹿郎を縛る鎖の何処かが、グキリと鳴った時。

「駄目っ、鹿郎っ！」

叱咤一閃、おはるが小さな体ごと、鹿郎の背に飛びついた。

骨肉が板打つ鈍い音が、板間一杯に鳴り響く。

荷車に礮き潰された蛙の様に、前のめりにひしゃげた鹿郎の肩首にまたがったおはるは、そのままじろりと樋池を睨んだ。

「樋池様、今のは鹿郎の言う通りさ。お待さんと違って、あたしら町人の明日なんて、来るも来ないも、ホントに紙一重のトコにあるんだ。そこを見切って、物を言わないとね？」

「やれやれ。こんな子供に諭されるとは……同僚には見せられないな」

それでも、樋池はぷいと、そっぽを向く。

にやりと笑ったおはるは、鹿郎の頭を突つついた。

「ほらほら、鹿郎も、機嫌直して。お侍相手に喧嘩したって、勝てる訳ないじゃない」

「……まずは降りやがれ。話はそれから……」

「はいはい」

素直に降りたおはるは、鹿郎が座り込むのを手伝った。

手拭いを取り出し、派手に打ち付けられた、鹿郎の顎を拭う。

「鹿郎は判んなくて当然だけど、樋池様が今言った条件は、充分信じていいものさ。一枚も二枚も噛んでるあたしが、太鼓判押したげる」

「……何時から噛んでやがった？」

「初っ端からよ」

華やかに微笑みながら、おはるは嬉々と言い継いだ。

「集金を終えて帰る最中、水柿橋の方が、妙に騒がしいじゃない？ 寄ってみたたら、鹿郎と知らないおじいちゃんがいてさ。こっそり見てたら、急に養生院のつなぎの規則を思い出して」

樋池の忍び笑いが、割り込む。

「おはるちゃんがお前を連れてきた時は、驚いたよ。何時も余裕のおはるちゃんが青くなって、さわ先生を探すお前を連れてきた、どうしよう、なんて言い出すものだから……」

「だ、だって樋池様が、絶対に誰にも悟られちゃ駄目っていうから！」

「ええ、判ってますよ、おはるちゃん……で、鹿郎。お前はどっするね？」

樋池の声が、切れ込む様に引き締まる。

鹿郎は、鼻をすすった。

「どうやら、全て本気らしい。」

否と言ったが最後、明日までこのまま??いや本当に、棺桶に突っ込まれかねない。

こつちだつて腹を括れば、一晚程度の我慢など、容易い事だが、しかし？？鹿郎は、一つ大きく息を吐いた。

「樋池……お前さつき、さわと一緒に、つて言つたな。いいのか？」
「何か不満でも？」

「オレに不満はねえよ？　ねえけど、さわがここに監禁されて……」
「逗留」

「どつちでも同じ……」
「逗留」

「つたく、逗留してるつて事は、だ！　さわは明日まで、誰にも漏らしちゃいけない何かを、見知ってるつて事だろつ？」

樋池に代わり、おはるの小さな指が、鹿郎の頬を突つついた。

「どう話を持っていきたいのか、知らないけどさ。さわ先生ともあるう者が、そんな大事を他人にべらべら喋っちゃうつても？」

「ふーん。そこは信用つて事か」

「さわ先生は謙遜するが、その辺りは、誰よりも信頼している。むしろ、目立つお前がチヨロチヨロ動き回る方が、遥かに厄介事なんだ」

淡々と、樋池は断じる。

「ふーん」

思わずにやりと笑いかけ、鹿郎は、慌てて眉をしかめた。

いつもの事だが、こいつらはさわに限つて、うかつな話は漏らすまいと思つている。

わざとたつぷりためらいながら、鹿郎は大きく体を擦つた。

ギシギシと、鉄鎖が軋む。

「これ、鎖だよな。外してもらえるのか？」

「外した途端、暴れて逃げ出さないという保証は？」

「保証、つつつたつて……無いよ、そんなもん。けどこのまま逃げ出した処で、院長先生に何て言つていいか、判んないしな」

「なるほど」

うなずいた樋池は、おはるの方を見やつた。

「おはるちゃん、鹿郎の鎖を、解いてあげて下さい」

「はいよ、お任しっ！」

どこからともなく、取り出した鍵束をがちゃつかせ、おはるは、鹿郎の側に座り込んだ。

「いいか、鹿郎。これは取引。勝手にここから逃げ出した時は……」
樋池のしつこい念押しと共に、おはるがあちこち跳ね回り、全ての錠を解いていく。

やがて、鹿郎を戒めていた鎖の最後の一卷きが、がらりと板間に解け落ちた。

「はいっ、これでお仕舞いっ！」

「ふう」

本当はそうでもないのだろうが、随分と長い間、捕われていた気がする。

大きく体を伸ばした鹿郎は、立ち上がって、鎖の山をまたぎ越した。

「じゃあ、私とおはるちゃんは、仕事に戻る」

「何だよ、案内してくれるんじゃない……」

「ここの三階よ？ あたしも樋池様も、忙しいんだから。甘えちゃ、だ、め」

床を踏みならして威嚇する鹿郎に、おはるは、ケラケラと笑って応える。

声を殺して、樋池も笑った。

「じゃあな、鹿郎。私達がまた迎えにくるまで、大人しくしているよ」

「あ、言っとくけど、一階の扉は全部、鍵をかけちゃうからね。じや、どつぞどつくり」

遠退く声とともに、重い扉を引きずる音が、ずしんと鳴り響いて止まる。

微かにガチャガチャいっているのは、きつと鍵をかけているのだらう。

あいつら、本当にオレを閉じ込めやがった。
沸き立つ怒りを押し込める様、鹿郎は、大きく息を吐いた。
まあいい。

疑問は増えるばかりだけど、一番大事な疑問が一つ、解決する目
処が立った。

「ぴうつ……」

流す様に、鹿鳴を放つ。

と、突然。

斜め上の頭上から、一筋の薬香が漂った。

これが匂うという事は、近くに医師がいるという事。

そしてこの場合、考えられるのは、只一人。

「話は終わった?」

愛想の薄い声音が響く。

大きく息を吐いた鹿郎は、首を傾げて耳を凝らした。

「さわ、だな?」

「ああ」

恐らく階段だろう、軽やかな足音が、応えと共に降りてくる。

思わぬ安堵に少し意地を張りながらも、鹿郎は、足音の方へと歩
みだした。

空の薄雲が、灰色の度を増している。

おはると共に土蔵を出た樋池は、空を仰いで舌打ちした。

こんな大事な時に限って、あまり有り難くない出来事が、次々と
起こる。

さわや鹿郎の件は、何とか巧く封じ込めたが、雨中の立ち回りは
危険の度合いが高まるし、うつぶし明神での押し込みの件は、昨夜
からの気がかりだった。

少ない人手をやりくりして、やっとの思いで整えた布陣。

今更邪魔など入られた日には、たまったものではない。

「あんまり、いい空心地じゃないねえ」

鍵束をじゃらつかせ、おはるは空を見上げている。

苦笑した樋池は、大仰な溜息を吐いた。

「空模様だけじゃ、ありませんよ。今回の件は、全てがあまりに泥縄過ぎる」

「んー、確かに樋池様の指揮でなきゃ、ここまで仕上がらなかったろうし」

と、突然。

「樋池様」

母屋の方から、番頭風の男??名を、甚五郎という??が現れ、樋池にそつなく頭を下げた。

おはるがひよいと、割り込んでくる。

「甚五郎親分、驚いた！ すつかり商人になっちゃって！」

甚五郎の鋭い眼差しが、おはるをジロリと睨みつける。

一擲、甚五郎の大きな両手が、にんまり笑うおはるの頬を挟み込むと、むにゃむにゃと揉み始めた。

「ええい、何言つてやがる。おめえの血も涙もねえ、手ほどの賜物だろうが」

「にゅふふ……だって親分さん達、商人の礼儀も作法も、全然知らないんだもん」

うりうりと戯れるおはると甚五郎を見て、樋池は再び、溜息を吐いた。

嫌な予感が拭えぬせいか、ちょっと弱気になっているのかもしれない。

独善に耳目を覆い、『できるはずだ』を繰り返すだけの上役達の無理難題など、今に始まった事ではないのだ。

自嘲を振り払った樋池は、背筋に力を込め直した。

「……で、甚五郎。何かあったのか？」

「おっといけねえ」

慌てておはるを離れた甚五郎は、樋池の方に向き直った。

「つい今しがた、奉行所よりつなぎがきまして。うつぶし明神の方で、大掛かりな仕込みが必要になり、監察医の長春先生と、新崎様の御配下一群が、そちらの方に抜かれちまいました」

「何だと？」

「幸い新崎様が御配慮下さり、舟の扱いが巧い者は、全員残して下さいました。なのであちらの隠し水門からの舟出しは、問題ありません。が、このままでは緑青林周辺が手薄となり、鑑定医の方も……」

「代替えは、自分で探せという事か」

「如何しやしょう？」

流石に即座の返答が出ず、樋池は大きく、腕を組んだ。

今回の件は、舟の扱いと共に、鑑定医の腕が決め手になると、樋池は早くから読んでいた。

その点、早い段階から長春を押さえられた事は、幸運の内の一つと想っていたが、まさかこの時点で、引き抜かれてしまうとは。

甚五郎は、樋池の面をそっと見た。

無言のまま立つ樋池は、唇のささくれを、指で細かく繕っている。そして、沈黙の苦手なおはるが、とにかく何かを言い放つと、腹に力を込めた時。

「判った」

眉間の陰気を払った樋池が、静かにさらりと言い放った。

目を瞬かせるおはる越しに、甚五郎に眼差しを向ける。

「緑青林方面に割り振った者達を、本隊の囲みに合流させる」

「し、しかし、川縁の土手伝いに逃げ込まれたら……」

「人手が足りない以上、致し方あるまい。下手人よりも、証拠を押さえる事が、一番の大事……証拠さえあれば、事後の追求が可能になる」

「へ、へいっ！」

「鑑定医の手配は、私がやる。誰がどうやっても、かなり恨まれる

事になるうからな。後は……」

「ちよ、ちよつと待つて、樋池様っ！」

「ん？ 何ですか、おはるちゃん？」

樋池ににこりと微笑まれ、おはるは慌てて言い募った。

「鑑定医つて言ったつて、長春先生の代わりでしょ？ そんな人、この裏葉柳に何人いるか……それにもしいたとしても、今直ぐここにきて、協力してくれる人なんて！」

いる訳が無い、と断じようとした時。

樋池の手指がひよいと伸び、今、出てきたばかりの土蔵の三階を指し示した。

おはるの目が、鳴らんばかりに瞬く。

「え……えええええ？」

「おはるちゃんが顔を出して、二人一緒に不興を買ったら、後々不都合があるでしょう。だからおはるちゃんは、私が土蔵から出てくるまで、一つ、お使いを頼みます」

「お使い？」

樋池は、自らの腰の辺りを探った。

そして一つの鍵を取り出すと、固まっているおはるに手渡す。

「この鍵は……」

「そいつを使つて、トサ をここに連れてきて下さい……勿論、極力、人目を避けてね」

甚五郎が、息を呑んだ。

「樋池様、それではまた、今回も……」

「既に シバ の力を借りているし、目立つ事は御法度だから、連れてこなかった。しかしこうなつた以上は仕方ない。総力戦を、覚悟せねば」

甚五郎も樋池の配下も、シバやトサとの共同作戦は、何度か経験している。

しかしそれ故に、この件の難易度の高さを、改めて目の当たりにした事になる。

甚五郎が息を呑む中、おはるは怖々と、鍵を受け取った。

「だ、大丈夫かな。あたし、鍵を使うのは初めてだし、どう考えても箱に入れて……じゃなくて、入ってもらって、荷車か何かで運び込む事になると思うんだけど……素直に入ってくれるかなあ？」

「大丈夫。トサモシバも、ちゃんとおはるちゃんの事を判ってますから。その辺の一山幾らと違い、皆、素直で信頼できるいい奴らです」

「樋池様にとつちや、そうだろうけど……」

渋面を作るおはるの背を、樋池には見えないように、甚五郎が軽くつつく。

おはるは、決然と顔を上げた。

「と、とにかく、やってみる」

「頼みましたよ」

「う、うんっ。お任しっ！」

樋池の、人を見る目には間違いは無い。

その目に見込まれ、頼まれたのだ。

男も女も、度胸が肝心！

鍵を握りしめたおはるは、踵を返すと、裏手に向かって走り去った。

それを見送った甚五郎が、樋池の方をちらり見る。

「養生院に、連絡は？」

「している暇は、無いな。確かにこれ以上、養生院に迷惑を掛けたくはなかったんだが」

「でももし、さわ先生に、何かあったら……」

甚五郎は、大きく言い淀んだ。

勿論、さわ自身への心配もある。

しかしそれ以上に重大なのは、事前に何の承諾も得ず、万が一、さわ……つまり養生院に所属する医師が、何か不都合を被ったとしたら。

少なくとも、その原因を作った者は、養生院の敵対者と見なされ

るだろう。

建前として、あからさまに見捨てられはしまいが、今後、まともな医療は望めなくなるかもしれない。

しかし樋池の応えには、一髪の滞りも無かった。

「そこは、今は考えずにおこう」

まるで他人事のように、サラサラと言ひ流す。

「ここで遠慮して失敗しても、養生院への詫びとしても、私が腹を斬る事に、変わりはあるまいしな」

思わず噴き出しかけて、甚五郎は、慌てて袂で口元を覆う。

それを見て、樋池はさらに苦笑した。

「おいおい、大丈夫か？ 要の甚五郎ともあるうものが……」

「大変失礼致しやした。その際は必ず、あつしもお供致しますですよ」

「……ま、杞憂だな。杞憂、杞憂」

「へい、隆右衛門様のなさる事に、ぬかりなど、あるはずもございません」

樋池の指が、おはるから受け取った鍵の束を、じゃらりと鳴らす。

咳払った甚五郎は、元の鋭い目つきに戻り、軽く頭を下げてみせた。

「では、あつしは皆様にこの事を」

「うむ、頼んだ」

来た時と同じように、甚五郎は無音のまま、母屋の方に歩み去る。

一人になった樋池を、陰気な澱みを取り囲んだ。

指揮者としての手前、ああは言ったが、それ以前にこの説得とて、命がけた。

そう、ついさっき、さわ先生の元に放してしまった、あの少年。

あ奴がさわ先生を、危険に晒すような真似を、許す？

樋池は面を、左右に振った。

とてもじゃないが、考えられない。

万が一にも、殺しは避けるとするならば、またあの鎖の出番とな

るか。

おはるが片づけていた、鎖箱の位置を思い浮かべつつ。樋池は土蔵に向かって、歩み始めた。

さわの身に染み付いた、薬の香りが先に行く。

急な角度で設えられてはいるけれど、広やかな階段板を踏みしめて、鹿郎はその後を追った。

湿気を足下に置き去ってゆく度に、乾いた風のためたいが、その頬を撫でてくる。

手足のこわばりが、緩んでゆくのを覚えた刹那。

階段を上りきったものか、薬香が、ふらりと揺れて立ち止まった。

「ちよつと、そこで待ってて」

背後をついてきた鹿郎に、一言言い置く。

そしてさわは、だだっ広い板間を横切り、幾つかの畳が敷かれた一角に歩んだ。

開け放たれた大窓から、淡い陽射しが差し込んでいる。

その温もりの最中には、燭台と文机。

畳が上がったさわは、机の周囲に広げられた、古びた書き付けの束を、手早くかき集めていった。

空いた畳面を、ぱたぱたと叩く。

「さ、ここに座って」

階段口に、大人しく突っ立っていた鹿郎は、ひゅっ、と軽く一鳴きすると、面を大きく巡らせた。

黙って歩み、畳が上がって座り込むと、その面をペタペタと撫でさする。

その様子を目端に見ながら、さわは、淡々と言い挙げた。

「とにかく、怪我がなくて良かった。樋池様ったらお前に限って、何かと手荒な真似をするから……」

「だったらもうちょい何なりと、口をきいてくれても良かったんじゃないか？　ぜーんぶ、聞こえてたんだろ？」

「嫌な子だな。私が、何も言わなかったと？」

声音に、不機嫌が絡む。

鹿郎は、小首を傾げて呟いた。

「ま、言ったところで聞きやあしねえか。あの犬同心めっ」

「お前もお前だ。直ぐにそういう悪い口をきくから、本来背負わなくてもいい余計な不興を背負い込む」

「けっ！」

吐き捨てる鹿郎に、溜息を吐いたさわは、集めた書き付けを、文机に置き並べた。

そして、隅に置かれた茶瓶と湯のみに手を伸ばす。

陶器を扱う微かな響きと、緑の香りが、宙にふつと立ち上った。

「ほら、飲みなさい」

面前に差し出された、緑の香り。

程よく暖まった陶器を、鹿郎は受け取った。

「……白湯じゃないな」

「朝の膳と一緒に、おはるちゃんが持ってきてくれるものよ」

「何か、ヘンなモンが混じってたりして」

「……大丈夫。今朝から私も、同じ茶瓶から飲んでいる」

「ふむ」

ようやく一口啜ってみる。

ちよつと温いが、香りも味も、充分に残っていた。

背を暖める、優しい陽射しが心地好い。

なるほどな??鹿郎は、鼻を鳴らした。

さつき、樋池は軟禁ではないと言い張ったが、今、聞き通した感じでは、格子どころか衝立てらしきものすら無い。

大窓も開け放たれているようだし、敷かれた畳の目も、整っていて清らかだ。

恐らく、さわの素行が良かったせいだろうが、なるほどこれなら、

監禁とは言い難いか。

鹿郎は、満足の息を吐いた。

養生院は、江戸南方面の医療だけでなく、医学をも束ねて司る。故に、ここに所属する医師に仇なす者は、少なくとも江戸南において、まともな医療を受ける事は望めない。

まあ同心の中でも、結構な武闘派として囁かれる樋池の事だ、その程度は、判っているはず。

と、ここまで考えて、鹿郎は、はたと気づいた。

そんな命に関わる危険を冒してまで、何故、さわを軟禁したりした？

「で？」

黙考する鹿郎の耳朵を、さわの声音が惹き付けた。

「は？」

「は、じゃない。一体、何があつた？」

言われた言葉を反芻し、それが頭に染み渡る。

思わず尻を浮かして、鹿郎は叫んだ。

「おいおい、一体何が……お前がオレに聞いてどうする！ そりゃあこつちの台詞だろが！」

畳をにじる音が、鹿郎に迫った。

急に圧されて仰け反る鹿郎に、さわの声音が、被さる様に響く。

「鹿郎……お前、さっき私に言ったな？ 何時まで待っても、私からのつなぎが来ないって。という事は、養生院には……」

鹿郎は、茶碗をそつと脇に置いた。

嫌な予感が、火花を散らして騒ぎ立てる。

一つ咳払った鹿郎は、努めて冷静に言い挙げた。

「お前がここに出向いてから、一つもきてねえさ。一つでもついでりゃ、オレがここまで、出張ってくる訳がないだろ？」

「それもそうだ」

ぼつりと、さわが呟く。

刹那、さわ自身から溢れた陰気が、細波の様に寄ってきた。

息を呑んだ鹿郎は、妙な汗を堪えながら、真っ直ぐに座り直す。
「ちよつと待て、少し落ち着け。悔やむのは後にして、知っている事を話して……」

「それができれば、こんな苦勞……」

「何だよ、口止めでもされてんのか？」

「……………」

一擲。

陰気が猛烈な鬱氣と成つて、さわの総身から爆発した。

ひよつとして、こいつ、また??思わず口へのぼせかけたそれを、

鹿郎は、ぎゅつと呑み下す。

触れれば、面倒事は避けられない。

さりとて、放置しておく訳にもいかない。

もし相手がさわでなければ、最悪でも放置は可能だったろう。

が、こいつがこうなつた場合は、放つておけばおくほど、話がこじれて面倒になる。

その事は、度重なる尻拭いをしてきた鹿郎にとって、経験則からの悟りと同じものだった。

鹿郎は、深く息を吸つた。

な―に、出たとこ勝負は、むしろオレの望む処。

震えかけた膝を強く叩いて、敢えて大きく言い挙げた。

「判つた。言えない事は、言わなくていい。オレが知りたい事を聞くか」

と、突然。

さわの腕が、鹿郎の肩を、頑と掴んだ。

息すらもはばかられる、圧倒的な密度の鬱氣が、山津波の様に押し寄せてくる。

こつなるように仕向けておいて、怯えるのも変な話だ。

が、心積りを圧倒するさわの氣迫に、鹿郎は、我を忘れてうろたえた。

「おおお、おいおいおいっ!」

「知りたいんだな？」

「な、何を？」

「しらばっくれるな！」

最早、叱咤の一声が、鹿郎に炸裂する。

思わず竦む鹿郎に、さわの掠れた声が迫った。

「この屋敷……いや、この御店で今、何が起こっているのか。知りたいと言ったじゃないか。そりゃそうだろう、知りたいよね、知りたいはず、知りたいって顔をした！」

思わず顔を押さえながら、鹿郎は急いで座り直した。

「ちよつと待てつて、落ち着けて。ひよつとしてお前、また何か重大事を打ち明けられたんじや……」

がっ、と両手が引つ張られる。

思わず体を泳がせる鹿郎に、さわは申し倒さんばかりに寄り迫った。

「自分から聞いた訳じゃない。聞かない様に、話されないようにも頑張ったさ。いいか、私は本当に……本っ当に、聞きたくなんかったのよ！」

「……お前つてさ、そういう、絶対に口外できないような面倒事に限って、呼びつけられたり絡まれたり、打ち明けられたりするよな。どうして？」

「私が知るか！」

優秀で、口が堅くて腕利きで、真面目で勤勉でしとやかで??さわが普段から浴びせられている、ありとあらゆる贅辞と尊敬が、脳裏で一斉に沸き上がる。

思わず嘔き出しそうになって、鹿郎は、強引にそっぽを向いた。

ある意味、可哀想な話ではあるのだが、この女。

あり得ないほど、口が軽い。

流石に大人になってからは、三歩歩けば話しだす様な事は、無くなっただけ。

しかし基本的に、聞いた話を腹に留めておけず、何とか巧く留め

られても、ちょっと水を向けられただけで、激しく動揺してしまい、結局相手にばれてしまう。

そしてとにかく、嘘が吐けない。

驚く程正直だとか、死ぬ程誠実だとかいう事でなく、きつと心身の根底から、嘘が吐けないようにできている。

医師という立場もあって、さわ自身、この気質には随分悩まされ、あらゆる修正努力を凝らしてはいるのだが、面白いのは？？以前そう言ったら、半泣きで怒られた？？そんなさわと知り合う殆どの者が、我先とばかりに、さわに秘密を打ち明けたがるのだ。

何故、どうして、よりもよって、こんな口軽女に。

鹿郎には全く理解できない処だから、恐らくその見た目の印象が、『たおやかな人格者』をこれでもかとかばかりに刻みつけているに違いない。

最早、樋池やおはるだけではない、お前らの見えてるといふ事が、何ほど御立派な事なのか？？突然、誰彼無しに問い詰めたくなってきたが、続くさわの虚ろな咳きが、鹿郎の心を、強くこの場に引き戻した。

「何だか最近、時折目眩がして、息まで苦しくなってきた……こつそり誰かに話しちゃおうかと思っただけ、今やここにいる人達は、おはるちゃん含めて殆ど、樋池様の配下だし。いっそ、その窓から大声で……」

「おい、まさか」

「いや、まだやってない。でも、もうそろそろ……」

うわ言めいた言葉尻が、ふらふらと揺れている。

鹿郎は、大きく息を呑み込んだ。

確かにこいつなら、面倒な取引など考えなくても、勝手に喋ってくれると読んだ。

それ自体は、ほとんどの中したようなものだが、思っていた以上に、深刻な事態になっている。

何処までも生煮えな気持ち押し殺しつつ、鹿郎は言った。

「とりあえず、説明してくれるか？ 樋池の配下だとか、何が何だか、さっぱり……」

と、突然。

その言葉尻を拭うように、もう一つ、別の声が響いた。

闇牡鹿、跳ねる！中編

「いいんですよ、説明なぞできなくて」

一擲。

さわの腕を掴んだ鹿郎の足が、突き貫かんばかりに畳を蹴った。部屋の隅に、さわの体を頑と押し込め、ふたするように、背を押し付ける。

激しく揺れた風端に、あのちょっと変わった鬢付けの香が聞こえた。

「樋池か？」

身のこなしとは裏腹の、落ち着き払った鹿郎の誰何に、樋池は溜息で応えた。

どこからどう現れたものか、畳の真中にきちんと座り、扇子をひらひら動かしている。

「やはり人間、忙しすぎると判断を誤るな。余計な詮索をするなんて条件を、付け加えるのを忘れていた」

怒気を漲らせた鹿郎が、立ち上がるうとした時だった。

背後から伸びた腕が、その首根を掴み締め、真横にひよいと振り払った。

「うきゃー！」

思わぬ方向から突き押され、鹿郎の体は、あっけなく畳を転がる。目を瞬かせた樋池の面前に、さわが仁王立ちに立ちふさがった。

美眉に籠った怒りの鬱気が、樋池に居住まいを正させる。

さわが、ぼつりと言い挙げた。

「樋池様」

「せ、先生、先ずはおちつ」

「約束が違う」

続きかけた声を斬り捨て、さわはくつきりと言い放った。

気色すら消え去った底無しの眼差しが、座る樋池を凝つと見下ろ

す。

樋池は一つ、咳払った。

「さわ先生と、養生院の皆様には、本当にご迷惑を……」

「建前は聞いていない」

転がった鹿郎が、唸り声と共に、身を起こした。

さわは、淡々と言い継ぐ。

「何故つなぎが、一つもついていないのです。私はお願いしたはずです。むやみに動かさず、ここでじっとしている代わりに、養生院に必ず一報を入れてくれと……原因までは言わずともいい、ただ、私が暫く戻れない事だけでいいから、伝えて欲しいとお願いしたはずです」

「きちんと、覚えております」

被せる様に、樋池が言い挙げた。

そして空模様でも話すかの如く、話の続きを引き取って語る。

「先生からその旨を聞いてすぐ、私は養生院につなぎを取ろうと手配しました。ですがその直後、奉公人の一人が、不審な動きを見せまして……そ奴は今、別所に監禁しておりますが、味方の信用が、一気に崩れ去ってしまいました」

「ひよつとしてそのために、御店の人間を全て入れ替える、なんて真似をしたのか」

鹿郎が、割り込む。

そちらをちらりと見やりながら、樋池は肩をすくめた。

「おはるちゃんに相談した処、ちょうど人足の総入れ替えを計画していたそうで、それを利用し、比較的簡単に、入れ替え自体は成功しました。ただ……」

大窓からの温い風が、さわの深削ぎ髪を揺らして過ぎる。

扇子を静かに畳みながら、樋池は続けた。

「外部からの監視が続いている、その可能性が、どうしても否定できなかつた。なので止む無く、普段の状況で取られる御店のつなぎ以外は全て切り、徹底的に平常を演出し続ける事に決めたのです」

「臧を切られた奴らが、適当な事を言いふらしたら、どうするつもりだったんだ？ 中には、内通者らしい奴までいたんだろう」

不機嫌を眉間に溜めて、鹿郎が、再び畳の上に戻る。

それを見た樋池は、にやりと笑った。

「鹿郎もさわ先生も、最近は、裏葉柳に來られてないでしょう？」

「それがどうした」

「もしこちらに足を運んでいたなら、噂で聞いていたはずですよ。この御店、既に御上に没収されたとか、陸路事業に打って出るとか、医薬の扱いを取り止める用意をしてるとか」

「……わざと滅茶苦茶な嘘を、個人個別に吹き込んで、その上で臧を切ったか」

「この御店の奉公人は、もともと利潤のみに強いつながりを持っている。今の時点で内通していなくとも、多少の金子で掌を返す事が容易に想像できた……どうせ誰も信用できないならばいつそ、という事です」

「やっぱりお前、最悪だな」

「褒め言葉だろうな、当然」

苦笑する鹿郎を、苦笑で見やった樋池は、折り目正しく、さわの方へと向き直った。

「以上の理由で、つなぎを取る事はできなくなった。しかしこの事をさわ先生に話すと、先生を今以上、危険な立場に引きずり込む事になりかねなかった。なので、事が全て収まるまで、放置を決めた次第です。誠に……誠に、申し訳ありませんでした」

畳に手をついた氷川が、深々と頭を下げた。

底無しの虚無だったさわの眉間に、ようやく不機嫌の色が差した。短く息を吐くと同時に、いかった肩から力が抜けて、なだらかに落ちていく。

「……理由は、判りました。でも……」

「やはり御納得は、いきかねますか。困りました……」
頭を下げたまま、ふう、と、樋池が息を吐く。

と、突然。

横に控えていた鹿郎が、二人の間に、真正面から割り込んだ。さわが、ぼつりと言い挙げる。

「鹿郎？」

「いいからさわ、お前はもう、黙ってな」
「しかし」

「おい、樋池。何でお前は、困ってるんだ？」

何も答えずに、樋池はゆっくりと頭をあげる。その眼差しが、鹿郎をヒタとねめつけた。

「決まってるだろう、さわ先生のご機嫌が……」

「オレに口先の嘘は、利かねえよ」

戸惑ったさわが、鹿郎と樋池を見比べる。

その事を知ってか知らずか、鹿郎は、慎重に言い継いだ。

「さわを、危険な立場に引きずり込みたくなかった。なるほどそいつは、ホントの事だろう。さわに一筋でも傷がつけば、養生院を筆頭に、この裏葉柳の医術使い全てを、敵に回す事になる。特にお前みたいな、派手な立ち回りと縁の切れない仕事をしている奴にとっちゃ、それは即、本音建前両面での、致命傷となるからな」

「そこまで判っているなら……」

「お前はオレ達に、明日の夕刻まで、ここにじっとして欲しいと言ったな。恐らくその頃合いに、この御店絡みでヤバい何かが起こるんだろう。それはいいんだが、なら何故今、さわの機嫌を取りに来た？ こいつの口は……まあそのナンだ、比較的だ、堅い方かもしれないから、こいつがオレに何かを話す事は無い、と、お前達は思ってる……お前達は、な」

鹿郎が、むせて咳き込む。

さわの眼差しが、刹那に色を失って、宙を泳ぐ。

突然色濃くなった奇妙つ気に、樋池は眉をひそめた。

「鹿郎？」

「あ、いや、まあ、そう思っているだろ？」

もう一度咳払い、鹿郎は言い継いだ。

「そしてオレだって、詳しい事なぞ、何一つ判っちゃいなかった。明日の夕刻まで完全に放つといた方が、さわも安全なままだったし、オレだって動き様が無かったんだ。何故今、わざわざ自分の手の内や不始末をあげつらって、詫びを入れているんだよ」

「そ、それは……」

言いかけたさわを、掌で制した鹿郎は、僅かに首を傾げると、その場に腰を落ち着けた。

「なあ、樋池。こういう時、お前みたいな奴は大抵、腹ん中に別件を抱え込んでいるもんだ。違うかい？ 早く白状しないと、刻はどんどん過ぎちまうぜ？」

それをじつと見ていた樋池は、大きな溜息を吐いた。

「何故、私が新しい依頼を持ってきたと？」

「ほーら、やっぱりな。お前はそういう奴だからだよ」

「その名推理に免じて、何とか一つ、御助力頂けないものか」

「オレの仕事は、仲間達の間でつなぎを取って回る事、だけじゃない。貴重で優秀な養生院の人材を、妙な荒事から守って遠ざける事も任されている……お前がどう言い繕おうと、さわがこれ以上この件に深入りをする事は、このオレが許さねえよ」

「判った判った」

樋池は、懐に手を差し込んだ。

「こういう意地悪な手段は、あまり使いたくなかったのだが」

と、言い淀みつつ、大ぶりの帳面と、細身の小筒を取り出す。

「……樋池様？」

さわが、呟いた。

樋池は黙ったまま、帳面を畳上に置き、小筒の尻を小さく捻る。

かちりと小さな音が噛み合い、墨を含んだ小さな筆が、二つ転がり出た。

鎮息の墨香が、宙一杯に広まる。

鹿郎は、首を傾げた。

「樋池……お前、何をしてる？」

「何、私とさわ先生の準備をね……内緒話の」

突然、樋池の手が帳面を取り上げ、鹿郎の踵が、その場を強く踏みにじった。

イ草の千切れる音が、ぶつりと響く。

息を呑むさわを尻目に、鹿郎と樋池は、面を頑と突き合わせた。

「貴様の耳は、お飾りか？ それとも、話が難しかったか？」

「もとより、お前の話なぞ知った事じゃない。私はさわ先生と、話をしなきゃいけないんだ」

「いい度胸だ。養生院を敵に回すとどうなるか……」

一擲。

鹿郎を睨みつけたまま、樋池が叫んだ。

「おきんの死因！」

ほんの僅か、鹿郎が鼻白む。

噛み合ぬ応えに、しかし一番早く目を見開いたのは、蚊帳の外に置き去られていたさわだった。

「ちよつと待て！」

犬猫ですら二の足を踏みそうな、鹿郎と樋池の合間に、敢然と割り入ってくる。

「さわは口出しふくむっ……」

悪態を吐こうとした鹿郎の口を、さわの腕が、真っ直ぐに掴み塞いだ。

鉄針の眼差しを、真っ直ぐ樋池に叩き付ける。

「死因、とは？」

震える問いを聞いた樋池は、背筋を伸ばして言い挙げた。

「聞かれた通り……ここで死んだ、おきんの死の原因です」

鹿郎が、さわの腕を振り解く。

「死因だと？ じゃあ、この奥方さんは……」

「死んだ。直接の死因は心臓の発作だけど、特定の薬物を、長期に渡って摂取していたらしい……私がここに着いた時には、もう息

がなかった」

声音の端を彷徨わせながら、さわはぼんやり呟いた。脳裏の記憶が、激しく瞬く。

数日前、今吉と共に銀洲に着いたさわは、母屋の地下に設えられた、座敷の一角に案内された。

冷やかな室内で、静かに横たわっていたおきんの側には、世話係の下女が一人。

彼女が言うには、さわが到着する少し前まで、おきんは息をしていなかったらしい。

そして初めの異変は、数年前に遡る、と話し始めた。

ある時から、邦介の介添えを得ても、真つ直ぐ歩けなくなったおきんは、やがて酷い倦怠を訴える様になった。

心配した邦介は、自身が疲れている時に服用するという薬を勧め、おきんも服用し始める。

そして数年後、強度のせん妄が始まり、商いに支障が出始めた。

初めは気づく事さえ無かった吐血と下血も、じわじわと深刻さを増し、おきんの体力を削ってゆく。

こうなってくるまでは、おきんの不調は全て邦介が付きつきりで、誰の目にも触れさせず、手厚い看病を続けていた。

しかしせん妄の悪化が、止まる事は無かった。

離す言葉の意味が不明となり、薬の服用こそ止める事は無かったが、やがておきんは、邦介自身までも忌避し始めた。

そして屋敷中を這いずりながら、奇声を張り上げ、物に構わず噛み付き、歯を立てる様になりだした時。

このままでは、商いに支障が出るとの判断で、邦介は、屋敷の地下に秘密の座敷を造り、そこに暴れるおきんを移した。

そしてまた暫く時が過ぎ、一月程前。

邦介自身が謎の失踪を果たし、薬の供給が途絶えた時から、おきんの苦悶が酷くなった。

業苦の中、やっと絶息を得られた日に、さわは到着した事になる。

この話を聞き終えた時点で、さわはおきんの死因を既存の病ではなく、何かの中毒をこじらせた挙句の死と断定した。

絶える事の無かった下血は、確かに致死率の高い疫病を疑わせたが、防疫対策の無いまま、長く面倒を見ていた女中や奉公人達には、何の異変も見当たらない。

既存の疫病では、全くあり得ない事だった。

では、中毒の元となった薬品は何か。

一番怪しいのは、邦介が与えていた薬だが、邦介が失踪した今、薬自体の分析は不可能。

鑑定と検死のため、おきんの遺体を養生院に運ぶ、その手配を御店の者に頼もうとするさわの前に、樋池が現れたのがちょうど六日前の事となる。

額に、薄く汗が浮かび始めた。

幾度か息を詰まらせながら、さわは声を絞り出した。

「樋池様……それは一体、どういう意味なのでしょう……？」

遠くからぼんやりと、樋池の声が聞こえてくる。

歯を喰い縛り、さわは必死に、耳を凝らした。

「実は、さわ先生がこちらに来られる以前から、我々はおきんの病理に、ある程度の目処を付けておりました」

「じゃあ私が、遺体の検分をしていた時も？」

「何度かさわ先生に、その事を御伝えしようかと考えました。ですが話せば自ずと、さわ先生を我らの計画に引きずり込む事になってしまつ。ですから今までは、お話しできなかつた次第です」

鹿郎の口を塞いでいたさわの手が、落ちる様に離れた。

「お、おい、さわっ……」

咳き込む様に、鹿郎は、さわを呼んだ。

しかし、応えが無い。

まるで目の前から、立ち消えてしまったように……そんな虚ろが、鹿郎の総身を粟立たせた。

話を聞く限り、悪意から成された事ではない。

それは判る。

樋池は基本、嫌な奴だが、己よりも弱い者に対しては、できうる限り献身的だ。

さわに事実を告げなかった理由も、それはきつと嘘ではないが、しかし。

ここまで足蹴にされた事を笑って済ませられるほど、この女の求道の志は、お安いものではないはずだった。

鹿郎の指がミキリと鳴って、堅い拳を作り上げた。

「樋池」

樋池の眼差しが、針のように細まる。

「何だ」

「大体の言い分は、判った」

「有り難い事だ」

「だから一発、殴らせる」

応えは、無い。

構わず、鹿郎が畳を踏み締めた時だった。

「待て、鹿郎」

「さわ？」

「いいから、待てと言っている」

うわずった声が、厳として鹿郎を押し止める。

殴打に変わり、さわの眼差しが、樋池を真つ直ぐに見据えた。

「樋池様……樋池様は最初、内緒話と仰った。その内緒話とは……」

「おきんの死因も含まれますが、実はそれには、もう一つの内緒事が、大きく関わっているのです。ですから、この話を聞くのであれば、先生は自動的に、今回の件の関係者とならざるを得なくなる」

「何故、そんな大事を今、私に話そうと？」

「鹿郎の鎖を解いた後、まだ状況が変化しまして」

一髪の間、眉を寄せた樋池は、指で唇をなぞり始めた。

「どうあっても、さわ先生の更なる御助力が必要となったのです。ですから、そのお願いに上がりました」

「だったら何故、その事を最初に言わないっ！」

苛立ちもあらわに、鹿郎が叫ぶ。

樋池の頬に、苦笑が浮かんだ。

「話そうとしたさ。さわ先生だけにね」

「さわに、だけ？」

「最初から、この件を話すのは、さわ先生にのみと決めていた」

「お前なあつ、そんな勝手が……」

再びさわの腕が持ち上がり、憤る鹿郎の口を、掴み塞いだ。

どこの力加減が効いたものか、鹿郎は、そのままストーンと座り込む。

何事も無かった様に、しかし真っ青な顔色のまま、さわは樋池の方へと向き直った。

「そのお話、何故鹿郎に聞かせられないのですか？ 私だって、こ

の男の言う事を丸ごと無視して、何かあった場合……只で済むはずがありません」

「身の守りに、側に置くこと？」

「その方が、全て丸く収まる。そう思いませんか？」

「今回の件は最終的に、お二人が思うよりも、多くの人数が動きま
す。そんな中に、鹿郎みたいな見えずを放り込んだら、どうなるか
……いる気遣いと、いらぬ気遣いが入り交じり、混乱が起きましょ
う」

息を吐いた樋池は、同心羽織の黒を揺らして、腕組みした。

「ここまで仕上げたお膳立てが、万が一にも失敗となった場合。御
上につく傷は、相当なものとなる。脅す訳ではありませんが、詰め
腹だって、私一つのみじゃあ、到底収まらない……だから万全を期
すためにも、鹿郎は使わないと決めました」

解かれた樋池の両手が、一つ大きく打ち鳴らされた。

小気味よい破裂音が、凝り固まった風端と、二人の心身を振るわ
せる。

「この状況でお話できるのは、残念ながらここまでです。後は……」

…」

投げ出された帳面が、畳をパサリと小さく叩いた。

それを暫し見つめたさわは、小さく頷き、鹿郎の面を放す。

口元を拭い、鹿郎は呟いた。

「……で？」

既に答えは判っていても、確かめずにはいられない。

「決まっている」

陰鬱極まったさわの声は、それでも真っ直ぐ、揺らぎなかった。

途切れてしまった筋を、つなぎ通す機会が再び訪れたのだ。

筑摩ノ国の医師一家、その末娘として生まれ、医学書を枕に育つ

たさわに、取るべき道は一つしか無い。

「おきんさんの死因が、内緒話の中に隠れているというなら、私は話を聞かなきゃいけない。そうしなきゃ、どのみち私は、養生院には帰れない」

「養生院に追わざる者、不要……何時も院長が、言ってる事だもんな」

膝を軽く打ち払い、鹿郎は立ち上がった。

座る樋池に面を向けて、にやりと笑う。

「巧くやったじゃねーか」

「できなかつたら、切腹だからな」

「何をする気か知らんが、せいぜい気をつけろよ。その女医先生は、見た目よりも遥かに軟弱だ。どんな傷でも付いたが最後、裏葉柳じや、まともな医者にはかかれなくなるぜ？」

「お前に言われずとも、承知している。それより鹿郎、お前……」

「判ってるって。逃げも暴れもしねえよ。内緒話が終わるまで……」

「そうだな、一階で、昼寝でもしてくるか」

「結構」

鹿郎の踵が、くるりと返った。

「鹿郎……」

不安そうなさわの声が、背に聞こえる。

「ま、頑張れ」

小さな鹿鳴を放った鹿郎の背が、そのまま階段に向かってゆく。途端にこみ上げる焦燥に、さわはふと、立ち上がりかけた。

と、突然。

「さわ先生」

短く呼ばれ、そのままヒョイと腕を引かれる。

ストンと腰を落とした一髪の間、掌に小筆があてがわれ、畳上の帳面を差し向けられた。

「どうぞ、ご確認下さい」

「あの、樋池様？ 鹿郎は下に行きましたから、その……もう普通に話しても」

「こればかりは、先生もお判りにはならない……いや、私とて、一度似た目に遭ったからこそ、判るようになったのですが」

笑った樋池は、小筆の尻で、己の瞼の傷跡を突ついた。

「あ奴の耳鼻は、利かない目を補って余りある働きをします。油断は一切、なりません」

「でも」

「ご面倒は承知ですが、今は曲げて、御願致します。私のためと、思っただ下されば……さ、どうぞ」

樋池の笑顔に、薄ら寒い何かが宿った。

物腰こそ柔らかいが、強行手段を取る事に、尻込みするような男ではない。

大きく息を呑んださわは、恐る恐る、畳上の帳面を取り上げた。

樋池らしく、正確かつ簡便な 内緒話 を読み進めていく。

開け放たれた大窓から、鳥の声が、細く小さく聞こえてきた。

「あのう……」

小さく囁くさわの視線が、帳面から上げられる。

面を左右に振った樋池は、顎を使って、帳面を指す。

最早、是非も無し。

大きく息を吸ったさわは、小筆を持つ手を、帳面に伸ばした。

小さく震える墨痕が、紙面に残った樋池の問いに応じていく？

灰白色の雲が、空をみつしりと埋め尽くしている。

昼は何か持ち堪えたが、夜半になれば、雨が降ってくるだろう。こんな日は、昼も夜も、刻の区別が付け難い。

それでも、大小の商家群を両に抱えた月白表通りには、帰路を急ぐ雑踏と、本日×の掃除に勤しむ小僧達が、右に左に働いていた。

その大きさが一際目立つ銀洲も、店頭の積み荷は今や綺麗に引き揚げられ、あちこちうろついていた人足達も、各々のねぐらへと帰っている。

何処かで、猫が鳴いた。

もうすぐ、一日が終わる。

銀洲の大暖簾が翻ったのは、そんな最中での事だった。

「それじゃあ、おはるちゃん。次回取引の件、頼みましたよ」

「はい、承りましたでございます。毎度ありがとうございます」

自ら暖簾を避け、客と思しき男を通したおはるは、子猿の愛嬌たつぷりに、深く頭を下げてみせた。

客はにこりと微笑んで、雑踏の中に消えていく。

そして空っぽの籠を下げた、行商娘の一群が、さざめきと共に行き過ぎた時。

おはるはようやく、面を上げた。

能天気になえ見えた笑みが、綺麗に拭い落とされている。

「可哀想にねえ」

せめて、取引の締結が明日だったら??おはるは大きな溜息を吐いた。

今、銀洲では、内部で進む計画が人伝に漏れ、敵に知られる事を恐れた樋池から、平常を装う様、強く命じられている。

だから、いつも結んでいる契約を断るとなると、それなりの説明

をせねばならない。

しかし相手も、この裏葉柳で商売をしている商人だ。不自然な言い訳をして、不審を抱かれてはならないという事で、結局、商人としては最悪の嘘を吐くしかなかったのだから、胸が痛まぬはずが無い。

まあ直に嘘を吐いたのは、商人に化けた樋池の部下だし、どんなに胸が痛んだとしても、所詮は御用の上での都合だから、お互い泣き寝入りをするしかないのだが。

けど、あの男が背負う御店。

今回の取引が駄目になった後、代理の店に足元を見られ、鬼のような急場手当を請求されるに違いないわな??おはるが再び、溜息を吐いた時だった。

「だからって、情けは無用だぜ、おはる」

「甚五郎親分っ」

暖簾の影から、甚五郎がするりと姿を現した。

おはると半歩離れて立ち、固いなりにも、にこやかな笑顔を作る。今、世間に見せるのは、御店の奉公人同士が、夕方の息抜きをしている姿であって、それ以外のものであってはならないのだ。

「あの商人とおめえが話し込んでいた時は、ちよいと肝が縮んだぜ? 余計な事を言っちゃもうんじゃないかってな」

「そりゃあ心外だわね。まあでも、あのお客様と自然に話せるのは、今や私くらいなものだし」

おはるは、ぷんと面を振った。

道歩く人と目が合い、にこりと笑って目礼する。

その笑顔のまま、おはるはシャキシャキと言い継いだ。

「何せあのお客様、いつも小僧や手代相手に、借り入れ金利やら、米の相場価格について、話を吹っかけてくるんだから」

「かりいれ……きんり?」

「その応え様で、御店の教育具合が判るって事らしい。以前、寅松つつあんが巧く応えられずに、奥様にこっぴどく叱られて。旦那様

が……」

と、甚五郎の目が、きらりと光った。

慌てて声を呑んだおはるは、人差し指で口を封じる。

甚五郎は、苦笑した。

「……大した餓鬼だよ、おめえは。未恐ろしいぜ」

「で、どうかしたの？ 奥で何か、判んない事が……」

「いや、違う。片付けが全て終わったんでな。知らせとことと思つてよ。おめえが銀洲最後の奉公人……いや、商人となつたつて事だ」

おはるが、甚五郎を見上げた。

その小さな手が、拳を作る。

「じゃあ、とうとう」

「ああ。さつき、今吉の奴が戻ってきてな。奉行所の方の準備も、全て整つたそうだ」

「そっか」

おはるは、ぽつりと呟いた。

今吉はこの後、上戸の北にある大黒商屋に誘われ、手代として勤めると言っていた。

どん底から這い上がり、裏葉柳に君臨した希代の名店は、かつての轍を忠実に辿りつつ、衰退してゆく。

在りし日のおきんも、こんな気持ちで、立ち去る者の背を眺めていたのかな？？胸に過つた寂しさを込めて、おはるは大きく言い放つた。

「いよいよだねえ！」

「ああ、いよいよだ。今頃、あつちこつちに潜り込んでた奴らが、手はず通りに結集してきているぜ」

「樋池様、大丈夫かなあ」

「大丈夫に決まつてる。随分と……いや、うむ、相当変わった性格の御人だが、切れ具合に關しちゃ、先代様に勝るとも劣らねえ。今回の捕物だつて、大成功間違いなしだ」

「そうよね。何てつたつて、このあたしが手助けしてんだもの。大

成功間違いなし！」

うむ、と拳を握ったおはるは、いそいそと、踵を返した。

大戸の脇に設えられた物入れから、箒とちりとりを掴み出す。

「お、おい、おはる」

甚五郎は、手を伸ばした。

これから先、この御店が客を入れる事は、もうない。

そんな定めにある店先の掃除などより、さっさと表戸を締めてしまいたかった。

そうすれば、おはるが樋池から請け負った役目??世間の目を欺くため、御店に潜入した自分達、商いの素人を、玄人らしく装う手助け??それも終わる事になる。

確かにおはるは、その辺にたむろする一山幾らの若造より、数倍の事を巧くこなす。

しかしどんなに使えようとも、甚五郎の目にはどこまでも、おしやまな小娘でしかなかった。
が、しかし。

己に向かつて伸ばされた手を見たおはるは、鳴らんばかりに、目を瞬かせた。

「駄目よ、親分。樋池様から言われてるでしょ、何処で誰が見てるか判らないから、必ず最後まで、いつも通りに振る舞う様になって」「し、しかしだなあ……」

「心配しなくても、これが終わったら、すぐに土蔵に行つてさ。鹿郎と二人で、高見の見物としゃれ込むからさ」

「しゃ、しゃれ込むって、おめえ……」

「ほらほら、親分も手伝つて。こんな時間にこんな場所ではーっとしてる商人なんか、この裏葉柳にゃ一人もいないんだから！」

手にした箒とちりとりを、おはるはキュツと突き出してくる。

目を瞬かせた甚五郎は、ぷふつと吹き出し、道具達を受け取った。

「つたく、おめえには敵わねえよ」

「おほほほ……要の甚五郎に、表を清めてもらえるんだもの、こ

の御店だつて本望でしょ」

熊の如き体躯の甚五郎と、子猿のようなおはるの二人が、雑水桶の水を打ち、埃を静め、塵を掃き集めていく。

手早く最後の塵を集め、おはるに託した甚五郎は、ううん、と腰を引き伸ばした。

「つしや、綺麗になつた！」

「うん、これで奥方様も、満足できるでしょ！」

ちらりと、甚五郎は、おはるを見た。

「そう言えば、ここの奥方さんだがよ」

「はいな？」

「御上と、御官医様の許可が下りてな。上本寺の無縁仏達と一緒になつた」

目を瞬かせたおはるは、甚五郎を仰ぎ見た。

「随分と、嫌がられたんじゃない？ 本当に本気で、寄進も御布施も、なーんにもしなかつた御人だつたから」

「まあな。しかし仏になつちまえば、不問にするしかなかるうよ…

…おいおはる、大丈夫なのか？」

「何がさ」

「何がつて……随分じゃねえか。俺より高え賃金で、お前をここに雇い入れた御人だろうに」

「死に顔を、拜んでないせいかもねえ。最期の頃になると、皆『子供がする事じゃない』って言つて、あたし、お世話させて貰えなかつたのよ」

「そうか。ここに居るのは、金の亡者ばかりと思つていたが……まともな判断ができる奴も、勤めていたんだな」

「だからねえ、奥方様は買ひ付けのために、遠く旅にお出かけになられた……そんな感じかな。それに……」

「それに？」

「泣いて惜しむにやあ、随分と面倒な御人だつたからねえ」

「おいおい、仏さん相手にそんな事、言つてやるなよ。冷てえなあ」

おはるの眼差しが、ツと半眼に伏せられた。

小さな顎をしゃくるように持ち上げて、ふふん、と勝ち気な息を吐く。

「ま、男連中が判る類の苦勞じゃなし……あ、旦那様は、違っただけ」

「おはる……」

自分の言葉に、気づいたのだろう。

きよとんと甚五郎を見上げていたおはるが、次の刹那、目を瞬かせて苦笑した。

「……おかしいよね。詳しい事が、一切合財明るみに出たっていうのに、未だに旦那様の……邦介様の事が、心のどつかで心配なんだ」
甚五郎の大きな掌が、おはるの背中をそつと叩いた。

「安心しな。そう言ってるのは、おめえだけじゃねえ。ここの御店の奴ら全員、樋池様と俺を前に、同じ事を宣いやがった」

「そつか……皆、そうだったんだ……」

何も言わぬ代りに、甚五郎の掌が、背中を優しく叩いてくる。

普段なら、子供扱いするなと断固喚く処だが、今のそれは、とてつもなく暖かく、ありがたく感じられた。

甚五郎の言いたい事は、大体判っている。

大人の都合で、子供らしからぬ綱渡りをしているあたしを、心から案じてくれているに違いない。

まるで初めて出会った時の、旦那様みたいに??おはるは、深く息を吐いた。

以前に勤めていた御店から、引き抜かれた直後の事。

まだ色々と慣れぬばかりにしくじった事を、おきんに激しくなじられた事がある。

その時、巧みに話に割り込み、矛先を逸らして助けてくれたのが、邦介だった。

その後、銀洲の流儀に慣れてからも、度々、理不尽な叱責を受けた。

が、その度に、影でそつと謝つたり、気晴らしの小遣いを、弾んだりしてくれる。

勿論それは、おはる以外の奉公人に対しても同じだった。

一度、どう考えてもあり得ぬ理由で、手厳しく叱責された手代の一人が、堪えかねて出刃包丁を持ち出した事がある。

その時も、邦介はその手代の前で、地に両手を付けて詫び、おきんの身の上話を聞かせ、見事に事態を収めてしまった。

おきんは元々、神経質な性格で、多感な頃に人の薄情を肌身で知つたせいもあり、かなり扱い難い人間だった。

が、邦介の才を見抜き、風前の灯火だった御店の命を吹き返させた手腕を見るに、商人としては決して無能ではなく、むしろ人を見る目は、誰よりも抜きん出ていたと言つてよかつた。

しかし所詮御店も、人が営むものであり、才覚のみで維持できる程、お固く清いものではない。

様々な理不尽を繰り返す内、おきんと奉公人達の軋轢は、日を追う毎に強まって、最後は皆、銀洲の主おきんのため、というより、何処の誰でもない、邦介のためにと、益々勤めに精を出す始末となつていった。

邦介も、そんな奉公人達の心を酌み、以前に増して、手厚い心配りを絶やさない。

おきんの行動が、性格以前に人格として問題になってからも、邦介は徹底的に、おきんと皆のために尽くした。

夜も更ける頃、意味も無く叩き起こされ、呼び出された拳句に殴られた手代には、翌朝きちんと頭を下げて詫び、部屋一面に塗られた汚物を片す女中達には、そつと手間賃を弾んでやる。

夜は眠らず、怒り狂つて暴れるおきんをなだめ続け、それでいて客の前では、疲れたそぶりなど、僅かも見せぬ。

一度、その身を案じた番頭が、おきんを医師に診せるように勧めたが、邦介は涙を流し、断固として反対した。

が、昼間の商談中に、おきんの奇声が響くようになっては、最早

限界。

銀洲の奉公人達は、渋る邦介を説得し、半ば強引に、おきんの身柄を地下の座敷牢へと閉じ込めた。

これで邦介も、少しは心身を休められるはず。

堅固な格子越しに、おきんを見つめる邦介を見ながら、皆が安堵の息を吐いた直後。

今度は突然、邦介自身が姿を消し、同時に、おきんが御店を担保に、莫大な額の借り入れを行っている事が発覚した。

相手は、銀洲の取引先の一つで、筑摩ノ国の回船問屋。

気づいた時には、御店の利権は実質的な価値よりも、五倍の値で流されてしまっていた。

銀洲は、混乱の極みに陥った。

ここ数日のおきんに、御店を担保に借入金を作るような正気が残っていない事は、小僧までもが知り抜いている。

とすれば、可能性は一つだった。

御店の権利書や証書の類に、皆に黙って触れる事ができる者など、幾人もいない。

この時、この只一つの可能性を追求していれば、銀洲は、まだ何とかなつたかも知れなかった。

しかし、それは成されなかった。

成されぬどころか、証書の入っていた文箱は、空のまま、蓋をさされて戻された。

かつて邦介がそうしていたように、絹の袱紗に包み込まれ、恭しく、元の場所へ。

そうしておけば、邦介が証書を持って帰ってきた際、直ぐに収め戻す事ができる。

何故、皆に黙ってこんな事をしたのか、理由は後から聞けばいいいや、きつと邦介自ら、話してくれるに違いない。

何時もの様に、爽やかに。

日に焼けた浅黒い頬を、ほころばせながら??

と、突然。

ふくらはぎに、何かがよろりと巻き付いて、おはるは芯から跳び上がった。

「うきゃっ!」

「ちよ、う、うわっ!」

おはるに突然飛びつかれ、慌てた甚五郎は、その足元を見下ろした。

その眼差しを、碧の糸目が受け止める。

見事な毛並みを備えた黒猫が、にゃーん、と甘えた声を上げた。

甚五郎の首根にしがみつくおはるの体が、ぎくりと固まり、慌てた声を挙げる。

「お、親分っ、刻は大丈夫?」

「なにっ?」

「この子、夕刻になると、餌を貰いにくるのよ!」

「む、こりゃいかん!」

慌てた甚五郎は、おはるを下ろすと、大暖簾を外す引っ掛け棒を手を取った。

これまた慌てたおはるが、甚五郎の袖を引いてたしなめる。

「ちよ、親分! そんな事より、早く戻って支度しないと!」

「なーに、この程度なら……」

「だめだめ! 樋池様の一番配下が余裕を持たなきゃ、誰が余裕を持っつてえのさ!」

引っ掛け棒を取り上げられて、甚五郎は、目を瞬かせた。

「おめえ、今のそれ、俺の女房にそっくりだぞ?」

「そりゃ誠に光栄だけど、今はそんなコト言ってる場合じゃ……」

「お、おう、判った判った……じゃあ最期の戸締まり、確かに頼んだぜ?」

「はいよっ、お任しっ!」

悪戯な子猿の愛嬌たっぷりに、おはるはにっこり微笑んだ。

最後に景気良く、おはるの背をどやした甚五郎は、慌てて奥に引

っ込んでいく。

黒猫と供にその背を見送り、ゆっくり三つを数える頃。奇麗さっぱりと愛嬌の拭われたおはるの面を、引きつった苦笑が彩った。

「大丈夫かなあ……」

にゃあ、と短く、猫が応える。

おはるはふと、黒猫を見下ろした。

何時も決まった時刻に現れ、残り物をねだっていた黒猫は、この時も、おはるの顔をじっと見上げている。

おはるは、ぽつりと呟いた。

「ごめんね。もうご飯、あげらんないの。あたしも明日からは、野良になっちゃうんだ」

長い尾が、ゆらりと揺れる。

暫しおはるを見上げていた猫は、ツツと踵を返すと、優雅に歩み去っていった。

鳥の声が、遠く風に乗って聞こえる。

頬を軽く叩いたおはるは、手早く道具を片づけると、大暖簾を外し始めた。

砂埃を払い落とし、背が足りないから踏み台と、引っ掛け棒を手にとって、掛け止めの金具を外していく。

そして丁寧に畳んだ大暖簾を抱き抱えると、重い湿気を切り断つよう、大戸を閉め切り、潜り戸と共に鍵をかけた。

振り向いた店内には、もう、誰もいない。

何時もなら、残務でまだまだ騒がしかった刻なのに。

上がり口が上がったおはるは、踏み台を使って、畳んだ暖簾を神棚に置いた。

これ以降、この大暖簾が表にはためく事は、もう二度と無い。

しかしおはるは、かつて邦介がしていたように、柏手を打ち、深々と頭を下げた。

離別の涙を流すには、色々とあり過ぎた大暖簾。

けれども商人の端くれとして、如何なる暖簾をも、粗末に扱いたくはなかった。

庭の方から、鹿鳴が聞こえてくる。

面を上げたおはるは、手早く踏み台を片付けた。

そんな気配は少しも見せないが、樋池や甚五郎、そしてその手下達は、既に最後の準備を終え、御店のあちこちで、刻を待っている事だろう。

今の処は、何とか順調??このまま素直に、全てのけりが着く事を願いながら、おはるは土蔵の方へと向かった。

抜け殻と化した板張りの上がり口から、最後の人氣が去っていく。銀洲という御店の、欲塵に翻弄された命運が、つらりと揺れて立ち消えた。

人がいない。

薄曇りの夕暮れに、ぼつりと建った裏庭の土蔵は、ただそれだけで、淘汰の悲哀を放っていた。

遅い昼頃、樋池達ともめにもめた、一階の板間。

そろそろ閉じられてしかるべき、明かり取りの小窓は、未だに開いたまま、夕映えの色を取り込んでいる。

群れをなして飛ぶ、鳥達の鳴き声が、そこからすうと吹き込む。

が、それを聞き取っているべき者??鹿郎の姿は、何処にも見当たらなかった。

数刻前、樋池とさわの内緒話 が始まると同時に、鹿郎は、土蔵の一階へと降り立った。

そして程無く、さわと、薬箱を携えた樋池が、黙ったまま、土蔵を出てゆく。

それを無言で聞き送った鹿郎は、扉が音を立てて閉まると同時に、土蔵の壁や床を叩き始めた。

一階の周囲を手始めに、二階、三階、その床と四方の壁。そして今は、三階部分の壁を、丹念に叩いてまわっている。命じられた通りにじつとしていけば、誰かが解放してくれる。自分の馘首を阻止するために、誰かが養生院に事情を説明し、取りなしをしてくれる。

事程左様に人を信じて、じつと動かずにいられる程、恵まれてきた訳ではなかった。

ともかくにも、他人の気配が一切ない、その事が味方になる。鹿郎はたった一人、一心不乱に叩いてまわった。

傷に鎧われた固い指で、隙のない様、叩いていく。

見える者にとっては睡魔を呼ぶ、単調な繰り返し音。

しかしその響きは、鹿郎の脳裏に、この土蔵の寸分違わぬ立体を、密に構築していった。

よじ登ってきた外壁にも負けぬ、分厚い壁と、頑丈な梁。

窓の類も、造りはとても丁寧で、床板にも軋みは無く、火事や風雨から、荷を守る備えとして、寸分の手抜きもない。

やがて最後の部分を叩き終え、暫しじつとしていた鹿郎は、ついに大きく立ち上がった。

これで、土蔵全ての壁や床を、まんべんなく叩き終えた事になる。見える者が見ていたならば、想像を絶する奇行と捉えただろう。

しかしこれで、壁や床に仕掛けの無い事が『聞き通せた』?? 耳朶をカシカシと掻きまわった鹿郎は、体を大きく引き伸ばすと、そのままごろんと寝転んだ。

砂が神楽を成す様に、宙を奔る音の一塵一塵が、そこにあるものを撫でてゆく。

その撫で具合を聞く事で、骸を掴み芯を伺う。

中々難しいのだが、音塵の様相を聞き分ける?? と言えば、きつと間違いないだろう。

目が見えなくなって程なく、鹿郎は、身ノ内に潜んだこの感覚に気がついた。

無数の怪我を背負い込みながらも、それらを磨き覚えていく内に、今度は鼻の力に気付く。

次は肌身にそれを覚え、風に混じった気配の味で、モノの区別がつきだす様になった頃。

見えずとなつた己を哀れむ世間はさておき、見える見えぬの理は、鹿郎にとって、些細なものとなっていた。

「ぴゅっ……」

がらんどつに、響く鹿鳴。

何度目かの鹿鳴が、健やかなままに吹き抜けていく。

巨大な商家の土蔵には、階と階の間や、壁と壁の間などに、秘密の隠し部屋のようなものを造る事が、まああると聞く。

しかしこの土蔵、地上に建つ部分に関しては、正味の三階建てに違いなかった。

この蔵はただっ広いだけで、何も無い。

本当に、何も無いのだ。

「気に喰わん……」

わざと声に出して、鹿郎は呟く。

と、突然。

一階の方で、重たい鉄擦れの音が響いた。

ゆっくり身を起こす内に、大扉の閉じる鈍い響きと、トタトタと板を踏む、軽い響きが近寄ってくる。

程無く、階段口から小さな気配が、ひょいと面を突き出した。

「ありや鹿郎、まだいたんだ」

「おはるか」

お気楽な足音を響かせながら、おはるは鹿郎の側に寄ってゆく。黙ったままの鹿郎に、おはるは一人で喋り続けた。

「まさか鹿郎が、樋池様の言う事聞いて、今までじっとしているなんてねえ。とうの昔に抜け出して、どっかでいらぬちよっかいを出してるんじゃないかって……」

「ちようどいいや。無駄だろうけど、聞いてみっか」

「……はい？」

おはるは、目を瞬かせた。

大窓から入る暮色が影を落とし、鹿郎の面差しが、よく見えない。瞼を擦るその向こうで、鹿郎が、小さく首を傾げた。

「今日は一日、ずーっと人を探してる気がするけど……ここの旦那さんは、どこ行ったんだ？」

おはるの頬から、刹那に笑みが拭われる。

しかし何とか、声音だけはそのままに、からりと応じてみせた。

「何さ、それって。どういう事だい？」

「どうもこうもねえよ。言葉通りだ。確か……邦介さん、だったかな？ かのお方は、どこに消えちまったんだい？」

「商いに決まってるでしょ？」

「嘘吐け」

短く斬り払われて、おはるは声を呑み込んだ。

立ち上がった鹿郎は、畳の置かれた場所の反対側、板間の隅に、歩み寄る。

そのままそこにしゃがみ込むと、掌で、床をザツと撫で擦った。

大窓からの夕映えを受け、乾いた埃が、神楽を舞う。

「実際に御店を仕切っていた奥方さんが、不審な死を遂げた。その後、御上の手下を御店に招き入れ、そいつらのなすがまま、奉公人全てをズブのド素人と入れ替えして、倉の中を空っぽにして、商いしている上っ面だけ整えて、その上で、新しい商いの買い付けに出たってか？ 無茶言うなよ」

鹿郎の舌先が、掌を舐める。

鋭く唾棄し、両手を派手に打ち鳴らして、鹿郎は、立ち上がった。

「一日二日の埃じゃねえぞ？ 即時決済貸し売り倍算、各階上等の銀洲さんが、こんなになるまで倉中を空っぽにして……もしホントに買い付けに出てるなら、一体、どんな商いを始めるつもりだったんだ？」

ふつと茶々を入れかけて、おはるは慌てて、口を塞いだ。

今、声を出せば、きつとそこから、色々と読まれてしまう。

目前の見えずを睨みながら、おはるは必死で、つけ込む機会を讀もうとした。

そんなおはるの躊躇を知ってか知らずか。

大きく首を巡らせながら、鹿郎は、訥々と言い継ぐ。

「恐らく、これから明日の朝方までに、何か荒事が起きる。まあ、捕物の類だとは思うけど……とにかく、大きな荒事が起こる。しかしそれにしちやあ、綿密に練られた計画の末の事とは思えない。完全に泥縄の匂いがして、しょうがない。そんな捕物が、本当に巧いくのかどうか……正直、オレは信じていない」

「……………」

「だから担保をもう一つ、取っところと思ってね」

「担保？」

おはるが、呟く。

鹿郎は、続けた。

「この荒事が、樋池の目論見通りに運ばなかった場合。恐らくあいづは、詰め腹斬られちまうだろう。そうなった時に、オレとさわの扱いを説明して保証してくれる、周囲の手下どもより一段上の当事者が必要なんだ。そしてこの奥方さんが死んだ以上……」

「ち、ちよつと待った！」

突然、鹿郎の声を遮り、おはるが叫んだ。

言い淀んだ鹿郎に、一息に詰め寄る。

「御上はともかく、奥方様が死んだと、手下とか……あんな一体、誰に聞いたのさ！」

滅多に聞けない、おはるの本気の驚愕に、鹿郎はぬたりと微笑んだ。

「決まってるじゃねえか。さわが教えてくれたんだよ」

「嘘っ！ さわ先生が、まさかつ！」

「ふふん」

絶句のおはるにこそぞとばかり、鹿郎は突っかった。

「口外するなつて、念押しでもしたか？ 無駄だつて、いつも言ってるだろ？ あいつは腹に秘密を留めておけるような奴じゃ……」

「悪い事、しちゃったな……」

「えっ？」

いつもは無縁？？というか、目前の人物が何者なのかを疑いたくなる様な、真剣な躊躇いと後悔。

そんな声音も出せるのかと、からかう事すらためらわれた響きの色に、鹿郎は思わず息を呑んだ。

そんな鹿郎の様子にも気づかぬものが、今度はおはるが、懺悔の如くに喋り続ける。

「こんな異常事態の中、たった一人で刻を待つのは不安だろうと思つて……ほんの幾つか、さわ先生にホントの事を打ち明けたんだけど……返つていけなかつたか。黙つてるべきだつた！」

「いや、それはそうなんだが」

「うーん、あたしとした事が……只でさえ繊細な方なのに、いらぬ心労をお掛けしちゃつたよ……」

どうやら、本気で言っているようだ。

一体見えてる奴らは云々？？いつもの惑いにくらくらしている鹿郎の袖を、おはるはぎゅつと掴み締めた。

「ねえ鹿郎。悪いけど、後で一緒に謝ってくれる？ あたし、本当に悪気は無くて……ただ先生が、不安な思いをしないように……」

「その繊細なさわ先生の御為にも、だ！ ここの旦那の口上が、必要なんだよっ！」

掴まれた袖を振り払い、鹿郎は、憤然と立ち上がった。

「お前もよく考える、指揮者はあの『犬同心』だぞ！ 都合が悪くなれば、降りかかる罰が少ない事を見越して、さわに全責任を引つ被せかねない。そんな事、させてたまるか！」

目を瞬かせたおはるは、半ば反射で声を上げた。

「あんたこそ、馬鹿じゃないの？ その辺の三文同心とはモノが違

うんだから、樋池様がそんな事、する訳ないじゃない！」

「判るもんか！ 同心なんざ、同じ様な事、言ったりやったりして
る割には、きちんと腹斬った話なんて聞いた事ないし！」

「その辺のゴロならともかく、樋池様は失敗した事無いだもん。当
たり前でしょ！」

「……それもそうだ」

世の同心達が聞いたら、何とするであろうか。

しかし、忌憚のない怒鳴り合いを続けたせい、澱みが僅かに緩
んだ気がする。

互いに肩で息をしながら、二人は同時に、冷たい板間に腰を下ろ
した。

おはるが、ぼつりと呟く。

「きつと樋池様、今頃、くしゃみされてるわね……」

「いい気味さ」

ふう、と大きく息を吐き、鹿郎はきつぱりと言い挙げた。

「とにかく、あいつがそれなりだって言うのは、認めよう。でもお
前が信用している程に、オレはあの犬同心めを信用していない。お
前はオレ達とおんなじ町人の出だろ、ちったあこつちの事だって考
えてくれよ。お前だって、オレと同じ立場だったら、もつとすげえ
事やってたと思うぞ」

「……悔しいけど、言い返せないわね」

「改めて言つとくが、樋池の邪魔をするつもりは、これっぽっちも
ねえよ？ けど今のままならもう一つか二つ、保険をかけておかな
きゃならんだ。そしてこの奥方さんが死んじまつた以上、旦那
さん以外に適役はいない。旦那は……邦介さんは、どこに行ったん
だ？」

やっぱり、棺桶に突っ込んでくべきだった？ 必死に舌打ちを堪
えながら、おはるは拳を握り締めた。

鎖で簀巻きにされていた頃なら、何とでも言えたらう。

が、この期に及んでしまつては、嘘も理屈も、事態を悪化させる

だけかもしれない。

後もう少して、樋池達の仕掛けが動き出す時刻。

なのにここでふらふらと出歩かれ、万が一にも、敵に仕掛けがばれるような事になったら?? 頭をぶんぶんと打ち振ったおはるは、大きく息を吸い込んだ。

「旦那様は、ここにはいないよ」

鹿郎の肩が、ぴくりと動く。

「へえ……お前、知ってるのか?」

「さあね。鹿郎は、どう思う?」

「……知らぬは、我が身ばかりなりけり、つてか」

「恨みがましく言わないでよね。どのみち明日の夕方には、鹿郎にも本当の事が……」

「判った、もういい」

淡々と言い捨てた鹿郎は、再びひょいと立ち上がった。

踵を返し、階段口目掛けて歩み出す。

「ろ、鹿郎!」

「心配すんなって。樋池達の側には、なるべく近寄らない様にするからさ。あくまで、この旦那さんを探し出して、事情を……」

「待って、鹿郎っ!」

一擲。

おはるの渾身の諸手突きが、鹿郎の膝裏に襲い掛かった。

刹那、大きく泳いだ鹿郎の体は、盛大な騒音と共に、階段を奈落落ちに転げ落ちてゆく。

肉が板撃つ掛け値無しの打撃音と、合間に響く微かな悲鳴に、流石のおはるが硬直した。

ひしゃげて潰れた鹿郎の側に、慌てて駆け下りてゆく。

「ひっ……ろ、鹿郎っ! しっかりして、大丈夫?」

「こ……この、クソ餓鬼や……」

「ごめん、やり過ぎた……鹿郎ってば、いつつもするーって避けちゃっからせ……」

「オレのせいだとしても言う気があつ！」

「ち、違う！ 今のはあたしが悪かつたっ！」

既に濃紺のみを映す、明かり取りの小窓。

目端にそれを見留めたおはるは、僅かな逡巡を振り払い、呻く鹿郎に手を差し伸べた。

「判つたよ、鹿郎」

流石にまだ、混乱しているのだろう。

差し伸べられたおはるの手に、素直にすぎた鹿郎は、面をおはるに振り向けた。

「何がだよ……」

「あなたの読み通り、確かにあたしは、旦那様の行方を知ってる。

あなたの気持も、理解した。でも幾らあなたでも、今更かぎ回った処で、旦那様の行方が判る前に、企み全てが終わっちまうよ？」

「でも……」

「だから代わりに、あたしが知ってるホントの事を、全部話したげる。ちよつと長くなるけど、きつと変に動き回るよりかは、早く助けになるはずさ」

脂汗が浮かぶ鹿郎の眉間に、一筋の迷いが走った。

掴んだ！ ??素早くそれを認めたおはるは、改心の笑みを噛み締めた。

鹿郎とおはるが、土蔵の中で、くたくたく言い合っていた頃。母屋の北にある土間の方でも、ちよつとした騒ぎが持ち上がった。いた。

「鑑定薬が……使えない？」

突然さわに呼び出され、板間に正座した樋池が、片膝を着いて身を乗り出した。

滅多に見られぬ樋池の驚愕だったが、さわにも、それを楽しむ余

裕は無い。

懐膾を通り越し、色を無くした面でうなずいたさわに、樋池はにじりよった。

「ちよつとお待ちください。詳しい事はお話しできませんが、今回用意された鑑定薬は、私共が得た抜け荷の情報に従い、長春先生が自ら調査してくれたものですよ？ それが使えないとは、一体……」

「その 情報 とやらが、どんなものだったかを知りたい処ですが、ひとまずは……」

さわは、傍らに置かれた書き付けの束、硝子の小瓶、二つずつを取り上げる。

言葉を無くしたままの樋池に、先ずは硝子の小瓶一つを渡し、慎重に言い挙げた。

「そちらが、おきんさんの心臓の発作を誘発した薬物……通称 鰐 と呼ばれる薬品です。基本的な作用は阿片等と同じですが、主たる成分は、様々な石粉……それを硫黄や重油のように、地面から湧き出た液体に溶かし、調合して作る鎮静剤の一種です」

「石を、溶かす？」

小瓶を見つめる樋池の眉根に、戸惑いの色が差した。

さわがうなずき、別の小瓶を取り上げた。

「現在主流の中毒性の高い麻薬は、植物由来です。でもその 鰐 の主成分は、石粉や油……長春先生が調合された、この鑑定薬に反応する成分を、含んでいません」

手にした小瓶を、樋池はゆっくり、板間に置いた。

その仕草に、ちりちりと金属の音が混じるのは、きっと羽織の下に身につけた、帷子や手甲のせいだろう。

準備 は、確実に進んでいる??さわは、静かに目を伏せた。

しかしこのままでは、肝心要の部分が抜け落ちたまま、命を懸けた 大舞台 に挑まねばならない。

ぼつりと、樋池が呟いた。

「さわ先生は……何故、ご存知だったのですか？」

「その薬も私も、筑摩ノ国の出だつたからです」

もう一つの書き付けを取り上げたさわは、それをめくり始めた。古びてボロボロになった紙面に、様々な男文字や女文字が、びっしりと書き込められている。

「今現在、天下で初めて 鰐 の調査に成功したのは、筑摩ノ国と なっています。そしてこれは筑摩で医師を勤める兄弟と、交換して いる手紙なのですが……ここに 鰐 の使用についての記述がありました」

開いた紙片を板間に置き、指で指し示す。

「この記述と、私がここでおきんさんに見いだした症状……全て一致しております。これからは、私の推測ですが……きつとおきんさんは、随分と長きに渡つて 鰐 を摂取し続けたものと思われま す。そのせいで、五臓六腑を 鰐 に喰い荒らされ、あのような死 に様を呈した」

突然、樋池が苦笑した。

目を瞬かせるさわに、溜息混じりに言い挙げる。

「結局御一人で、死因を探り当ててしまわれましたね」

「長春先生や、樋池様のご助力のおかげです……」

これは掛け値無しの、本音だった。

あのままおきんを調べ続けても、この書き付けの内容を思い出せ たかどうか。

いや、きつと思ひ出せなかつた。

いつも脳裏に響く兄の言葉が、さわに語りかけてくる。

『お前は医者には向いていない』

患者への愛でなく、知識欲に振り回されて動き、自分絡みの瑣末 時にしか全力を尽くせない。

この時だつて、樋池が強引にこの場に引き込んでくれなければ、 きつと書き付けの事は、思ひ出せなかつたろう。

そしてまた、真実を夢見ながら、日々の業務に紛れて忘れてゆく

……

そんな事でいっばいだった耳朶に、とんでもない声音が響いた。

「判りました、では先生にも、現場に出て頂く」

「へ？」

「ここにはもう、長春先生はいらっしやらない。信用できない鑑定薬を使う訳にはいかない。なれば実際に触れた事のある、さわ先生の経験を信じましょう」

「でも……」

まじめな顔で、樋池は言った。

「御聞きします、さわ先生。鰐の正体と、先生の見立て……これに間違いの可能性は？」

「それはない」

即座に、さわは言い放った。

激し過ぎた体温の低下と、肌に浮かんだ赤緑の斑紋群。

左右の瞳の収縮差は、強い灯りを得ずとも判じられたし、丸坊主に近い頭髮の残り様や、指で圧迫しただけで、脆く抜け崩れた齒爪の様子。

そして真つ黒に壊死した口内。

今もまざまざと、思い返せる。

「私は薬学は、苦手にしています。ですが死因が鰐である事と、長春先生の薬は使えない……その事だけは、確実に判ります」

「では、そのように」

「あ、あの……」

あつさりと認められた事と、降り掛かってくる突然の責任に、さわは慌てて言い淀んだ。

「どうかなさいましたか？」

「いや、その……今までこういう事を話すと、酷く機嫌を損ねてしまわれるのが、普通でしたから……ちよっと、驚いただけで」

樋池は笑った。

「話を聞く限り、さわ先生は、充分やって下さいました。いや、そもそも先生が引き受けて下さらなければ、不安定な鑑定薬に頼った

隙を突かれ、抜けにを企んだ下手人共に、逃げられてしまう可能性があった。これは思いもかけぬ幸運です」

「恐縮、です……」

「さらに、その不安を隠さず、正直に仰って下さった。これ以上は、現段階では望めません」

「ですが……」

「実はですね。シバも、呼んであるのです。今まではシバも気休めと思っただけでしたが、今は、先生の手になるコレがある」

樋池が、鰐の入った小瓶を持ち上げる。

さわの目が、瞬いた。

「シバ……ああ、あの子！ じゃあ……」

樋池が、しつかりとうなずいた。

「だから大丈夫。これで二段の構えが取れました、上出来ですよ」と、突然。

樋池が、クシユンとくしゃみをした。

一髪の間を置いて、二人同時に苦笑する。

「……だ、大丈夫ですか？ 樋池様」

「ええ、大丈夫ですとも。どうせあの馬鹿野郎が、私の悪口を言っているに違いありません。失礼」

懐紙を取り出し、鼻をかむ。

それを袂に戻した樋池は、居住まいを正した。

「では、改めて。さわ先生のご準備は、よろしいですね？」

「……はいっ」

「この後、我らは一旦、姿を消します。暫くした後、塀の外で、多少の騒動がありましよう。ですがここにいれば、さわ先生に危害が及ぶ心配はございません。騒ぎが鎮まり次第、部下がこちらに参ります。怪我人の処置は、先生の御判断に一任致しますが、それ以外は我らの指示に従い、鰐 発見のための検分を、御願致します」

「判りました」

返事をしたさわの声音が、いささか軽くなっていた。

報告しておいて、よかった。

心なしか、頬も暖かい。

樋池は、にこりと微笑んだ。

改めて、板間に両手を差しつけると、深く深く頭を下げる。

「樋池様……？」

「我らの不手際により生じた数々の無礼を顧みず、御協力下さったさわ先生の御志。誠にかたじけなく、申し訳なく……万が一、鰐が出なくば、この仕掛けに関わった私は、生き続けてはおれませぬ。しかしどんな結果になろうとも、私は後悔も御恨みも致しません」

さわの身が、ぎしりと固まる。

俯き加減に頭を上げた樋池は、そのまま颯と立ち上がった。

「我が命。お預け致しますれば……」

密やかに、しかし凜と響く声を残し、入ってきた時と同じ様に、樋池は退出していく。

ぱたりと戸障子の閉まる音で、さわは初めて、己の呼吸が止まっていた事に気がついた。

何故だろう、自滅の二文字が、脳裏でけたたましい哄笑を挙げている。

目眩のせいか、揺れる視界に、硝子の小瓶が迫って映る。

もし、結果が出なかったら。

いや、それならまだしも、やりようをしくじっていたせいで、間違った判断をしてしまったら？

おきさんの、時のように？？急に笑い出したくなって、さわは慌てて立ち上がった。

決して悪意があった訳ではなからうが、何とも余計な一言を、聞いてしまったものである。

ふらふらと、土間の水瓶に寄ったさわは、柄杓に汲んだ冷たい水を、一息に呑み下した。

月白小堀に浮かぶ舟は、何も荷舟ばかりではない。

日のある内は高い舟が主体だが、日が暮れたこの頃には、色々な素性の屋形舟が、川面をゆらゆらと流れくる。

しかし星が一つも無い、湿った夜空を嫌ったのか。

今宵の小堀に、灯火の光は少なげだった。

深く広やかな闇間に、川のせせらぎと虫達の声が、満ち満ちている。

と、突然。

鳴きさざめく虫達の声が、切れ込むように立ち消えた。

闇間をふらりと掻き分けて、白提灯が現れる。

その小さな火影は、それを掲げる者と、背後に控える荷車、人足らしい一群の影を、ぼんやり浮かび上がらせた。

提灯を持つ者は、濃紺の覆面頭巾に同色の単衣。

ともすれば闇に同化しがちだが、その者は左右に提灯を振り動かすと、慎重に歩を進め始めた。

草々と地を踏む音が、やがて木板の軋みに変わる。

どうやらこの近辺は、舟を寄せられるように、できているらしい。せせらぎの真中で、濃紺の人影は、微動だにしなくなった。

しかし、暗い。

降雨の前兆が加わったせいかわ、闇はいつもより水臭く、五体を締めあげるような、重みをもって渦巻いている。

温い風がもつさりと吹き抜け、虫の声音が一つ、凜と響いた時だった。

本流の真ん中から、ゆらりとほぐれた火影の一つが、こちらに身を寄せてきたのだ。

舳先の大きな提灯が、川面に光を投げかけている。

その光の淵に立った人影も、柿渋の覆面頭巾に同色の単衣を付けていた。

が、よく見ると、羽織袴をきちんと身に着け、腰に二本を差ししている。

柿渋の人影が、振り返って何かを叫んだ。

竿をさばいたものだろう、大きく水面を砕く音を立て、屋形船は、切れ込むように減速した。

「白粉を肴に、酔い覚ましか？」

柿渋の影が、声を放った。

「それには些か、酔いが足りのうございます」

濃紺の影が、頭を垂れる。

それを確かめた柿渋の影が、再び背後に何かを叫んだ。

舟の戸障子が開かれ、火の入ったがندوقを携えた六つの影が、新たに姿を現す。

濃紺の影が提灯を掲げると、火影の淵が重なり合い、小振りながらも堅牢な船着き場が、その姿を現した。

吸い付くように、橋場に横付けされた船から、七つの影が跳び移る。

それに守られるように、船縁を小走りに来た初老の船頭が、続いて跳び来、手早く舟を舫った。

濃紺の影が、懐から木札を取り出し、柿渋の影に差し出す。

それを受け取った柿渋の影は、袂から似たような木札を取り出し、二つをぴたりと噛み合わせた。

「……よし。何時もより早いが、荷を渡そう。人足共をこちらに寄せ」

再び、深々と頭を下げた濃紺の影が、踵を返したその時。

「待った！」

突然の烈声が、その場を震わせた。

振り向くと、烈声の主??舫綱を握った船頭が、濃紺の影をねめつけている。

「あんた、ちよいと妙な歩き方するじゃねえか」

濃紺の影は、応えない。

頭巾の奥の片眸が、火影を受けて、川面のように揺らめいている。
「何い？」

柿渋の影の声には応えず、船頭は言い挙げた。

「間違いない。あんたは普段、お腰に二本差していなさるお人だね？
銀洲の青瓢箪どもとは、まるで動きが違いやがる」

刹那。

一歩退った濃紺の影から、呼子の響きが迸った。

闇をつんざく響きに応え、土手の向こう一列に、御用提灯が立ち並ぶ。

川面に映る灯火も一斉、御用の二文字を照らし出した。

「おお……」

「しまった！」

浮き足立った七つの影は、それでも橋場の口に集った。

光を弾く白銀の刃が、無音のまま、真闇の中に翻る。

濃紺の男が、覆面を筆取り取り、まとった単衣を払い落とした。

松明の炎に染め抜かれ、現れたのは、額金、襷に脚絆姿の樋池。

銜えた呼子を噴き落とし、流れるように抜いた十手を、七つの影群に突きつける。

「公儀御用の筋である、神妙にせよっ！」

雷の如き一喝と共に、その背後に控えた人影達も、大八車に隠し積まれた長得物を振りかざした。

鯨波の聲が、橋場の光と闇を押し囲む。

「くそっ！」

「逃がせ！」

船に移った船頭が棹を掴むや、翻った一影が、舳綱を切り払った。舟は荷を乗せたまま、みるみる橋場を離れていく。

「待て！」

踏み込んだ樋池を狙い、二つの影身が距離を詰めた。

川面に揺れる光の滑らかさそのままに、銀刃が奔る。

刹那、鋼と鋼が厳しく噛み合い、樋池の十手に囚われた銀刃が、

よじれるような悲鳴を上げた。

「おおっ……」

「ぬっっ！」

絞るような声と同時に、銀刃が折れ飛ぶ。

一髪の間もなく、逆手のままに抜かれた樋池の脇差しが、同じく脇差しを抜きかけた柿洪の影目掛け、電光の如く突き込まれた。

狙い過たず、心臓を一突き?? 血染めの脇差しを引き抜いた樋池は、大きく面を巡らせた。

そのさらに右の死角から、もう一つの影が迫る。

たったあれだけの接触の内に、この影身は、樋池の弱みを見抜いていた。

覆面の奥の右眼に、火影がほとんど揺れていなかった事。

それはこの影身が推察した通り、樋池の右目が、ほとんど機能していない事を示している。

确实を期すため、もう一步、死角の奥より駆け込みながら、影身は銀刃を構えなおした。

刺突の構えを取って迫る。

と、突然。

雷撃に似た大音声が折り重なり、闇中を跳ねた巨大な肉塊が、影身に手酷くぶち当たった。

真白な牙が、そのまま銀刃を構える下腕に突き刺さる。

その重みと顎の力が、みきりと腕に喰い込んだ。

「うわああああっ！」

思いも寄らぬ、闇中からの奇襲。

突然の激痛に大きく体制を崩し、よろめきながらも、影身は脇差を抜き撃った。

しかし肉塊は、それらをすりと避け、跳ねて地に降り立つと、再び大音声で吠えたてる。

「トサ！」

樋池が叫んだ。

松明の強い光が届き、子牛程もあるうかと思える巨大な犬を照らし出す。

それは太やかな四肢に力を漲らせ、主の右の死角を補うように、牙を剥き、唸り声を上げていた。

「お、おのれっ……」

影身が叫んだ。

折れかけた腕に握った大刀を、僅かの躊躇もなく捨てると、無事な腕を使い、脇差を構えなおす。

そこに樋池の十手が、猛然と襲いかかった。

闇に火花が跳ね散って、鋼同士がギリギリと競り合う。

犬の吠声を背に、齒を喰い縛った樋池から、切れ切れの問いが漏れた。

「私に討たれて、野たれ死ぬか……それとも武士として、腹を斬るか！」

「片腹痛し！」

渾身の一手。

十手ごと樋池をいなした影身が、泳ぐと見えたその横腹を、真っ直ぐに突く。

しかし、それをすくい上げるよう、樋池の片足が跳ね上がった。

今時の組み討ちでは、ほぼ見られなくなった、対象真下からの蹴撃。

骨折の乾いた音が、闇に響いた。

腕を蹴り碎いた勢いを得て、弧を描いた樋池の脇差が、揺らいだ影身を袈裟がけに斬り降ろす。

血の飛沫く乾いた音と共に、影身がどうと倒れ込んだ。

トサが一息に、樋池の傍に駆け寄る。

片膝をついた樋池は、腕を伸ばし、その首を掻き抱いた。

「よしよし……よくやってくれたな。ありがとう」

ふんふんと鼻を鳴らし、犬は、樋池のなすがままになっている。

返り血の臭いよりも何よりも、主の無事が、嬉しいのかもしれない

い。

ちぎれそうなほどに尻尾を振るトサの、首に面を埋めたのも僅か、樋池は素早く立ち上がった。

小堀に立ち籠めていた重闇は、大量の怒声と光に押し込まれ、今や彼方へと追いやられている。

その最中、川面の方では、巧く橋場を離れた舟が、待ち受けていた御用舟に囲まれていた。

何とか追手をまこうと、船頭は、巧みに竿を差し回す。

沸き立つような水音を従え、するすると動いた船が、行く手を塞ぐ御用舟にぶち当たった。

派手な水飛沫を上げて、御用舟がひっくり返る。

「あつ……」

思わず、樋池は声を上げた。

しかしその一撃で、船は大きく速度を落とし、残った御用舟が舳先を揃え、逃がさじとばかりに並び寄った。

進路を塞がれ、次第に行き場を無くす舟に、捕方達が幾重にも飛び移る。

よし！　？と、内心で喝采を叫んだ刹那。

今度は左手側から、激しい悲鳴が折り重なって響き渡った。

駆け寄ると、橋場の入り口から逃げた五影が円陣を組み、捕方達を牽制している。

その足下には、強引に迫ろうとしたのだろう、三人の捕方が、倒れ伏して動かない。

地を蹴った樋池が、囲みを掻きわけ、五影の前に進み出ると、五影は再び動き出した。

攻めあぐねた捕方達が、すぐるように樋池を見る。

「ひ、樋池様……かなりの手練です！」

「樋池様！」

いつの間にか、右に控えたトサが、敵を理解して唸り声をあげる。樋池が、叫んだ。

「捕り縄！」

その一喝に、すかさず尾を引いて跳びくる捕り縄の雨を、五影が次々と斬り払う。

空いた脇を狙い、突棒を突き入れた捕方は、柄の中頃を切り割られ、手繰られた拳句、袈裟懸けに斬り払われた。

「お、おのれっ、小癩な……」

「に、逃がすな！」

囲む捕方達の声に、明らかな怯えが混じり始める。

樋池は僅かに瞑目すると、捕方達を一喝した。

「退けっ！ 囲みを解け！」

「なっ……」

「樋池様！ 一体……」

「命のいらぬ者のみ、相手をしてやるがいい」

一際大きな一影が、ぐつぐつ笑って言い放つ。

「……犬の拳句に、腰抜けか」

捕方達が色めき立ったが、樋池は、苦笑を浮かべただけだった。

「そこにいるのがお前だけなら、何とか頑張ってみるのですがね」

一歩踏み出した大きな一影を、別の影が止めた。

影の憤怒と樋池の苦笑が、闇中に火花を散らす。

周囲を囲む捕方達が、すぎるように樋池を見やる。

「樋池様……」

「怪我人を收容しろ。必ず、構うな！」

ついに、囲みが解けた。

目顔で合図を送り合った五影は、そこから闇間に溶け込んでいく。

樋池の左に控えたトサが、猛然と吠えた。

後を追おうと、その恐れ知らずの一步を踏み出した刹那。

「トサ！」

樋池の叱声と伸ばした指が、骨をも砕く牙を剥きだし、猛る大型犬を差す。

途端に、トサは樋池の右に舞い戻った。

樋池は改めて地に膝を付き、トサの頭を力を込めて撫でさすり、五影が消えた闇を指さす。

樋池がその眼を覗き込むと、トサの眼は、火影を弾いて煌めいていた。

「……よし、行けっ！」

わふっ、と低く応えたトサが、発止と闇に飛び込んだ。

茫然と事態を見ていた若い捕方が、ぽつりと呟く。

「凄い……本当に、『犬同心』だったんだ……」

慄然とした周囲が、一髪の間もおかず、若い捕方をぼこぼこ殴り出した。

苦笑した樋池が立ち上がると、伝令役の捕方が、息を切らせて駆けつける。

「樋池様！」

「どうした！」

「舟の完全拿捕に成功しました！ 船頭は、自ら川に飛び込み行方知れず、只今、搜索をしております」

「船頭の方は、放っておけ。船荷はどうした」

「はっ、甚五郎がシバを使い、片端から改めております」

「よし」

「私達も、船荷の改めに合流する。ご苦労だが、皆、もう少し頑張ってくれ。怪我人は、母屋の方に。さわ先生の応急処置が終わったら、籠を呼んで、長春先生の医庵に運び込むといい。あ、まだ殴っている奴。もう、その辺で勘弁しといてやれよ。『犬同心』、大変結構。私は少しも気にしてはいない」

「はい、最後は肩です」

「何だ？ そんなトコまで打ちつけてたのか」

灯火の焦れる音と匂い。

そしておはるが持ち出してきた、打ち身に良く効く膏薬とやらの冷たい香が、風端にふらりと揺れる。

おはるの仕業で、階段を転げ落ちた鹿郎は、再び土蔵の三階、座敷牢跡にいた。

幸い、頭は完璧に守れたし、骨の方にも異常は無い。

とっておき と言っただけあつて、膏薬も、打ち身の熱を確実に吸ってゆく。

貼られた膏薬を、指で突っいている鹿郎を、おはるは横目にちらり見た。

ずっと以前の話だが、同じ階段を使い、倉に荷を運び込んでいた人足が、足を踏み外して転げ落ちた事がある。

まあ、体重や荷物の有無といった条件が違っていたとはいえ、その人足は、肋と脛の骨を折る、大怪我を負ったものだ。

なのに目の前のこの男は、酷い打ち身と痣だけ。体幹の方など、尻に一つ、痣を作っただけで済ましている。

おはるは、溜息と共に、呆れた様に呟いた。

「……まあ、私が言うのもなんだけど。随分と頑丈な男よねえ、あんたって」

「おうともよ。人の背後で気配を消して、突然首根つこドヤす奴や、騙し討ちで階段から突き落としてくれるような奴が、お友達にいるからな」

「だから悪かったつてば。とっておきのお薬出したんだから、勘弁してよ……はい、貼りまーす」

「ふん……んおおっ、冷てえー……」

仕上げに布で巻いて、膏薬を固定する。

おはるが、晴れやかに言い挙げた。

「はいっ、おしまい！ 具合はいかが？」

「おう、中々いいぜ。ま、コレはコレで、よしとしてやろっ」

「やあね、偉そうにつ」

手足を動かさし、具合を確かめる鹿郎を見て、おはるは安堵混じり

の声を投げた。

そのまま手早く、薬袋や油紙を片付けてゆく。

あまり期待はしていなかったが、思ったよりもすっかりした手当に、鹿郎は、満足の息を吐いた。

「で、もう一つ……邦介さんの話だが」

刹那、陶器の打ち合う鋭い音が、宙を奔る。

面倒くさそうなおはるの声音が、探る様に応えた。

「何よ、まだ何か隠してると思われてるわけ？　今まで話したので全部だつてば。これ以外は何も知らないし、聞いてもいないよ？」

「確かにつじつまは合ってるっぽいがああ、何かあんまり無茶苦茶過ぎて、現実味が無いんだよなあ」

「あんたみたいに非常識な見えずががいる事に比べりゃ、随分現実的だと思っけど？」

「オレの事あ、どーだつていい！」

「ま、確かにまだ、あたし達の知らない事が、どっかに隠れてるかもしれないさ。でもあたしだつて、所詮は銀洲の奉公人。本来ならば、六日前に御店の外に追い出されてた立場にいたんだよ？　便宜上、最後に残っただけなんだから、そんなあたしに樋池様が、何もかもを正直に話したつて考えるのは、ちよつと無理があるんじゃない？」

「むむむ……」

「とにかく、旦那様の事に関しては、今まで話した事が全てだね。御店の恥をこつという風に漏らすのは、本当は商人として、失格なんだけどさ……」

ふん、と一つ鼻を鳴らし、鹿郎は、畳に大きく寝転んだ。

芝居の筋書き屋が好む話で、そういうのがあると聞いた事はある。しかしまさか現実に、しかも体験する羽目になるとは、夢にも思っっていなかった。

「銀洲乗っ取り、か……」

「そつという言い方は……」

と言いかけ、おはるはむつつと、口をつぐむ。

「な、何だよ？」

「……………」

「……………納得して、いないのか？」

「当然よ」

「当然つて……………お前今、オレにそう話したじゃないか」

「あたしが言ったのは、旦那様が権利書を持って、失踪しちゃったつてだけよ」

「でもその権利書、流されちゃってたんだろ？ 奥方さんがまともだったら、取り戻せる様になつてたとか、流した金が、奥方さんの治療に使われていた形跡とか……………そんなのが、あつたのか？」

明かりに誘われてきたものか、羽音がぶうん、と横切つていく。

鹿郎は、首を傾げた。

「……………ないんだな？」

「ないとまさ」

「じゃあ、なんで……………その辺の木っ端役人の調べならともかく、旦那さんが御店の権利書と一緒に、どこか行つちまつた事は、樋池が指揮して調べた結果なんだろう？」

「けどやつぱり、旦那様じゃないよ。死んだ仏さんを悪く言うのは何だけど、きつと奥様が、何か企んでいて……………」

「でもよ、その頃には、おきんさんは……………」

「何か仕掛けがあつたのよ。奥様が、旦那さんに罪を被せるため、とかさ……………その前に、自分が死んじゃつただけで」

もそもそと、おはるが呟く。

鹿郎は起き上がった。

「おいおい、お前らしくないなあ。言つてて自分で、おかしいなあつて感じないか？」

「やけに奥様の肩をもつじゃない」

「そうきやがったか」

子供のくせに、こつという所は、もう女だ。

と、鹿郎は、ふと思いついた。

脳裏に、邦介の記憶を探す。

おはるだけではない、皆がなんとは無しにかばい立てしている、この邦介という男。

六尺余もある身ノ丈を持つ偉丈夫で、日に焼けた浅黒い頬には爽やかな笑顔、大らかで気持ち優しく??しかしその記憶は、全て誰かの又聞きで、己で得たモノがない。

鹿郎は首を傾げた。

思えば、不思議な事だった。

立场上、直接口をきく事は少なかったが、それでも何度か、声を交わした事がある。

なのに声音も匂いも、何も浮かび上がってこない。

そもそも、この邦介という人物。

おきんの後見として、名を知られた頃から、全く謎の人物だった。印象を辿ってみると、何故か人の噂ばかりがその影を彩って、芯の部分が判らない。

まるで美辞麗句を書き込めた半紙を貼り固めた、人形。

その芯は、どんなものだったんだろう。

おはるが薬を片付ける、その響きが聞こえる。

鹿郎はふと、おはるが語った『邦介が与える健康薬』の声音を思い出した。

おきんの死因は、『特定薬物を長期に渡って摂取していた』事。

そんな人間が、御店の権利書と共に失踪した。

鹿郎の背が、ツと伸びた。

人の心の際に付け込み、そいつの大事なものを篡奪するのはよくある筋立てだ。

しかし、そのつけ込む手段に毒を用い、生かさず殺さず長らえさせた拳句、己に危機が迫れば、弱った体に残されたものを身ぐるみ剥ぎ取り、残りは始末も付けずに逃げる。

そんな無茶をしてのけた男が、この少女だけでない、この御店に

勤めた全ての者の心に、深く根ざして惑わせている。

日に焼けた浅黒い頬に、爽やかな笑顔を満たして。

鹿郎は、激しく頭を振り払った。

よじれるような悪寒に憑かれ、ふらりと立ち上がった、その刹那、開け放った大窓の向こう、闇をつんざき飛び込んできた呼子の音が、鹿郎の耳を突き刺した。

思わず、耳を押さえて倒れ込む。

耳腔に鉄針を突っ込まれた様な衝撃に、鹿郎はそのまま、畳の上でのたうった。

「っ……！っ……！」

何も、聞こえない。

えずき、よじれ、頭を何度も振り払いつつ、窓辺とおぼしき方向かい、鹿郎は必死に這いずった。

「……ろくろ……くろろっ……！」

遠く微かに、おはるの音が滲み始める。

おはるに助けられ、窓辺にすがって身を起こした頃、やっと周りが判り始めた。

「おい……！」

「何さ」

「おいっ……！」

「何よっ？」

「今のは……呼子か？」

「そうよ。他の何だっていうのよ」

窓辺からずり落ちる鹿郎を尻目に、おはるは身を乗り出した。

眼下に広がる、底無しにくすみきった闇の中、無数の光群が沸き上がり、尾を引き、入り乱れている。

「ごとと鳴った風と共に、鋼の打ち合う音が響き、男達の怒声と悲鳴が爆ぜ飛んだ。

「うわ、綺麗ー！」

「お前……何で、捕物は直ぐに始まるって、言わなかった？」

「だって、聞かれなかつたもん」

「わざと黙ってたな？」

「だってさあ。下手に話して、気に喰わない事があつたら、鹿郎は直ぐにでもすつとんでつて、樋池様に文句を言うてしょ？」

足下で呻く鹿郎に、おはるが応えた瞬間。

光を写した川面が乱れ、ごつりと木々の打ち合う音が響き渡つた。

一瞬の悲鳴を、派手な水音が呑み込んでいく。

おはるは力任せに、鹿郎の襟首を掴み締め、窓枠に引きずり上げた。

「鹿郎鹿郎つ、伸びてる場合じゃないつて！ ほらつ、舟がひっくり返された！」

「いでで……判つた、判つたから、引つ張るな！」

頭に触れかけたおはるの手を打ち払い、鹿郎は再び、窓辺にすがつた。

耳は大分元通りになりつつあるが、下から突き上げ、沸き上がってくる声は、混沌の具合を増している。

「近いな、随分……塀のすぐ向こう側辺りか」

「あれっ？」

「どうした？」

「ち、ちよつと待つて、暗くてよく見えない……ややや？」

「ええい、勿体付けるな、早く言えっ！」

「勿体じゃなくて、あ……光が、光が分かれた！ 小さな光が五つ、緑青林へ……」

鹿郎には判らぬ事だが、おはるの目には、光群をじりじりと離れた光五つが、緑青林に飛び込んでいくのが、はっきりと見えた。

木々の茂りの影間毎に、光がちらちらと揺れていく。

おはるの声音が、脳裏の『邦介が与える健康薬』を思い出させ、鹿郎は、舌打ちした。

「樋池の奴、囲みを抜かれたのか……」

「あれれっ？ 追いかけない！」

「何い？」

鹿郎が、怒鳴る。

しかし、おはるは冷静だった。

「きつと樋池様の作戦だよ。御用提灯が囲みを解いて……橋場の方に向かつてる」

「何でそんな事を……」

「多分、舟の方を確実に押さえないんじゃないかな。抜け荷の品さえ押さえられればって、樋池様、何度も言っていたもの」

「だからって、逃げる奴らを切り捨ててどうする！　もし逃げた奴らが、抜け荷を持って逃げていたら……」

「うーん、どうだろう……抜け荷の品によると思うけど」

「そこを聞かなきゃ、意味ないだろう。使えないなあ」

「あのねえ、鹿郎。能力はともかく、私はこ・ど・も。一体何処まで求める気？」

「都合のいい時だけ、餓鬼面すんじゃないよっ！」

むくれたおはるを、軽くないなした鹿郎は、窓枠に手をかけた。

もし、樋池達の言う抜け荷の中身が薬品の類いなら、荷物に紛れさせなくたって、充分持ち運べる。

窓枠を掴んだ鹿郎は、精一杯、その上半身を乗り出した。

鹿郎には判らぬ事だが、その足下では、織り乱れた光群が、川岸の方に集結しつつある。

と、突然。

鹿郎の唇から、鹿鳴が響き渡った。

重厚な夜気に駆け踊った音は、あつと言つ間に剣戟の響きに紛れ、怒声と喧噪の合間にもみ消されたように聞こえる。

が、鹿郎の頬に浮かんだ笑みに、傍らのおはるは胃ノ腑の辺りを、ぎゅつと掴まれたような気がした。

「ろ、鹿郎っ？」

「他に散った光は無いな？」

「うん……けど、何する気？」

「別に。自分の務めを果たすだけさ」

「まさか……」

尋ねた言葉に応えるよう、にやりと笑った鹿郎は、小さなおはるを見下ろした。

「何時も何度も言ってるじゃねーか。オレの役目は、養生院のつなぎを取って回る事だけじゃない。貴重で優秀な養生院の人材を、荒事から守って遠ざける事も、任されているって。この捕物が失敗したら、参加しちまったさわにまで、咎が及びかねん。それだけは、避けたいからな」

おはるは、窓の外を見やった。

緑青林の五つの光群は、忙しく輝滅を繰り返しながら、遠く小さくなっていく。

一方、川面の一点に集った光は、ゆっくりと、しかし確実に、橋場の方に寄っていた。

やがて川岸の形に輝く光群に抱き込まれ、一つに溶けて混ざり合う。

聞こえてくる怒声からは、既に怒気が失せかけていた。

きつと舟を押さえる事に、成功したに違いない。

おはるは、宙に面を彷徨わせている鹿郎を見上げた。

「でも、もう遅いよ？ どうやら舟は拿捕されちゃったみたいだし、いくらあんたの足が早くても、ここから林に行き着く頃には、きつと皆、逃げきってるさ」

「試してみるか？」

「へ？」

「もし今から、あの緑青林の五つの光に追いつけたら……お前、どうする？」

「どうするって、あり得ないよ」

即座に否定したが、おはるの胃ノ腑は、再びぎゅっと縮み上がった。

突き動かされて、おはるは鹿郎の袖に手を伸べる。

と、鹿郎の爪先が、畳をひよいと蹴りつけた。

乾いた響きと共に、鹿郎の身は、窓枠に乗り立っている。

一揺れした五体が、キリキリとたわんだ。

「鹿郎……？」

「判ってるだろうが……くれぐれも、真似をするなよ？」

その気安さが、おはるの制止を突き放した。

爪先が、窓枠を蹴る。

「ひっ……」

おはるの小さな悲鳴と共に、鹿郎は、三階の大窓から跳ねた。

光群渦巻く闇中に、鳶茶の背中がすうと小さくなってゆく。

と、その体躯が、宙にかくんと静止した。

「う……ろく、ろ……??？」

偶然に横切った大きな光が、鹿郎の足下の、白壁の塀の姿を浮かび上がらせる。

その突端に立ち上がった鹿郎は、こちらに向かって手を振った。

「緑青林の辺りなら、お前だって、よく知った場所だろう。来たけ

りや用心して来いよ、明かりと階段を使って……ゆっくりとな！」

膝から力が失せ果てて、おはるは窓枠にしがみついた。

鹿鳴一閃、再び跳ねた鹿郎の姿が、今度こそ、重闇の中に消えてゆく。

「た、大変だ……」

窓枠から離れたおはるは、直ちに階段の方に向かった。

が、暗くて段が見えない。

慌てて取って返したおはるは、一つ大きく息を吐き、燭台を取り上げた。

火影を大事に守りながら、急いで階段を駆け下りていく。

闇牡鹿、跳ねる！後編

母屋の北は、ちょっとした野戦病院と化していた。

最も、設備の無い商家での事、血止めと気付け以外に、何ができるというものでもない。

それでもさわがいるという事で、比較的速やかに、処置は完了しつつあった。

折れた腕に添え木をあてながら、さわは周囲を見渡す。

「怪我人は、これだけで？」

「はいっ」

樋池の部下の一人・大石が、緊張した面持ちで、さわに元気な応えを投げた。

「随分と、少ない気がします……」

「相手が手練でした。相手をしてしまったものは……」

言いかけて、ちらりと扉の方を見る。

板間の奥で、溺れた若い捕方が、仲間に支えられながら、水を吐いていた。

その様子を見て頷いたさわは、土間に颯と降り立つ。

引き戸を開けると、筵が四つ、地面に並べられていた。

「四人も……」

「いえ、四人で済みました。もし樋池様が、困みを解く指示を出さなかつたら、今頃は何人、ああなつていた事か……」

歯を喰い縛った大石が、声を詰まらせた。

僅かに瞑目したさわは、そのまま表に歩み出た。

風が渦を巻いて、篝火に舞う火の粉を散らす。

足を折って呻く捕り方が、戸板に乗せられ、運び出された。

それを静かに見守るさわの脳裏に、兄達の、あの言葉が蘇った。

『お前は医師に向かぬ』

『口の軽さや嘘の吐けない性格もあるが、何よりも、苦しむ者に対

する愛が薄い』

『苦しみに共に寄り添い、共に乗り越えようとする気概が、お前には足りない』

その言葉に、さわは怒りよりも、同意の安堵を感じていた。

慈愛に満ちた、それ故の、厳しい指摘だったせいもある。

しかしその愛が、気概が、医師の原動力たらしめるなら、確かに私は、医師には向かないのだろうと納得した、その事を覚えている。しかし同時に、姉達の言った事が、今のさわの在り様を決めた。

『でもその性格、きつと、学術に向いているわ』

以後、さわは医術よりも医学に、気を向ける様になっていった。たればこそ、今回の誤診が許せない。

真実を見抜けず、間抜けに踊った己の未熟が呪わしい。

その一念を雪ぐために、樋池の話に乗ったのだ。が、しかし。

「先生っ」

ふと呼び掛けられて、さわは背後を振り向いた。

溺れて水を大量に飲み、また吐き出して、へろへろになった捕方が、仲間に担がれ、母屋を出ていた。

その相方が、さわに声をかけ、しっかりと頭を下げる。

「先生のお陰で、こいつの命が助かりました。かたじけない」

「直ぐに、動ける様にはなるでしょう。しかし、油断は禁物。二、

三日は絶対に、安静にしていなないと駄目です……暫くしてから、死んだ例もある」

相方の眼差しが、驚愕に瞬いた。

恐らく 死んだ という言葉に、反応したのだろう。

言い過ぎた?? さわの美眉に、焦りが奔った刹那。

大きくうなずいた相方が、もう一度深々と、頭を下げた。

「判り申した、こやつにもしつかりと言い聞かせ、拙者も肝に銘じましょう。誠にかたじけのうございました」

「え、ええ……早く、休ませてあげて下さい」

背中であぐらをかき捕方を、叱咤激励しながら、表戸に向かう。安堵の息を吐きながら、さわは、捕り方達の背中を見送った。かたじけない、か。

ほんの少し、その場の苦痛を減じたただけなのに。ほんのりと心に灯った温かさは、しかし同時に、焦燥も掻き立てる。

さわは闇に向かって、苛々と叫んだ。

「抜け荷は、どうなってるんです？ まだ、発見できないのですか！」

と、突然。

闇の中から、犬が吠え応えた。

振り向くと、小さな犬?? シバを従え、甚五郎がこちらに歩み寄っていた。

「親分！」

「さわ先生っ……………」

「抜け荷は？」

「そ、それが……………」

甚五郎が、うつむく。

さわは、ぎくりと固まった。

「ひよっとして……………」

「面目ねえ。舟荷の全てを確かめたのですが……………」

その場にいた捕方達が、ざわめいた。

「荷が……………ない？」

「そんな、嘘の情報だったのか？」

違う?? さわは一人、首を左右に打ち振った。

おきんのあの死に様に、 鰐 中毒以外の要因は無い。

そしてああもなってしまうには、かなりの量の、想像を絶する量の 鰐 が、必要なのだ。

ふとシバに目をやると、そのざわめきを感じてか、しよげて俯いている?? ように見える。

さわはシバに近づくと、しゃがみ込んで呟いた。

「ねえ、シバ……本当に、舟の中に、鰐は無かったのかい？」
ぷし、と一つ鼻を鳴らし、シバは小首を傾げる。

事前に 鰐 の匂いを覚えたシバが、不覚を取ったとも思えない。
さわは、立ち上がった。

「……樋池様は？」

「はっ……」

「樋池様は、どこに？」

「は、じ、実は、残党を追っているトサを追い、緑青林へ……」

「ひ、一人で？」

「我らも御供しようとしたのですが、夜の林に慣れない我らは、返って危険だからと……この後、充分火を用意して、林の探索に参る予定でした」

と、突然。

捕方の一人が、青くなつて言い挙げた。

「そ、そういうえば……ここのおはるといふ少女が、養生院の雑用係が、林の光を追って行ったと……」

「何ですって！ 何故もつと早く……」

「何を仰いますか！ 樋池様に報告こそすれ、町医者たるさわ先生の御耳に入れる事ではありませんっ！」

「っと、そ、そうでした」

身をすくませたが、一つ咳払ったさわは、改めて宣言した。

「と、とにかく、樋池様を追います。鰐 はきつと、奴等が持つて逃げたのでしよう」

「しかしどうやって……林は真つ暗で、先生が一人でうるつける状態ではございません」

さわのためらいの呻きよりも早く、甚五郎が、二人の前に進み出る。

「あっしらに、御任せくだせえ」

「甚五郎？」

「大石様、樋池様の手回り品……羽織か何か、御借りできませんでしょうか」

「そ、そうか……急げ、樋池様の羽織と……松明を持ってこい！」
「はっ！」

大石の号令に、傍らにいた数人の捕り方が、一髪の間にかけて去った。

目を瞬かせたさわを挟んで、会話が飛び交う。

「甚五郎、林に疎い我らが同行すれば、遅れは免れまい。先行して樋池様を追え。手数はいるか？」

「いえ、返つてシバが迷いましょう。あつしとシバ、さわ先生の三人で。あつしの手下に、後を固めさせやす」

「よし、無茶はするな。我らは火を沢山用意して、少しずつ、お前達の後を追おう」

「あ、そ、そうか……」

シバの鼻なら、闇を気にせず、樋池の後を追えるだろう。

しかし幾ら狭いとはいえ、月星の光も無い夜の緑青林に、踏み込まねばならない？

緑青林に眼差しを送ると、夜の闇のせい、林が大きく見えてくる。

ざわざわと鳴り響く葉擦れの響きに、背筋がぞくりと粟が立った。と同時に、亡骸が、目端に映る。

覆い被さるような巨大な闇から目をもぎ離し、横たわる亡骸に目を向ける。

ここで退く事もできる。

しかし大きく息を吸い込みながら、さわは首を横に打ち振った。
あの四つの死には、意味があったのだ。

この裏葉柳を、麻薬の汚染から守るといふ重大な意味が。
それを見つけねばならない。

私が見つけてやらねば、その意味は誰にも気づかれず、あの闇に吞まれて忘却されてしまっただろう。

そんな悲しい事が、まかり通っていいはずがない。
つま先を、何かにそとつつかれた。

見下ろすと、さわのつま先に、肉球を置いたをシバの眼差しがあった。

しゃがみ込み、その頭を撫でつつ、独りごちる。

「大丈夫、だよね……皆が、ついててくれるんだから……」
胸を張って、シバはひゃん、と吠え応えた。

圧倒的な闇中に、草木が鳴りさざめく。

陽射しの下では貧相なだけの緑青林も、闇夜となれば、話はまた別だった。

銀洲の裏手で、捕縛の囲みを突破した五影は、緑青林の真つただ中を、北へ北へと急いでいる。

しかし、その歩みは遅い。

五影はそれぞれ、がندوقを持っていたが、年増顔負けに絡み、のしかかってくる闇は、その光すらも吸い尽くさんと、重くしつこく付きまとう。

突然、何かの悲鳴が爆ぜた。

叩き付けるような羽音が、五影の頭上をかすめゆく。

と、一つの影の足が止まり、えずきざまにしゃがみ込んだ。

「小野！」

残り四影の足が止まり、二つの影が、がندوقをかざして駆け寄る。

小野と呼ばれた影は、覆面をむしり取った。

まだ幼げな面立ちは、汗にまみれて震えていたが、瞳には、充分な気力が満ちている。

「大丈夫です、まだ……まだ、平気です」

額を拭い、小野は呟く。

幸い少し拓けた場所だったから、そこで二影が小野を診る間に、残る二影が立ち上がり、今来たばかりの道に、がんどつを差し向けた。

確かだが貧弱な光は、重闇に喰われてしまい、数手先しか見渡せない。

しかし追ってくるような光も音も、見えないし、聞こえなかった。先に立った二影の一方が、面を周囲に巡らせる。

「追ってこない、か」

隣の一際大きな一影が、嘲りを隠そうともせず呟いた。

「あの同心め、かなりやると見たのだが」

「とんだ腰抜けだったな」

目顔を合わせ、二つの影がくく、と笑う。

その合間に、小野を診ていた一際小柄な一影は、傍らの影をちらりと見やった。

「……久慈、残りは？」

しわがれた、しかし妙に高い声音に、筒袋を背負った一影??久慈が応えた。

「拙者、松田、中沢、小野、そして……」

目顔で指され、小柄な影は頷いた。

「五人、残ったか。笠原は……」

「あの東犬めに、討たれました。筑摩武士の恥さらしめ」

大きな影の応えを聞き、久慈が囁いた。

「秋津様。これから如何しましょう？」

鉄紺の覆面頭巾を取り払いつつ、秋津は奥歯を噛み締める。

闇の彼方で風鳴りが響き、波のように地面を奔る温い風が、秋津の短軀に絡み付く。

殿よりこのお役目を賜った瞬間から、このような展開も、常に考えには入っていた。

しかしまさか、蝶華の贅のみにしか生きられぬと侮っていた東武士に、討ち取られる者まで出るとは！

『なんの、それは裏葉柳の事だけではございますまい。筑摩ノ国とて、人々が豊かになれば、いずれこうなつて参りましょう』??

これでは、相手を笑えぬわえ。

突然、脳裏に響いた言葉を振り払つた秋津は、肩で息する小野を見やると、とみに優しく語りかけた。

「歩けるか？」

「は……」

「苦しかろうが、今は何をおいても、御留守居役とつなぎを取らねばならぬ。色々と探られる前に、殺られた笠原の骸を回収せねばならぬでな……歩けないなら、松田に背負つて」

「いや、もう大丈夫です」

しゃがみ込んでいた小野は、勢いよく立ち上がった。

黙つて見ている久慈を見やり、同じ返事を繰り返す。

「かたじけない……もう大丈夫です、急ぎましょう」

立ち上がり、その腰を叩いた秋津は、穏やかに言い挙げた。

「何、走るには及ぶまいよ。あの東犬め、今頃舟を押さえて大威張りだろうしなあ」

先に立つた二影の間から、再び笑いが漏れる。

静かに立つた久慈だけが、冷たい声で言い挙げた。

「しかし秋津さん、あの者は……」

「このような時に備えての、殿の深慮よ。それにこの闇路、全ては我らに味方しておる……松田、道は？」

秋津の問いに、大きな影が首を傾げる。

「もう少し北に行けば、街道沿いの原っぱに出られよう」

「宜しい。では、早足で行こう」

それだけ言い挙げた秋津は、がんどうを構え直した。

松田の隣に立つ影??中沢が、初めて小野に歩み寄る。

「全く、この程度でこの様か。殿が聞いたら、呆れられるぞ？」

小野がむつと息を呑み、言い返そうと、口を開いた時だった。

つんざくような鹿鳴が、何処か遠くで鳴り響いた。

「今のは……鹿鳴？」

「警戒の鳴き声……野鹿かと」

小野が目を剥き、中沢を見た。

「の、野鹿？ こんな小さな林に？」

「銀鼠山の方から、迷い降りてきたのかもな」

中沢の応えを擁するようになり、二度目の鹿鳴が響く。

と、闇に面を巡らせていた久慈が、突然背中に手をやった。

流れる手つきで、筒袋の口を解く。

「久慈さん？」

「近づいてくる」

瞬時に草を踏み締め、五影は背を中に、円陣を組んだ。

三度目の鹿鳴が、耳を圧して鳴り響く。

間違いない。

五影の心音が、一息に早まる。

しんと静まる闇中に、己の胸の鼓動だけが、ずしん、ずしんと聞

こえていた。

それに絡み、迫ってくるモノ。

それは風が木々を揺らす音が、何モノかの『足音』か？？と、突

然。

何処か暢気な男の音が、闇の奥から響いてきた。

「先行く方々。道はここで、合ってるのかい？」

秋津の短軀を、衝撃が突ん抜ける。

反射的にかんどうを投げ捨て、腰の大刀を抜き放った。

「秋津さん？」

突然の二刀。

手加減無し of 体制に、慌てた中沢の声が奔る。

灯火を弾く銀刃の光が見えないものか、遠くに野鳥の悲鳴を従え、

声はのんびりとたゆたった。

「何処に行く気かは知らないが、山に用が無いのは確かだろう？」

一間手前の獣道を左に曲がらないと、ここから先は、銀鼠山に一直

線だぜ？」

油脂に曇り抜いた切っ先達が、片手に持ったがんどうの光に揺れ動く。

「何者か！ 姿を現せ！」

松田の一喝に応えるように、どっと地を打つ音が響いた。

「むー！」

中沢が、がんどうを振り向ける。

闇を穿つ火影の中に、先程から注意していたはずの、今きたばかりの道を塞ぎ、影塊一つが、じつとつづくまっていた。

容赦ない闇に、面体は判別できぬ。

頭部を巻き締めているらしい、鳶茶色の薄布だけが、辛うじて識別できた。

「い、いつの間に……」

「暗がりを急ぎ過ぎて、道を間違えなすったね？」

鳶茶の影身の声に、薄笑いが混じっていた。

松田が、ずいと進み出る。

「何者だ？」

「只のしがない使いつ走りさ」

「あの東犬の、てし……」

「やめてくれ。知り合いだけど、手下扱いは不愉快だ」

断固とねじ伏せられた問いに、刹那、場が鼻白む。

それに気付いたのか、鳶茶の影身は、小さく咳払った。

「失礼。オレは誰の手下でもないよ。だから本当は、お前さん達がどうなるかと、知った事じゃない。でも今回は、ちょっと事情があつてね……こちらの都合で恐縮なんだが、大人しく、縛についてくれないかい？」

突然、がんどうを捨てた中沢と松田が、鳶茶の影身目掛けて馳せた。

影身の体躯がツツと沈み、鈍い打音二つと共に、二刃の合間を跳ね抜ける。

「うおおっ！」

「がはっ！」

顔と喉を押さえ、松田と中沢が怯んだ。

そのまま、草を踏み抜く音も鋭く、鳶茶の影身の踵が返る。

がんどうを投げ捨て、一手遅れて襲い掛かった小野の、突き一閃。それを髪一筋に躲した影身は、その勢いを借りたまま、裸足の踵を空いた胴に叩き込んだ。

「ぐほっ！」

自身の突進の力が加わり、小野の体が、もんどりうって飛ばされる。

二刀を大きく構えたまま、秋津が影身の前に進み出た。

「秋津さん！」

「わしが止める。久慈、後は頼むぞえ」

秋津の声が響くと同時に、影身が激しく振り返った。

下段八字に構えた秋津を前に、首を傾げているようにも見える。

「あんた……」

「また会えたのう……鹿郎」

「ぐお、のれええっ！」

地鳴りのような怒声が、その場の全てを激震させた。

喉を押さえつづくまる中沢の傍らで、怒りに我を忘れた松田が、覆面をむしり取る。

その鼻からは、大量の血が迸っていた。

「松田つ、止め、退け！」

「うおおおおっ！」

久慈の制止が聞こえなかったか、松田は刀を大上段に振りかぶった。

鳶茶の影身が、するりと動く。

それを牽制するように、秋津が一步を踏み出した。

「下郎おっ！」

この闇中に、秋津の一步が判ったものか。

動きを止めた鳶茶の影身目掛け、松田が大地を蹴った。その一閃を難なく躲し、影身は横ざまに跳ね飛ぶ。刹那。

弦が弓弦を擦る響きが、闇一杯に鳴り響いた。逃げる影身に、追いつがった白木の三矢が、一髪の間には喰らい付く。

「何っ！」

松田の呻きに、低く跳ねた影身は、奥の藪中に跳び込んでいく。躊躇無く、大刀を捨てた秋津が、追って藪中に飛び込んだ。

激しい藪鳴りを尻目に、振り向いた松田の眼差しの先には、半弓を構えた久慈がいる。

「く、久慈っ、貴様！」

鈍く曇った白刃を引っさげたまま、松田は久慈に詰め寄った。

憤怒と鼻からの鮮血が、松田の形相を、鬼のそれに仕立てている。

「貴様、横から闇討ちなど………どういっ了見だ！」

「お前こそ、どういっ了見だ？」

「何を！」

弓を下ろした久慈は、傍らに置いたがندوقを拾い上げた。

「何をもって、そうできたのかは判らんが……折角、秋津さんが動きを封じてくれていたというのに、お前が飛び出し、射線を塞いでくれたおかげで、急所を外さざるを得なかった」

「奴は俺が……」

「殿の直命を忘れたのか？」

言に横面を張られて、松田が大きく息を呑んだ。

冷やかな久慈の眼差しが、さらに追い打つ。

「あの男、恐らく土族でも捕方でもあるまい。殿の直命を帯びながら、それを忘れて何処の馬の骨とも知れぬ奴と一騎打ち？ 貴様、それでも筑摩武士か！」

松田の奥歯が、ギリギリと食い縛られた。

「既に、笠原がやられている。一刻も早く屋敷に戻り、この事態を

御留守居役に報告せねば、如何な殿とて無傷では濟まん」

「し、しかしあの男、只者ではないぞ。あの捕物の事を知っているような口ぶりや、この闇中で我らを探し当て、追いつがる力。生かしておいては……」

「だから秋津さんが追った。仕留めるには及ばなかったが、俺の三矢は、確かに奴を射た。ならば、秋津さんの敵ではない」

腹を押さえて動かぬ小野にがんどうを向け、久慈は松田に言い捨てた。

「……小野を」

「ふんっ！」

大きく吐き捨て、踵を返した松田は、それでも刃を鞘に納めた。がんどうを拾い上げ、小野の元に向かう。

久慈は、中沢を探した。

「中沢」

「く、久慈さん……」

しわがれ声が闇に響き、火の光が揺れ動く。

駆け寄ると、中沢は大刀を杖に、自力で立ち上がっていた。

「喉か」

「ま、誠に不覚……ですが……」

「品は？」

中沢が、口中に指を突っ込んだ。

目を瞑り、探ると頷く。

「よし。歩けるか？」

激しく咳き込んだが、中沢は、頷いた。

と、その時。

「ぐあっ、あ、がはっ……」

「小野？ どうした小野っ！」

久慈と中沢が、悲鳴の方に、がんどうを振り向けた。

「どうした！」

火影に浮かんだ小野の体は、松田の肩にすがって震えていた。

いや、震えなどという生易しいものではない。

口から血を噴き、痙攣を始めた小野は、腕に筋を漲らせ、松田に抱きつき、そのままずると倒れ伏した。

「どうした!」

「解らん、突然……しつかりしろ、小野!」

「もしや!」

叫んだ中沢が、二人の側に寄ろうとした瞬間。

闇に籠った肉の相打つ響きと共に、甲高い絶叫が、その場の四影を貫いた。

濡れた何かが地を打ち、呻きとえずきが尾を引いて、ふつりと絶える。

「い、今のは……」

「秋津さんが、殺られた?」

久慈と中沢が、思わず目を見合わせた。

筑摩武者総代の中でも一、二を争い、風水をも斬り断つ術を駆使する秋津が、何者とも知れぬ影身に討たれた?

あまりの出来事に、寸時、脳裏が真っ白になる。

松田に支えられた小野の足が、傍らに落ちたがんどつを蹴る。

くるくると惑う火影の中、久慈の鋭い目が、松田の背後の藪を捉えた。

「松田つ、油断すなっ!」

「!」

しかし、間に合わなかった。

平常の松田なら、即座にかわしたであろう奇襲だったが、小野にすぎりつかれ、飛び退く事ができなかった。

鉄が肉を打ち、ひしゃげる音が響き渡る。

「うおっ……」

松田のおめきと、蠟と布地の焦げ付く臭気が、闇間に発止と飛び散った。

壊れきったがんどつが、がちやりと地に打ち捨てられ、蠟の油と

それを伝った小さな火舌が、松田をめらりと舐め上げる。

「うわ、ああ、あ、あーっ！」

「ま、松田っ……」

「松田さんっ！」

久慈も中沢も、陽射しの下であれば、即座に助けただろう。

しかし闇中に慣れた久慈達の目は、突然溢れた炎の光に眩みきり、先ずした事は、目を押さえ、数歩を退る事だった。

火が炎と成り、松田の体躯を抱き締める。

小野を投げ出し、引き攣った悲鳴を上げた松田は、そのまま数歩を踊り歩いた。

「わあ、あ、あっ……」

「くそっ！」

涙目を無理に開いた中沢が、火柱に手を差し伸べる。

と、突然。

擦れ踊った火柱が、ぎくりと身を振るわせると、そのままどうと倒れ込んだ。

背中に突き立った白い矢柄が、真っ黒に焼けてゆく。

「うっ……」

久慈は、こみ上げてくる呻きを呑んだ。

松田を喰い尽くさんとする炎の向こうに、今なお二矢を喰ったまま立つ、鳶茶の影身を見たのだ。

今は松田の背を穿つ一矢が、影身の額をかすめたのか。

巻き締めていた鳶茶の布が、切れ破れて解けかけている。

そしてその下に見えたは、縦に大きく抉れた、肉色の一眼。

その真中に据わった骨色の瞳が、ただ立ち尽くす久慈達を、きろりと見た。

「お、おのれっ……」

中沢が、呻いた。

弾かれた様に、久慈が弓を構える。

と、捻れるように影身が動き、己の肩を貫く一矢を、力任せに引

き抜いた。

息を呑む間に、足を穿つ一矢も引き抜く。むせるような赤い香りが闇間を奔り、強靱な矢柄二本が、枯れ木のようにへし折られた。

刹那。

燃える松田を飛び越えて、中沢が影身に詰め寄った。

「いえあつ！」

肉色の一眼を目掛け、銀の弧線が風の如くに撃ち下ろされる。

しかし影身は、刃風を寸でで躲しつつ、肘を真っ直ぐ突き伸べた。

「あつ！」

炎の光を煌かせながら、砕けた刃が闇に散る。

この刹那に、脇差を半ばまで抜く事ができたのは、中沢が単なる算盤侍ではなかった事に尽きよう。

しかし襲いくる第二撃を、防ぐには至らなかった。

戦慄を誘う、ぬるりと湿った肉撃つ響き。

今度こそ喉を潰され、血泡を噴いた中沢は、朽木のように倒れ伏した。

「く……」

呻いた久慈の全身に、冷たい汗が噴き出す。

松田、貴様の言う通りだったな?? 苗床となった松田を喰い尽くし、弱り始めた火影を見やった久慈は、顔を被った頭巾を取り払った。

携えた半弓を地に置くと、濃紺の羽織も脱ぎ、残り火の中に投げ入れる。

ふらりと揺れた緋色の光が、じっと動かぬ影身とその一帯を、再び赤黒く照らし出した。

久慈の切れ長の目に、火影の照りが揺れ動く。

「異国には、獅子すら突き殺す野鹿がいるというが……」

まるで昼日中の、空模様を語るように。

弦巻に残った弦を纏に使い、久慈は、再び得物を取り上げた。

迷う事無く一矢を番え、流れる仕草で弦を引く。
弦が弓弭を鳴らすと同時に、半歩退った影身の体軀が、きりきりとたわみ始めた。

知らずに出くわした獣であろうか、藪中に潜む何か、慌てて枝葉を踏み鳴らし、闇の奥へと逃げていく。

久慈が、ぽつりと言い挙げた。

「御名、承る」

「……………」

「筑摩真改流弓術。久慈 勘之介」

一つ大きな吸気を得て、影身が跳ねた。

久慈は静かに足を捌き、得意の間合いを作りあげる。

二つの影身が絡んだ瞬間、最後の火勢がぼうっと膨れ、ぱちんと弾けて霧散した。

闇の中に、雨の匂いが強まっている。

その香りに背を押される様に、樋池は小さながんどう一つだけを持ち、緑青林の中を進んでいた。

勿論、無茶な事との自覚はある。

せめて月星の明かりがあれば話は別だが、今はそれも見込めない。この状況では、同心仲間のほとんどが、林に一步、踏み入る事すらできないだろう。

しかし樋池は、古傷の都合で闇慣れしていたし、緑青林の事自体を、充分に知っていた。

犬達の遊び場として、気楽に行き来していた事が、幸いした形になる。

流石に全速力とはいかないが、手元の小さな灯りだけで、歩を進める事ができていた。

他の頼りは、時折吹き鳴らす犬笛に伝える、トサの遠吠え。

その音に耳を凝らし、記憶の道筋を辿りながら、樋池はひたすら進み続けた。

舟の事が、気にならない訳ではない。

しかし、沢山の部下とシバとさわが、必ず抜け荷の品を、見つけてくれる。

いや、これで見つからないとなれば、元の抜け荷情報自体が、偽物だったに違いない。

樋池は安堵すら覚えつつ、くわえた犬笛を吹き鳴らした。

そして、耳を澄ます。

トサの聲が、思ったより近い。

ボタ藪 と呼ばれている辺りだろうか。

位置を修正するために、もう一度犬笛を吹き鳴らそうとした刹那。

『どうしてお前が、ここにいる？』

闇からぶくりと浮き立つ様に、低く沈んだ声音が響いた。

ぎくりと震えた樋池の口角から、犬笛が落ちる。

思わず周囲を見回すが、がんだうの光だけでは、到底満足に見渡せない。

『どうした？ 怖いのか？』

再び響く、声音。

もはや、幻聴や聞き間違いではあり得なかった。

自分の識別がつく程の場所に、鹿郎が潜んでいる。

そして、こんな声で喋る時は、尋常の鹿郎ではない。

何故こんな処に、あの餓鬼が？ ？？溢れそうな呻きを必死に嚙

み殺しながら、樋池は、ゆっくりと息を吸った。

「鹿郎か？ お前、どこに……」

『そんな事は、どうでもいい。どうして、ここにいる？』

元々、歳の割には老けた処が多い餓鬼だが、それでも人が変わった重たい声が、闇間に重苦しく響く。

四方に気を配りつつ、樋池は応えた。

「何、ちよっと人探しをしていただけだ」

総毛立つ様な忍び笑いが、響き渡った。

「人探しかよ。そいつはご苦労なこったな。わざわざ囲みを解いて、逃がした奴等を追っている、か……」

「何故、そんな事を知っている？」

「馬鹿にするなよ。オレにだって、色々考えはある」

「ほほう。それは失礼したな」

何が可笑しいのか、くつくつと笑う声は、徐々に大きくなっていく。

「ま、ちょうどいい。直ぐその拓けた場所に、お前が追ってる仏が五つ、転がっている……よく調べてみるこった」

「私が追っている……仏、だと？」

「そいつら、只の雇われ浪人じゃない……この闇中で、オレに矢を中てた奴もいた」

背筋に、衝撃が走った。

やはりあの時、部下達を深追いさせなかったのは、正解だったのだ。

無理に囲みを続けていれば、今頃、とんでもない死体の山ができていたに違いない。

温い風が、全身の冷や汗を浮かび上がらせる。

忍び笑う声が、続けた。

「ふふ……中々、凄かったよ。ちよつと危なかった」

「という事は鹿郎、お前、今、怪我をして……」

「筑摩武士の恥さらし、とも言つてたな。でも一人、たった一打ちで死んだ奴がいたよ……そいつがきつと、何か隠している……」

「よし、判った。これ以降は私に任せて、姿を現せ」

「やなこつた。これ以上、お前なんかと関わり合いたくな」と、突然。

女の鋭い叱声が、闇を撃つて奔り抜けた。

「馬鹿者が！ ぐだぐだ言わず、とつと出てこいっ！」
がさりと、背後の藪が揺れる。

声より早く、身を翻した樋池の腕から、風切る音が放たれた。

「うぎゃっ！」

「捕った！」

叫ぶと同時に草地を抉り、跳ばした捕り縄をたぐりつつ、樋池が藪に飛び込む。

激しい組み打ちの総毛立つ響きが、闇を騒然と震わせた。

それを照らしたす松明の灯りと、けたたましい犬の吠え声。

甚五郎が掲げる松明の光が、それらを明るく照らし出す。

「樋池様！ 甚五郎にございます、どちらで！」

「こ、こつち、こつちだ！」

一際激しく藪が揺れ、ぐったりとした鹿郎と、それを捕らえた樋池が飛び出してきた。

刹那、さわが短い悲鳴を上げる。

火影の中の樋池は、体のあちこちを、赤黒く染めていた。

「樋池様っ、その血は！」

「まさか鹿郎に！」

「ああ、いやいや。私は一つも、怪我などしていません。全て返り血ですよ」

肩で息をしながら、樋池は鹿郎を地に置いた。

捕り縄に両手を縛られ、うずくまった鹿郎が、さらに小さく身を縮める。

我に返ったさわが、その傍らに駆け寄った。

「鹿郎っ！」

「さわ、か……」

「何をしてる。怪我したのか！」

「大した事は……」

「ないわけ無いでしょう。誰か、明かり……」

甚五郎が、素早く松明を差し出した。

逃げようともがく体を樋池が押さえつけ、さわの両手が鹿郎の頭を掴む。

もがいていた鹿郎が、悲鳴を上げて硬直した。その眉間からほぼ頭頂部まで、ざっくりと割れたまま、固まってしまった古傷が、炎の灯りを受け止める。

骨の白が瞳のように、対するさわを凝と見た。何故今、生きていられるのかが、判らない。

大抵の怪我を体験してきた二人の男が、直視できずに目を背けた。ひいひいと喘ぐ鹿郎が、ぼろぼろと泣き始める。

顔を染めて乾いた血が、溶ける様に薄れていった。

「痛いよう……ねえ、痛いつてば……」

「馬鹿だな、落ち着け。まだ何もしていないぞ？」

真つ直ぐに伸びたさわの腕が、樋池の腕から、震える鹿郎を奪い取った。

膝の上に抱き上げて、被さる様に抱き締める。

ひな鳥のような泣き声が、くぐもつて響き始めた。

「うぐ……ひつ、ぐ……えぐつ……」

「馬鹿者。物事を舐めて無茶を重ねるから、まとめてこんなに怖い目に遭う。いい薬だ、馬鹿者が……」

「う……ぐすつ……」

鹿郎を抱き締めていたさわの手が、その背中を擦り始めた。

そのままゆつくり、話し始める。

「よく聞きなさい、鹿郎。お前、運がいい。古傷の方に、変化は何もない。いじる必要もないし、誰にもいじらせはしない。大丈夫」

「で、でも……」

「古傷より少し横の処、眉の上辺りに、小さいけど傷がある。これが痛んでいるのだな」

「うつつ……」

鹿郎を膝に乗せたまま、さわは懐から刀子と布を取り出し、それを引き裂くと、鹿郎の額を覆い始めた。

「いてててて！」

「止血が終わったら、ここから直ぐに退きなさい。養生院まで戻っ

ていては間に合わない、銀洲の母屋に戻ったら、おはるちゃんに頼んで、駕籠で長春先生の医庵に……」

「嫌だっ！」

「黙りなさいっ！」

強い叱咤に、鹿郎が、首をすくめる。

その隙に、残り二つの傷を縛ったさわは、樋池の方を振り返った。

「樋池様、こいつを医庵に運ばないと……」

「甚五郎！」

「へいつ、母屋から、おはると一緒に長春先生の医庵でござんすね？」

「但し！」

さわの声に、甚五郎の動きが止まった。

「おはるちゃんと、手当を担当する方々に、必ずお伝えください。

新古に関わらず、頭部の傷には、いずれも手出し無用と……血は出ていますが、巧く骨に当たったようで、深くはありません。私が、手当しますので」

「へえ、しかし……」

「必ず……必ず、御願いますよ。そして申し訳ないんですが、私が行くまで、鹿郎の側に付いていてあげて下さい。見えずに怖がつて、暴れるかもしれません。おはるちゃん一人じゃ、ちよつと荷が重過ぎる」

「へ、へいつ」

甚五郎は、頷いた。

「さ、さわ……オレ……オレ……」

ガタガタと震えだした鹿郎を、さわは再び抱きしめた。耳元に口を寄せ、優しく囁く。

「聞いただろう？ 大丈夫。ここが終わったら、私も一番に向かうから……」

一擲。

短く呻いた鹿郎が、肩を使ってさわを突き飛ばした。

「ひっ！」

「うわっ……」

虚を突かれた甚五郎の脇をすり抜け、脱兎の如く、藪に向かって跳ねる。

と、両手を縛った捕り縄が、音を立てて張りつめた。

「っあ……」

鹿郎の体が、地に横ざまに、叩きつけられる。

生臭い、赤い臭いが発止と弾け、捕り縄の端を守った樋池が、大きく息を吐いた。

「化け物か、こいつ……」

「鹿郎っ……樋池様！」

「大丈夫、逃がしませんよ」

捕り縄を捌いた樋池は、鹿郎の足にも縄を回す。

鉄鎖も千切ろうとした体躯は、低く呻くのが、精一杯だった。

「これで、暫くは動けまい。だが、少しの間にすぎんぞ？」

「なあに、充分でさ」

遅しく言い放った甚五郎は、太腕で鹿郎の頭を抱き、耳をしつかりと塞いだ。

そして下げていた呼子をくわえると、力一杯吹き鳴らす。

耳を澄ますと、応えの呼子が響いた。

意外と、近い。

「あつしの手下どもが、直にこつちにくるでしょう。それまで申し訳ないが、そちらの灯りで御辛抱下せえ。では、御先に失礼いたしやす」

「頼む。さわ先生の言伝、忘れるな」

「合点で！」

ぐにやぐにやと揺れる鹿郎を、器用に背負った甚五郎は、松明を片手にかざすと、見る間に闇中に駆け去った。

シバの吠える甲高い声音が、闇をぴりぴりと震わせる。

その体を優しく抱き上げ、がندوقを拾った樋池は、さわの側に

歩み寄った。

「さわ先生？」

「あ、はい」

がんどうを差し向けると、顔をしかめたさわが見えた。

「甚五郎はともかく、どうして先生がこんな処へ？ 薬の鑑定を、お願いしていたはずですが……」

さわが、うつ、と息を呑んだ。

闇中でも充分伝わる、その落胆。

露骨なまでのその仕草に、樋池の肌身が粟立った。

「先生、まさか……」

「その、まさかです……捕方の方々も、シバも、舟に抜け荷の鰐は無い、と……」

「……………」

樋池の目が、鳴らんばかりに瞬いた。

砂が流れ落ちる様に、膝から力が抜けてゆく。

上体すらも、刹那にぐらりと揺れかけて、樋池は慌てて踏ん張った。

「抜け荷が……出なかつ、た？」

シバが樋池の腕から飛び降り、さわの背後に駆け込んだ。

ついぞお目にかかった事の無い、想像を超えた自失ぶりに、さわは慌てて言い継ぐ。

「いやその、拿捕したあの舟が、密抜け荷を扱う密輸舟というのは、きつと間違いじゃないんです。おきんさんの死相に至らしめるなら、非常識な量の鰐を、長期にわたって盛る必要がある。でもシバの鼻を信じるなら、舟に薬はない。なら出てくる結論は、一つしかない」

「あ奴らが、鰐を隠し持っている……」

最早樋池の全身は温い汗に塗れていたが、この闇中で、さわが気付くはずも無い。

ここぞとばかりに、さわは一生懸命、言い募った。

「樋池様が、あ奴らを追われていたのは、幸運でした。やっぱり仕事というものは、手を抜いたら駄目なのですね」

「……まあ、今はそういう事にしておきましょう……」
と、突然。

さわの背に隠れていたシバが、闇に向かってひゃんひゃんと吠え始めた。

「シバ？」

面を巡らせると、闇の向こうに炎の赤が蠢いている。

「あれは……」

さわの声が、頼もし気に響いた。

「甚五郎親分の、手下の方達です……本当に早い、これは助かった！」

甚五郎の手下達と合流して直ぐ、今度は捕方達が追い付いた。

お陰で今や緑青林は、篝火と松明、提灯などが入り乱れ、昼さながらに明るい。

そしてその、揺れる炎の灯りの下では、遺品の検分が行われていた。

捕方達の手で、軀から回収され、並べられた遺品群には、その着衣までが混じっている。

その傍らに立った樋池は、乾いた唇の皮をむしりながら、犬達の働きを、微動だにせず見守っていた。

傍らに控えたトサも、主の面を見上げるばかりだ。

この中の何処かに、鰐が隠されているはずなのだ。

時折、雨気の混じった温い風が、ゆったりと場を横切っていく。いつもは諦念しか呼び起さない温風も、今のこの場に限っては、明確極まる不幸の兆しととられている。

もし今、雨が降ってきたら。

大事な証拠を、洗い流してしまうかもしれない。

そしてもし、抜け荷の証拠である、鰐が発見できなかったら。小さなシバが、遺品の周りをうろつきながら、丹念に嗅ぎまわる。証拠を発見できなかった時の事を、努めて考えぬようにしているのだろう。

妙に高ぶった緊張間の元で、捕方達は、犬の一挙手一投足を、力を込めて見つめていた。

と、樋池が、そつと踵を返した。

捕方達の囲みを抜けて、少し離れた躯の安置場所を見やる。

そこには、犬と同じ勢いで、五つの遺体をじっと見つめるさわがいた。

「さわ先生」

突然の呼びかけに、さわは振り返る。

血に汚れた卵ノ花無地の筒袖が、炎の灯りに照り映える。

それを見て初めて、樋池は己も返り血を浴びていた事を思い出した。

日差しの下であれば、最早滑稽ですらあろう状況だが、笑いは一筋も浮かんでこない。

「樋池様？」

さわが、言い挙げた。

鰐が、出たので？　??そう、声音が訪ねている。

樋池は、静かに首を振った。

「そうですか……」

「そろそろ、覚悟を決めねばならない頃合いなのかもしれません、ね」

「大丈夫です」

「しかし……」

「鹿郎が、何かあると言った。だったらきつと何かがある。私達が、見落としているだけで……」

と、突然。

捕方達のどよめきに、樋池とさわが、振り向いた。

大勢の人垣を裂いて、シバがうろつると、こちらを目指してやってくる。

「し、シバ？」

踏み出そうとする樋池を、さわが素早く遮った。

通った鼻筋を、宙にひくひくと蠢かせ、こちらに向かってくるシバはそのまま、遺体に被せた筵の端を、くんくんと嗅ぎ始めた。

「な……」

樋池は、言葉を失った。

今この時まで、シバとトサが、自分の命を無視した事など、ただの一度も無かったのだから。

踏み出そうとした一步を、しかし再び強引に、さわが遮る。

「さわ先生？」

呟いた樋池の替わりに、さわが、一步を踏み出した。

軀に掛けられた筵を撥ね上げ、舐めんばかりに見つめ始める。

「さわ先生！」

思わず叫んだ樋池を無視して、さわは軀から目を離さず、続いて触診を始めた。

「さわ先生、一体何を……」

「検分ですよ。鰐を見つけないきゃ」

筵を払われた軀の喉は、元の形を留めぬ程に、ひしゃげ果てて潰れている。

さわが、ぽつりと呟いた。

「……これじゃないな」

「さ、さわ先生。これは、先生のお仕事では……」

さわに頼んだ仕事は、薬品の検出であって、骸を調べる事ではない。

が、樋池の言が聞こえないのか、さわは隣の筵に近づいた。

樋池が慌てて後を追う。

「さわ先生、これはもう……」

説破詰まった樋池の問いには応えず、さわは筵を跳ねた。

胸下の大穴に黒血をたたえ、一杯に見開かれた切れ長の目が、さわを迎える。

「これも、違う」

さわがまた、隣に移った。

筵を跳ねると、今度の軀には損壊が無い。

しかし、まだ幼げな顔立ちに激苦の様をくつきりと残していて、

樋池は刹那、眉をしかめた。

さわが、ぽつりと呟く。

「樋池様」

「何か？」

「他の遺体は、どのような……？」

樋池が口を挟む前に、軀を警護していた捕方の一人が言い挙げた。

「藪の中に、腹を突き抜かれた仏と、焼け死んだ仏が……側に焼け焦げたがندوقがあつたので、何らかの理由で、がندوقの火が衣類に回つたものかと」

「じゃあ、これだ」

さわは身を起こすと、軀の傍をうろろしているシバに声を投げた。

「シバ、シバ……これはどうかい？ コレだよ、コレコレ」

それをじっと見つめたシバは、ぷし、と鼻を鳴らし、トコトコと寄ってきた。

さわが指さす遺体を、ふんふんと嗅ぎまわる。

いつの間にか、捕方達が周囲を取り巻いていた。

そして、突然。

シバが尻尾を振り立てながら、ひゃんひゃんと鳴き始めた。

低いどよめきとざわめきが、その場一面にざざめく。

樋池の目が、鳴らんばかりに瞬いた。

当たり前といえば、当たり前だろう。

軀は既に下帯だけで、丸裸の状態なのだ。

何も隠していないのは、一目了然。

しかしさわは、軀の側に這いつくばった。

周囲の全てが見えないかの如く、舐めるように、体をじっと見つめていく。

樋池が、呻くように呟いた。

「さわ先生、もう……これ以上は、さわ先生がやる事では……」

「樋池様、そこをどいてください。影になって、よく見えない」

樋池は、数歩を退る。

傷の類はなかったが、腹部分に黒い痣のようなものがある。

きつとこれが、鹿郎の一打の後だろう。

「さわ先生？」

動揺を隠さず、樋池は辛うじて、声を絞った。

応えぬまま、さわは軀の脛を、指でこじ開ける。

「暗い……すみません、もっと明かりを」

「し、しかし……」

突然身を起こしたさわは、近くに立つ捕方の手から、松明を奪い取った。

呆気にとられる捕方をそのままに、軀の方に向き直る。

そしてそれを焼き潰す気なのか、さわは軀の剥き出しの眼に、熱い火影を近づけた。

数名の捕方が、堪えきれずに目を背ける。

最早、誰の声もない。

と、突然。

脛から手を退いたさわは、懐から刀子を取り出し、硬く食いしばられた歯と歯の間に突き立てた。

鋼が石質を削る深い響きが、やり場のない衝撃をかき立てる。

やがて軀の口角が、裂けんばかりにこじ開けられた。

幼さを残した面がぐらりと揺れて、炙られた瞳から、溜まった水気が引き落ちる。

その刹那。

「先生っ！」

激昂した樋池が、軀の面から、さわの手を払い除けた。

「何をするんです」

「もっお止めください！ これ以上は、仏に対して……」

舌打ちが、響いた。

真っ直ぐ伸ばしたさわの指が、軀の面を指し付ける。

「これは、単なる人の骸だ！ 断じて仏なんかじゃない……… 仏やら神やらいうものは、目に見えるもんじゃないでしょう！」

その場の全てが、置き去られた。

半夢のような静けさの中、さわはさっさと、こじ開けられた口の中を覗く。

「……あつた」

温い風と人の声が、火影にざわつと鳴り沸いた。

さわの指が、奈落のような軀の口に突き込まれ、ゆっくりと持ち上がる。

幾つもの視線と、呻きと、えずきに塗れて持ち上がったその指には、太く長く、真白な糸が揺れていた。

小さな尻尾を千切れんばかりに振り立てて、シバが猛然と吠えだした。

銀洲を舞台にした捕物騒ぎから、八日が経つ。

裏葉柳には、雨間に陽射しを見るような、空模様が続いていた。

今日も朝から小雨が降り続き、川面はおるか、大通りにも人気は少ない。

桑染の養生院に続く、緩やかな余命坂も、雨泥の匂いに満ち満ちていた。

脇に控える緑の木々も、心なしか、頂垂れているような??そんな景色を見下ろしながら、おはると樋池は、養生院の母屋と崖下の

離れをつなぐ、渡り廊下を歩いていく。

「さ、樋池様、こちらへどうぞ」

「そうやっている、随分と以前から、ここで働いているようですね」

「とんでもない。お給金が少ない上に、商家と色々流儀が違うから、毎日大変なのよねー」

座布団を抱えたおはるは、ヒラヒラと手を振った。

至極元氣に見えるけれども、まだ、あの高笑いは無い。

好き勝手に騒ぎ立てる世間に、銀洲御上召し上げの正式なお触れが出た、その事に、気分が沈みがちなのだろう。

しかし樋池は、樂觀していた。

御店が封印された後、頼る身内もなく、『ひとまずは……』と引き取った時。

その時に比べれば、見違えるほど元氣になったと安堵していた甚五郎の、嬉色は今でも忘れ得ない。

養生院の総務を司っていた、お汐という老女が亡くなり、院長が困っていたのを思い出せた事も良かった。

打ち込んで働く内に、忘れてゆく寂しさというものも、きっとあるはず。

やがて養生院の総務として、立派にやっていくだろう。

一揺れした雨模様が、薄くたゆたい、ふつりと消えた。

屋根はあれども、所々濡れてしまった板張りの階段を降りて、左に曲がる。

と、鹿郎が住まう、小さな離れが現れた。

「鹿郎っ、樋池様ですよっ」

おはるが、崖に密接して建てられた??というより、洞穴に木造りの戸口を建て付けたような、不思議な離れの引き戸を叩く。

「……おっ」

中から眠たげな、不機嫌そうな声が応えた。

モソモソと、動き回っている気配がする。

「私が入った方が、いいのでは？」

「院長から、甘やかすなつて言われてるし。少し、陽射しの下に出た方がいいし」

「陽射しも何も、雨ばつかじゃないか」

文句と一緒に、引き戸がかりりと開かれた。

鬱蒼とした面を取り繕うともせず、鹿郎が、ノソノソと出てくる。包帯だらけの体軀に紺の単衣を引っかけ、丁寧に繕われた座布団らしきものを持ち、これまた丁寧に繕われたはんてんを、重たげに肩に掛けていた。

白い包帯に巻かれた額が、妙に浮いて見える。

ふむ、と小さく息を吐いて、樋池は軽くうなずいた。

「それなりに、元気なようだな」

「……嫌みか、それは。熱が出て、大変だったんだぞ」

面を巡らせた鹿郎は、鹿鳴を一つ、響かせた。

そのまま、渡り廊下の柱を背に、座布団を放り投げ、その上につくまる。

すかさず、おはるがその隣に、手にした座布団を設えた。

「どうぞ、樋池様。後でお茶をお持ちしますね」

「ありがとう、おはるちゃん。でもおかまいなく……甚五郎と、ここで落ち合う予定ですので」

「あら、そうなんですか」

鹿郎が、首を傾げた。

「おい、おはる。さわはどうした？ つなぎはどうなっている」

「さわ先生なら回診よ。もう少ししたら、戻ってくるんじゃない？」

つなぎの方は、口入れ屋から若いの一人、臨時に雇って回してる」
「……………」

「んもう、拗ねちゃって。その怪我じゃ、しょうがないじゃない。

鹹になんなかっただけ、有り難いと……………」

「あっち行けっ」

「ふふふ……………では樋池様、ごゆっくりどうぞ」

「はい、色々ありがとうございます」

きちんと頭を下げたおはるは、軽やかに踵を返した。軽やかな足音が、遠退いてゆく。

樋池はちらりと鹿郎を見、そのまま瞑目した。

「それでもまあ、一応やつれたな、それなりに」

「結構堪えたぜ、今回は。おまけに、お汐ばあさん以上にこつるさいのが、一匹まとわりついてきちまったし……」

「残念だ。あのまま素直にくたばってれば、これ以上、私が面倒事を味わう事はなかったのにな」

「うるせえよ。あん時は、おめえやさわが、オレを強引に助けたんだろっ」

「おや、助かりたくなかったのか。だったらあのまま、放つときゃよかった。余計な事をして、悪かったよ」

「……オレが生きててお前が困るんなら、それもまたいいもんだな」
樋池は、せせら笑った。

「で？」

不機嫌なまま、鹿郎は呟く。

「先日は甚五郎親分が、お見舞いにきてくれたけど……お前は一体、何しにきたんだ？」

「院長に、改めてご挨拶とお詫びをね……後、御上の御沙汰を、持つてきた」

「ふーん。それって、どんなの？」

首を伸ばし、こちらに面を差し付けてくる。

その気安さに、樋池は呆れて息を吐いた。

「……怖くないのか？ お前が殺したのは、七十万の石高を誇る筑摩藩の士族五人……訴えられれば、楽に死ねる目は無いぞ？」

「ないない、それはない」

「何故、そう言い切れる？」

「筑摩がオレをしょっぴきたけりゃ、鰐の抜け荷で散々儲けた事と、武勇に聞こえた筑摩武士が、東育ちの見えずの町人に、徒手

で返り討ちにされた事実を認めにやならんのだぜ？　ありえねえよ」

気怠げに、鹿郎は、鼻で笑った。

樋池の眉間に、渋味が差す。

南の列強国の中でも、一、二を争う大国・筑摩ノ国を舐めきった態度は気になるが、しかし確かに、鹿郎の言う通りでもあった。

恐らくいざという時、抜け荷の　鰐　だけは死守すべく、練られたであろう妙案。

これが筑摩にとっては、最悪の仇となってしまうた。

まずは　鰐　を、蠟で覆った布袋に小分けする。

そして同じく、蠟で覆った長く太い糸で、口を嚴重に縛る。

これを船荷の何処かに隠して運んでもいいのだが、上前を跳ねよととする輩が心配だったり、万が一の手入れの際に、直ぐに没収されてしまう。

そこで忠誠厚く、頑強な筑摩武者の中でも、特に使える者を選び、その者の胃ノ腑を使って、運ぶ事を思いついた。

但し、単純に呑み込むだけだと、胃ノ腑に揉まれて薬が溶け出したり、腸に運ばれてしまったりするので、糸の端を、奥歯にしっかり結わえておく。

この仕掛けを暴いたのは、さわがおきんの骸に観ていた　鰐　の急性中毒症状と、筑摩武者達の口の中に残った、白い糸の切れ端だった。

手始めの、軽い一撃で死んだ武者が呑み込んでいた　鰐　は、袋が破れ、溶け消えてしまっていたが、他の遺体の胃ノ腑からは、綺麗に残った　鰐　入りの蠟袋が、人数分だけ発見されたのである。

樋池は直ぐさま、以上の事実を調書にまとめ、上司である与力の根岸源一郎に提出した。

勿論、根岸も時をおかず、御上の権限を持って、筑摩藩の留守居役を問い詰めている。

しかし返事はお決まりの、当藩与り知らぬ事??結局御上も、筑摩藩士を気取った身元不明の武士五人と、おきんに全てを負い被せ、

闇に葬るしかなかった。

「腰抜けめ」

唾棄した鹿郎の言い草に、樋池の肩が、大きく揺れる。しかし小さく息を吐き、鬢を優しく撫で付けた樋池は、夢見るように呟いた。

「まあ、御上の権限にも、限りがあるのでね」

「死人に口無しってか？」

「それが一番、簡単な処置だろう」

遠間に、雷の音が轟く。

たゆたう風に、強まり始めた雨の香りが、樋池の鼻にも理解できた。

と、突然。

「一つ、聞きたいんだが」

小首を傾げた鹿郎が、面を樋池に振り向けた。

声尻に、好奇の色が混ざっている。

嫌気を込めた眼差しで、樋池は鹿郎を見据えた。

「何だ？」

「邦介さんの行方は、判ったのかい？」

落ちてきた水滴が、床板を叩く。

再び、屋根。

三たび、崖岩。

続いて折り重なった雨粒は、やがて無数の白糸となり、ざあと音を奏で始めた。

小さく咳払った樋池は、鹿郎を見据えて言い挙げた。

「何故、そんな事を聞く？」

「オレ、ずーっと不思議に思ってたんだ。何故この件に、旦那さんが顔を出さないんだらうって。でも、あっちこっちの話を聞く内、何となーく、一筋仕上がった気がしてさ」

「どんな？」

鹿郎の身がむくりと起き上がった。

樋池に面を差し付けながら、小首を傾げて囁く。

「オレ、思ったんだけど……銀洲の抜け荷を密告したのって……実は、邦介じゃないのか？」

見えていれば、問いは重ねられなかっただろう。

無邪気な問いに、樋池は僅かにうつむいた。

「……何故、そう思う？」

「そう考えれば、大体の事が、しっくりくる」

「……………」

「噂じゃ随分な人格者だったようだが、本当にそうだったのかね？」

「何故、疑う？」

「もし邦介が、本当に噂されてる様な奴だったら……どうしておかしくなつてゆくおきんを、医師に診せなかったのか。自分が渡す薬が無ければ、もっと苦しむ事を知つてて、何故、失踪しちゃったのか」

「狂つたおきんを人目に晒すのが、堪え難かつたんだろう。ずっと世話をしてきたおきんの苦悶を見る内に、耐えられなくなり、失踪したとしたら？ そんなに不思議に事ではないと思うが」

「お前も、そんな事を言うのかあ」

不満を眉間に陰らせて、鹿郎は、小さく首を傾げた。

その面が、何かを思い出す様に、宙をフラフラと彷徨う。

樋池は思わず、言い挙げた。

「違つと思つているのか？」

「だつて、さわみたいな奴だつて、オレが痛いつて言うつと、ぎゅーつて抱っこしてくれて、しつこいくらいに色々面倒見てくれるんだぜ？ 腐れ縁でもそうなんだ、大事な人が苦しんでるんなら、なおさら……どんな醜態を晒してでも、楽にさせてあげようとするのが、一番最初にする事なんじゃないかなあ？」

樋池の胸に、ちよつとした感動と驚きが奔った。

この杳として底知れぬ、化け物じみたクソ餓鬼でも、そんな事を考えるのか。

あの暗闇の中、ガタガタと震えて泣き出す鹿郎を、返り血を浴びながら抱き締めた、さわの姿が脳裏を過る。

空が、がらがらつ、と爆ぜた。

爆音の轟きは、無限に広がる空一杯に、奔り抜けて散っていく。

樋池が、呟いた。

「……もう止めよう。当たっているかもしれないし、外れているかもしれない。けど今となつては、全て不毛だ」

「……知っているのに、教えてくれないのかよ。けち」

「けちじゃない」

樋池の鋭い舌打ちに、鹿郎は小首を傾げる。

敵しさのこもった声音で、樋池はてきばきと言い挙げた。

「筑摩藩と御上を敵に回し、たった一人で戦えるなら、何時でも教えてやる」

「それは……」

「密告者の名を知る者達が、姿を隠さず、のほほんとしていられるのは、奉行所の……御上の力があるからだ。この度の件には、あの筑摩藩が大きく関与している。しかし筑摩藩といえど、今のところ御上に表立って楯突く事はできない。だからこそ、こんなにのんびりしていられるんだよ。そうでなくば私など、とうに筑摩藩の者に殺されている」

流石の鹿郎が、鼻白んだ。

僅かに息を吐き、樋池は続けた。

「そして御上は、お前が指摘した通り、全てを死人に押し被せ、無かった事にするとした。今、この密告者の名を知る事は、それを覆す可能性のある者が生まれるという事。そんな者の存在を、御上が許すと思うか？」

不機嫌に頬を膨らませた鹿郎は、ぷいとそっぽを向いてしまった。

しかしそのまま、静かに呟く。

「……ま、いつか。オレの仕事は、何とか無事に終える事ができたんだから……」

樋池は再び、溜息を吐いた。

「それが一番いい。そこで納得しておいて、後はさっさと忘れてしまえ。一番大事なものは、守れたはずだろう」

「ああ。さわももう、忘れちまってるようだしな」

「さわ先生には、話すぞ？」

「……はあ？」

「さわ先生の名は、報告書にも検分書にも書かれている。この時点でさわ先生は、立派な御上の関係者だ」

「という事は……今の話、全部話す気か？」

「ああ」

「密告者の名も？」

「報告義務は、果たさねば」

突然、鹿郎が立ち上がった。

息を呑む樋池の前に、折り目正しく座り直す。

僅かに身を退く樋池に、己が膝を掴んだ鹿郎は言った。

「止めてくれ。いや、止めておけ」

「鹿郎、これはずるいとかずるくないとかいう問題では……」

「判ってる。けど、それはまずい。絶対に、まずい」

「……どういう意味だ？」

「いいから止めとけ。互いの……そうだなあ、友人として言う。止めておいた方がいい」

刹那、樋池は総毛立ったが、鹿郎は至って、真面目な顔を崩さない。

咳払いと共に、樋池は辛うじて声を絞った。

「理由は？」

鹿郎が、口を開いた時だった。

再び雷光が空に踊り、割れんばかりの轟音が、太やかな雨音を薙ぎ払う。

「言ったって、きつと信じないよ」

鹿郎は、溜め息混じりに呟いた。

樋池の眉間に、惑いが差す。

それが判るはずもないだろうに、鹿郎が、ふと微笑んだ。

澄んだ蛙声がふつりと絶えて、遠間から、軽やかな足音が近づいてくる。

「おはるちゃん？」

樋池が振り向くと同時に、角を曲がった、おはるの姿が現れた。

こちらを見ていた樋池を見て、生温く微笑む。

「……樋池様。今、鹿郎みたいな事、しましたね？」

「い、いや、偶然ですよ、偶然」

慌てた樋池は、思わず正座し直した。

小さく咳払う。

「で……ひよつとして、甚五郎が？」

「はいな。今、土間の方で、トサとシバと遊んでらっしゃいます」

「はいはい、判りました」

傍らの大刀を取り上げ、片膝を立てる。

併せて立ち上がった鹿郎が、止めとばかりに言い放った。

「言っんじゃないぞ」

「そこまで言われて、言う者がいると？」

きよとんとした鹿郎は、ぶうつ、と派手に吹き出した。

「うん、うん……いるかもなあ。以外と身近に、さ」

身をよじって笑う鹿郎を見下ろし、樋池は暫し、目を閉じた。

同い年と比べて苦勞はしてはいるが、鹿郎は、まだ子供だ。

自分が戸惑いを感じ、取り立てて迷うような事ではないはずだった。

そのままさわに、全てを報告するのが、正しい筋に違いないのだが、樋池はじろりと鹿郎を睨むと、大きな溜息を吐いた。

刹那、自らが負け墜ちたような目眩を堪え、わざとぶつんと言いついて捨てる。

「……判った。さわ先生には、この件、評定所召し上げになったのみ……残りは全て、伏せておく」

樋池を見上げるおはるの目が、鳴らんばかりに瞬く。

口元を拭いながら、鹿郎は、背筋を伸ばした。

「やっぱり、お前は賢いよ」

「ったく……」

「樋池様？」

「あ、はいはい、只今」

樋池がにこりと微笑した。

こちらにも、にこりと笑って応えたおはるは、鹿郎の方に向き直った。

「鹿郎は、どうする？ 床に戻る？」

「いや、もう少しここにいるよ。思ったより、気持ちがいい」

「うん、少しそうした方が良いつて。風が冷たくなってきたら、戻るんだよ」

「はいはい」

「じゃあな、鹿郎」

「ああ」

安らかな溜め息をついた鹿郎は、座布団に座り込むと、はんとんの襟に首を埋める。

おはるが、首を傾げる樋池の先を歩き始めた。

「あと樋池様、院長先生が、お話があるつて。樋池様のお話ついでに、甚五郎親分と一緒に、聞いて欲しいつて仰ってましたよ」

「お話ですか？ 何なんでしょうね……」

雨模様が風に揺れ、紗のようにたゆたう。

振り返る代わりに、樋池は耳を澄ましたが、鹿鳴はついに聞こえなかった。

再びの、浅い眠りについたのでだろう。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2548z/>

闇牡鹿、跳ねる！

2011年12月9日00時52分発行